

藤島 D 遺跡
発掘調査報告書

2001

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

藤島 D 遺跡
発掘調査報告書

平成13年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



第1次調査区全景（空中写真）



第2次調査C区全景（空中写真）



第2次調査D区全景（空中写真）

卷頭圖版2



前：青磁坏，后：染付坏



上：壺・甕，下：皿

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した藤島D遺跡の調査成果をまとめたものです。

藤島D遺跡は山形県の北西部に位置する藤島町にあります。月山を源流とする藤島川は町内の中央部を南北に縦断し、流域に肥沃な耕地を広げ日本有数の稻作地帯なっています。また庄内平野の中心部に位置するため、古くから交通の要として発展してきた所でもあります。

この度、都市計画街路事業藤島駅笹花線の改良に伴い、工事に先立って藤島D遺跡の発掘調査を2ヶ年にわたり実施しました。

調査では、近世を主体とした遺構が確認され、これら遺構に伴って陶磁器などの多様な遺物が出土しました。出土品からは当時の人々の生活を伺うことができ、生産地や流通を探ることができます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が埋蔵文化財保護の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成13年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は都市計画街路事業藤島駅笹花線に係る「藤島D遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県庄内支庁建設部道路計画課の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

| | |
|---------|----------------------------------------------------------------|
| 遺　跡　名 | 藤島D遺跡　平成9年度登録 |
| 所　在　地 | 山形県東田川郡藤島町中町 |
| 調　査　主　体 | 財団法人山形県埋蔵文化財センター |
| 受　託　期　間 | 平成10年4月1日～平成13年3月31日 |
| 現　地　調　査 | 平成10年9月16日～平成10年10月30日（第1次調査） |
| 調査担当者 | 調査第一課長　野尻　侃（調査主任） 主任調査研究員　尾形　與典 調査研究員　須賀井新人 調査員　多田　和弘 |
| 現　地　調　査 | 平成11年9月13日～平成11年11月19日（第2次調査） |
| 調査担当者 | 調査第一課長　野尻　侃 調査研究員　須賀井新人（調査主任） 調査員　多田　和弘 |
- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁建設部道路計画課、山形県教育庁文化財課、藤島町教育委員会、庄内教育事務所等関係機関の協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は野尻侃・須賀井新人・多田和弘が担当した。編集は高桑弘美・犬飼透が担当し、全体については野尻が監修した。
- 6 委託業務は下記のとおりである。

| |
|----------------------------------|
| 遺構の写真測量については、株式会社シン技術コンサルに委託した。 |
| 木製品の保存処理については、帝京大学山梨文化財研究所に委託した。 |
- 7 出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S E……井戸跡 S K……土坑 S D……溝状遺構 S X……性格不明遺構
S P……柱穴 R P……登録土器 R W……登録木製品

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

- (1) 調査区概要図・遺構配置図・遺構実測図中的方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、N-21° 00' -Eを測る。
- (3) 遺構実測図は1/40・1/80・1/300縮尺で採録し、各々にスケールを付した。
- (4) 遺構実測図の土層断面中において、Sは礫石を、Wは木材を表す。
- (5) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。
- (6) 遺物実測図・拓影図は1/2・1/3・1/6で採録し、各々にスケールを付した。遺物図版については、1/3を基本としたが一部は任意の縮尺である。
- (7) 陶器拓影図で、器表面の拓本を断面左側に、器裏面の拓本は断面右側に表した。
- (8) 遺物実測図（木製品）の漆器には2種のスクリントーンを付し、濃淡により赤漆（濃）と黒漆（淡）を区別した。
- (9) 遺物観察表の出土地点欄で「F」は遺構覆土内出土を示し、底面密着のものは「Y」で表記した。また、計測値の（ ）内数値は残存値を示している。
- (10) 遺構覆土の色調の記載については、1994年版の農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

目 次

| | |
|-------------|----|
| I 調査の経緯 | |
| 1 調査に至る経過 | 1 |
| 2 調査の方法と経過 | 1 |
| II 遺跡の概観 | |
| 1 地理的概要 | 3 |
| 2 歴史的概要 | 3 |
| III 検出遺構 | |
| 1 遺構の分布 | 6 |
| 2 第1次調査検出遺構 | 6 |
| 3 第2次調査検出遺構 | 19 |
| IV 出土遺物 | |
| 1 第1次調査出土遺物 | 26 |
| 2 第2次調査出土遺物 | 41 |
| 3 木製品 | 41 |
| V まとめと考察 | 62 |
| 報告書抄録 | 64 |

表

| | |
|---------------------|----|
| 表1 調査工程表 | 2 |
| 表2 藤島城変遷表 | 5 |
| 表3 第1次調査出土遺物観察表(1) | 55 |
| 表4 第1次調査出土遺物観察表(2) | 56 |
| 表5 第1次調査出土遺物観察表(3) | 57 |
| 表6 第1次調査出土遺物観察表(4) | 58 |
| 表7 第2次調査出土遺物観察表(5) | 59 |
| 表8 第2次調査出土遺物観察表(1) | 59 |
| 表9 第2次調査出土遺物観察表(2) | 60 |
| 表10 第2次調査出土遺物観察表(3) | 61 |
| 表11 木製品観察表 | 61 |

挿 図

| | |
|----------------------|----|
| 第1図 遺跡位置図..... | 3 |
| 第2図 調査概要図..... | 4 |
| 第3図 遺構配置図..... | 7 |
| 第4図 遺構実測図 (1)..... | 10 |
| 第5図 遺構実測図 (2)..... | 11 |
| 第6図 遺構実測図 (3)..... | 12 |
| 第7図 遺構実測図 (4)..... | 13 |
| 第8図 遺構実測図 (5)..... | 14 |
| 第9図 遺構実測図 (6)..... | 15 |
| 第10図 遺構実測図 (7)..... | 16 |
| 第11図 遺構実測図 (8)..... | 17 |
| 第12図 遺構実測図 (9)..... | 18 |
| 第13図 遺構実測図 (10)..... | 20 |
| 第14図 遺構実測図 (11)..... | 21 |
| 第15図 遺構実測図 (12)..... | 22 |
| 第16図 遺構実測図 (13)..... | 23 |
| 第17図 遺構実測図 (14)..... | 24 |
| 第18図 遺構実測図 (15)..... | 25 |
| 第19図 遺物実測図 (1)..... | 28 |
| 第20図 遺物実測図 (2)..... | 29 |
| 第21図 遺物実測図 (3)..... | 30 |
| 第22図 遺物実測図 (4)..... | 31 |
| 第23図 遺物実測図 (5)..... | 32 |
| 第24図 遺物実測図 (6)..... | 33 |
| 第25図 遺物実測図 (7)..... | 34 |
| 第26図 遺物実測図 (8)..... | 35 |
| 第27図 遺物実測図 (9)..... | 36 |
| 第28図 遺物実測図 (10)..... | 37 |
| 第29図 遺物実測図 (11)..... | 38 |
| 第30図 遺物実測図 (12)..... | 39 |
| 第31図 遺物実測図 (13)..... | 40 |
| 第32図 遺物実測図 (14)..... | 43 |
| 第33図 遺物実測図 (15)..... | 44 |
| 第34図 遺物実測図 (16)..... | 45 |
| 第35図 遺物実測図 (17)..... | 46 |
| 第36図 遺物実測図 (18)..... | 47 |
| 第37図 遺物実測図 (19)..... | 48 |
| 第38図 遺物実測図 (20)..... | 49 |
| 第39図 遺物実測図 (21)..... | 50 |
| 第40図 遺物実測図 (22)..... | 51 |
| 第41図 遺物実測図 (23)..... | 52 |
| 第42図 遺物実測図 (24)..... | 53 |
| 第43図 遺物実測図 (25)..... | 54 |

図 版

卷頭図版 1 第2次調査区全景 他
卷頭図版 2 青磁・染付 他

- 図版1 第1次調査区全景
図版2 調査状況 他
図版3 A区完掘状況 他
図版4 S E71土層断面 他
図版5 S D76土層断面 他
図版6 S K33土層断面 他
図版7 S P92土層断面 他
図版8 S K39遺物出土状況 他
図版9 S X107遺物出土状況 他
図版10 C区以降検出状況 他
図版11 S D222完掘状況 他
図版12 S D205完掘状況 他
図版13 D区遺物出土状況 他
図版14 D区水路跡検出状況 他
図版15 S K201土層断面 他
図版16 S K241土層断面 他
図版17 第1次調査 陶器 (1)
図版18 第1次調査 陶器 (1)

- 図版19 第1次調査 陶器 (3)・磁器 (1)
図版20 第1次調査 磁器 (2)
図版21 第1次調査 磁器 (3)
図版22 第1次調査 磁器 (4)
図版23 第1次調査 磁器 5・かわらけ・
土器 (1)
図版24 第1次調査 土器 (2)
図版25 第1次調査 土器 (3)・土製品・
石製品・貨幣
図版26 第2次調査 陶器 (1)
図版27 第2次調査 陶器 (2)・磁器 (1)
図版28 第2次調査 磁器 (2)
図版29 第2次調査 磁器 (3)
図版30 第2次調査 磁器 (4)
図版31 第2次調査 磁器 (5)
図版32 第2次調査 磁器 (6)・土器・石
製品・骨格器
図版33 木製品

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

藤島D遺跡は、都市計画街路事業藤島駅笹花線にかかる埋蔵文化財の分布調査により、平成9年度にその存在が確認された。試掘調査を実施した県教育委員会は、事業計画に変更がなければ遺跡の保存協議が必要になる旨の所見を、事業主体である庄内支庁建設部道路計画課に報告した。その後、事業計画と遺跡の取り扱い等について協議を重ねた結果、計画路線の変更が不可能なことから、発掘調査による遺跡の記録保存を図ることで調整が進められた。そして事業の進捗に併せ、平成10年度に事業実施予定地にかかる第1次調査を、翌11年度にこれに継続する事業区を対象にした第2次調査を実施すること運びとなった。

遺跡発見の契機となった平成9年度の分布調査では、過去の整地等が原因して遺跡の主体時期と考えられる中世の遺物包含層は、ほとんど削平されて遺存していないものと推測された。しかし、遺跡は「藤島城跡」の東側に位置し、東側の堀跡外側にほぼ隣接する地点と想定されることから、南北朝時代から戦国時代を経て近世にわたる遺構が存在すると予想された。

発掘調査に至るまでの協議等は以下のとおりである。

- ◆山形県知事より県埋蔵文化財センター理事長あてに、「藤島駅笹花線都市計画街路事業の実施に伴う地区内の埋蔵文化財発掘調査」の依頼(H11/2)
- ◆県埋蔵文化財センター理事長より山形県知事あてに、発掘調査を実施すること及び経費見積りの回答(H11/3)
- ◆県土木部管理課と県埋蔵文化財センターとで「埋蔵物発掘調査業務の委託契約」を締結(H11/4/1)

2 調査の方法と経過

《第1次調査》

現地調査期間は平成10年9月16日から10月30までの31日間である。調査対象面積は880m²であり、東西に長い調査区のほぼ中央を排水路が南北方向に縦断することから、これを境に東側をA区、西側をB区と呼称した。当初の計画では調査区全域について同時進行する予定であったが、一部がB区にかかる藤島郵便局移設工事の遅れによりA区を先行、B区は工事完了しだい着手する工程に改めた。

A区は9月17日からの表土除去後に、計画路線のセンター杭を基準とした方眼区割りを行った。その後、面整理を繰り返して遺構検出に努めたが、北上した台風の影響を受けて降雨の日が続いたため、排水を繰り返しながら地区毎にプランを確認し掘り下げを実施していく。郵便局の移設が終了したのを受け、遺構精査と併行しながら9月30日よりB区の表土除去を開始した。B区は10月5日～7日にかけ遺構検出を行い、8日からはA・B区とも遺構の掘り下げに専念した。各遺構の埋積状況を記録しながら掘り進め、27日までに大半の遺構について完掘できた。28日には委託業務として遺構の写真測量を実施している。この間、13日に藤島町文化財調査委員会の現地視察があり、28日には事業者および町教育委員会等の

関係者を対象にした調査説明会を開催した。29日に遺構内出土遺物を取り上げた後、現地引き渡しを行って30日に調査を終了した。

《第2次調査》

第2次調査では事業範囲のうち、現道を含む1,400mを対象とした。発掘調査により交通を遮断できないことから、調査区内を二分割して県道の通行を確保しながら交互に調査する方法を採った。現地調査は平成11年9月13日から開始し、主に現道の拡幅部分に当たる計画路線の北側を先に実施した。北側区域(C区)にも現道の一部が含まれており、舗装の撤去等が未施工なことから、県道以外の部分を先行して調査した。調査区は家屋への出入り通路や排水路を残しながら設定しなければならず、また現道地下に埋設された水道・ガス管等の存在から、調査区内を6カ所に細分している。プラン検出後、9月28日から遺構精査に入った。土層断面図等の諸記録を行いながら、10月8日にこの区域の調査を終了している。

現地引き渡し後、この北側部分に現道に替わる仮設道路の取り付け工事を経て、約1ヶ月後の11月2日より南側区域(D区)の調査を再開した。C区同様に周辺宅地への通路の確保、あるいは地下埋設物により掘削部分を分断せざるを得ず、調査区全体の内容が把握しづらい現状であった。5分割したD区では、東側部分がすでに地山面まで破壊されており遺構検出が不可能なことから、状況確認後にこの部分の埋め戻しを行っている。断片的ながら中央部から西側について調査を進め、掘り下げがほぼ終了した11月16日に調査説明会を実施した後、19日までに諸記録を終えて現地調査を完了した。

表1 調査工程表

| | | 月 | 9月 | | | 10月 | | | 11月 | | |
|-----------|-----------|------|----|---|---|-----|---|---|-----|---|---|
| | | 作業内容 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |
| 第1次 調査 | 表土除去 | | | | | | | | | | |
| | グリット設定 | | | | | | | | | | |
| | 面整理・遺構検出 | | | | | | | | | | |
| | 遺構精査 | | | | | | | | | | |
| | 記録(作図・写真) | | | | | | | | | | |
| | 写真測量(委託) | | | | | | | | | | |
| | 調査説明会 | | | | | | | | | | |
| 第2次 調査 | トレンチ調査 | | | | | | | | | | |
| | 表土除去 | | | | | | | | | | |
| | グリット設定 | | | | | | | | | | |
| | 面整理・遺構検出 | | | | | | | | | | |
| | 遺構精査 | | | | | | | | | | |
| | 記録(作図・写真) | | | | | | | | | | |
| | 写真測量(委託) | | | | | | | | | | |
| 調査説明会 | | | | | | | | | | | |

II 遺跡の概観

1 地理的概要

遺跡は藤島町の市街地である中町に所在する。現在の地目は主に宅地となっており、標高約12mを測る。藤島町は山形県の北西に広がる庄内地方のほぼ中央に位置し、町域の大半は平野部でその面積は約4,000haに及ぶ。特に西部域は赤川・藤島川・京田川などによって潤された広大な河間低地を形成しており、この肥沃な耕地を利用して日本有数の稻作地帯となっている。町の南東部には出羽三山の羽黒山や月山を望み、その月山を源流とする藤島川は、町内の中央部を蛇行しながら北流して京田川に合流、さらに河口付近で最上川と合流して日本海に注ぐ。藤島川の中・下流域では自然堤防状の地形が発達しており、周辺には縄文時代から近世までの遺跡が数多く確認されている。

現在の表層分布から庄内平野は第三期の末まで入江であったが、土地の上昇と諸河川の下流における扇状地の形成と相まって、河口付近に多くの土砂が堆積した。このため三角州が発達するに至り、基盤層は第四期沖積層の地質を呈している。

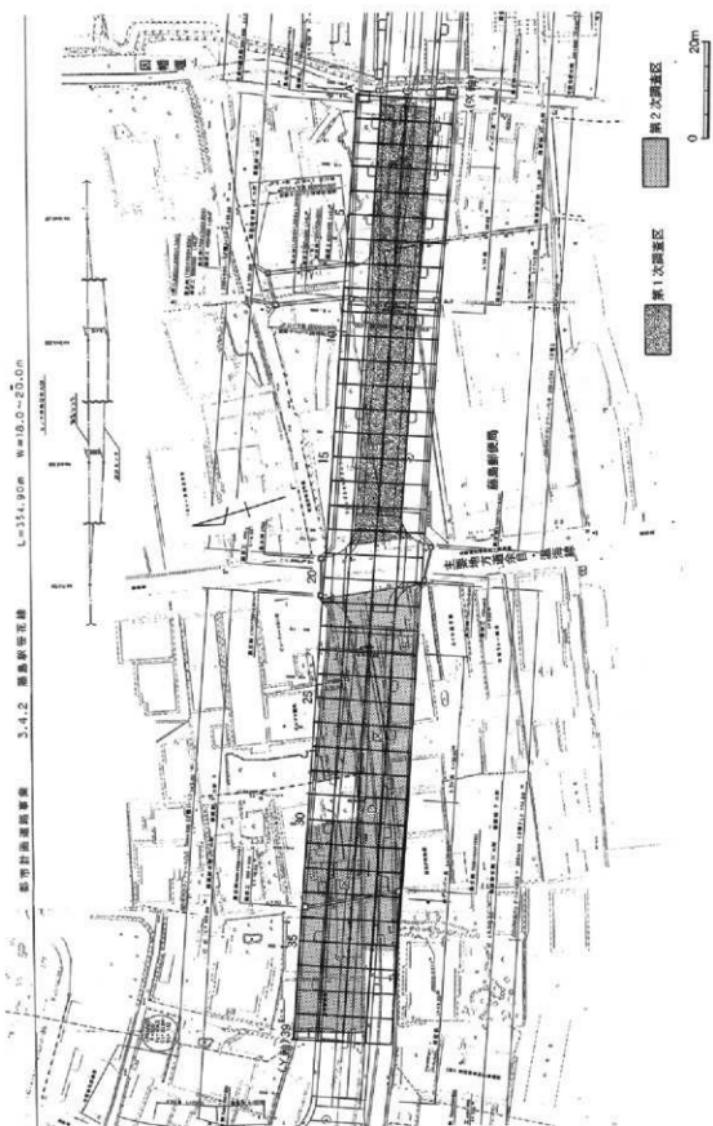
2 歴史的概要

藤島町域で今までに確認・登録されている遺跡は50箇所余を数える。その内、奈良・平安時代以降の遺跡は藤島川周辺に集中している。藤島の地は古代から陸上交通の要であり、諸方面に通じる道路が発達していた。また、陸路のみならず藤島川による水運も開けており、北上すると最上川に合流するため、酒田港を通じて諸国との交流が盛んに行われていた。こ



第1図 遺跡位置図(国土地理院発行5万分の1地形図「鶴岡」を使用)

遺跡の概観



第2図 調査区概要図 (S = 1 : 1,000)

のように水陸交通の要衝として、また穀倉地帯の中心的拠点として好条件を備えた立地環境であったと言える。

こうした理由から、南北朝および戦国時代には戦略上の重要な拠点として激しい領地争いが繰り返された。14世紀前半、この地の防衛拠点として藤島川を堀の一部とした藤島城が築城された。南北朝時代には南朝方の葉室氏の支配下に置かれ、北朝方の上杉氏と合戦を繰り広げていた。14世紀中葉には地元豪族である土佐林道俊が藤島城主に任命され、室町時代の終盤に武藤氏との争いに敗れるまで土佐林氏が支配した。しかし、武藤氏は山形の最上義光に滅ぼされ豊臣秀吉の命により上杉氏の所領になるなど、16世紀後半には目まぐるしく領主が交替している。そして関ヶ原合戦の際、義光は上杉氏の所領であった庄内を攻略し、そのまま領主となって家臣の新闖因幡守を藤島城主に据えた。因幡守は灌漑施設の開発に力を入れ、藤島城の東側に位置する因幡堰をはじめ多くの堰を開拓している。その後、1615年の一国一城令により廃城となり、藤島は最上氏の改易のち鶴ヶ岡城主の酒井氏の所領となった。

藤島城跡の発掘調査はこれまで6次に亘り行われている。出土遺物には茶臼や火薬の調合の際に使われたと考えられる石臼などがあり、中世の武家社会の様相を彷彿とさせる。現在は県立庄内農業高校として利用されており、本遺跡はその南東に隣接する位置関係にある。藤島川を挟んだ対岸には慶長年間の藤島城籠城の際に築かれたと伝わる向館跡、また南方には土塁の一部が残存する法眼寺館跡があり、藤島城の防御強化の支城であったと考えられている。

表2 藤島城変遷表

| 年号 | 西暦 | ことがら | 城主家 |
|--------|-------|----------------------------------------------------|------|
| 不詳 | | 藤島城創築される 詳細は不明 | 不明 |
| 興國2年 | 1341 | 葉室光世、秋田城介に任せられ藤島城に入部する | 葉室氏 |
| 興國5年 | 1344 | 北朝方の上杉憲顯により藤島城陥落する 葉室光世戦死 | |
| 興國6年 | 1345 | 葉室光久(葉室光世の弟) 藤島城に入る | |
| 正平11年 | 1356 | 北畠頼信、藤島城にて挙兵 南朝方の拠点となる | 土佐林氏 |
| 正平12年頃 | 1357? | 土佐林道俊、藤島城主となる | |
| 文安2年頃 | 1445? | 土佐林氏光、羽黒山別当職を兼任 羽黒山本社を修造 | |
| 永禄2年頃 | 1559? | 土佐林清助、武藤氏に股肱の臣として取り立てられる | |
| 元亀元年頃 | 1570? | 土佐林輝揮、武藤(大宝寺) 義氏との争いに敗れる | |
| 天正7年 | 1579 | 武藤義興、藤島城に入る | 武藤氏 |
| 天正11年 | 1583 | 武藤義氏、最上義光と内通する者の謀反により自刃する 武藤義興は尾浦城に移る | |
| 天正15年 | 1587 | 最上義光、庄内を猛攻する 尾浦城陥落し、武藤義興自刃する | |
| 天正16年 | 1588 | 最上義光、豊臣秀吉より庄内の領有を認められる | |
| 天正18年 | 1590 | 秀吉、上杉景勝に遊佐・櫛引・田川の支配を命じ、検地を実施する 厳しい検地に対して一揆が発生する | 上杉氏 |
| 天正19年 | 1591 | 藤島城に金右馬允が籠城するが、一揆を鎮圧される | |
| 慶長5年 | 1600 | 徳川家康、各地の大名に上杉攻めを命じる。 最上義光、庄内を攻め落とす | |
| 慶長6年 | 1601 | 最上義光、関ヶ原の戦いの戦功として庄内を加増され、藤島城主として新闖因幡守を配する | 最上氏 |
| 慶長12年 | 1607 | 新闖因幡守、藤島領に堰(因幡堰) を開削する事業に着手する | |
| 元和元年 | 1615 | 「一国一城令」により、藤島城が廃城となる | |

資料 藤島城跡第2次調査報告書より

III 検出遺構

1 遺構の分布(第3図)

第1次調査区(A・B区)では、遺構の集中箇所が2箇所で認められた。すなわち、A区東半部とB区中央東寄りの区域である。この部分は地盤が安定しており、他の希薄区域と比較すれば微高地状を呈していると認識できた。特にB区西半は西へ向って地山層が徐々に落ち込んでおり、厚い整地層が堆積する状況であった。検出された主な遺構は、井戸跡2基・溝状遺構12条・土坑46基などである。これら遺構にはかなりの重複が認められ、また宅地の基礎や近代の搅乱等により一部破壊を受ける部分もあった。なお、遺構確認面までの基本層序は表土=整地層(I層)、旧耕作土(II層)、部分的に遺存する遺物包含層(III層)の3層順が識別できた。

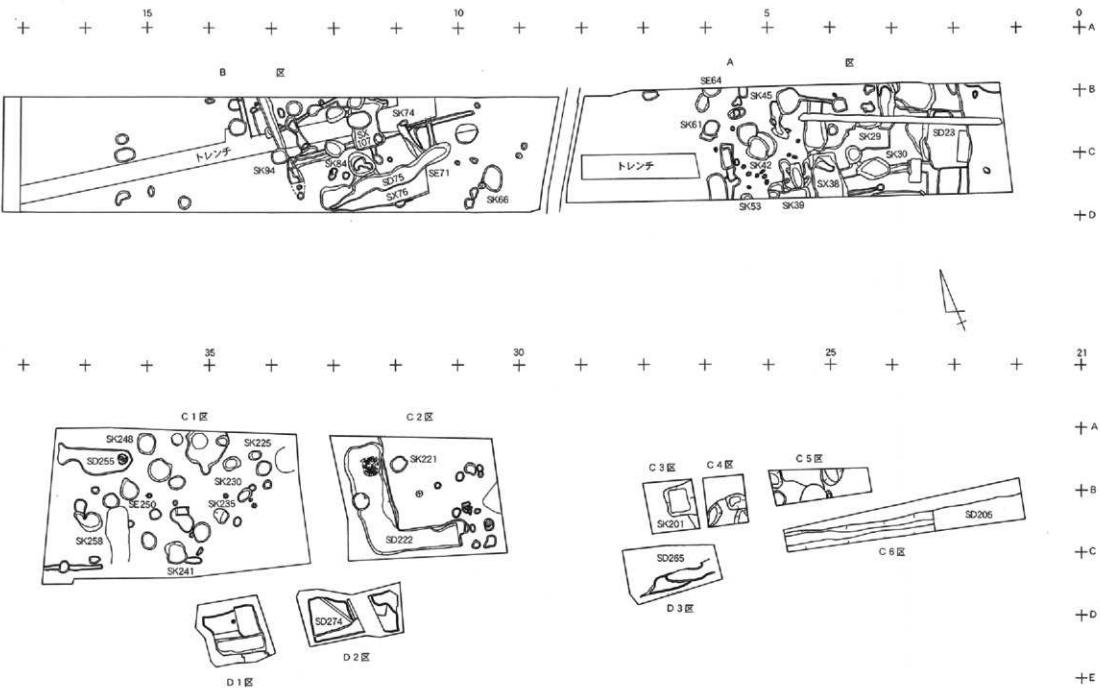
第2次調査区(C・D区)は埋設物や通路確保等のため、調査区を分断して設定せざるを得なかつたことから、遺構の分布も判然と捉えられなかつた。1次調査区に隣接する東側(C6区)は地盤が低く、性格不明な落ち込みやが多い。また、南側(D区)は調査区域の制限もあり、連続しない東西方向の溝状遺構を認めるのみであった。したがつて、面的広がりからある程度のまとまりとして把握できたのは北西部(C1・2区)に限られた。この区域を主体に登録した遺構は、井戸跡1基・溝状遺構6条・土坑53基などである。北西域では遺構群に重複関係がさほど認められず、近接した時期での構築と判断された。

2 第1次調査検出遺構

井戸跡(第4図) 調査で井戸跡と確認されたのは、S E64とS E71の2基である。

S E64はA区北辺A-5グリッドに位置する井戸跡で、北半部が調査区外にかかるため半円状のプランで検出した。掘り方は未検出部を含め、直径150cm程の円形を呈すると推定される。深さは確認面から40cm余と浅く、中央部が一段深く掘り込まれる形態を呈し、この部分に井戸眼と理解される木製品が据えられていた。井戸眼は長さ約15cmの短い板を桶状に組んだ構造のもので、9枚の板で半円を形成しており、外周は竹製のタガが巻かれていた。掘り方の中央部はこの外径に合わせて窄められており、井戸眼の大きさは径100cmを測る。掘り込みは浅いものの掘り方底面の地山層は砂質で、調査中も湧水を認めた。

S E71はB区東寄りのB-10グリッドにおいて検出され、木製井戸眼および竹製水道管の施設を持つ井戸跡である。プラン確認時は検出長11m・幅100cm内外の溝状遺構と認識されたが、掘り下げにより東端部に井戸眼を据えた井戸施設を埋設する掘り方と判明した。掘り方の深さは検出面から約80cmを測り、井戸眼設置部で底面が北上がりに傾斜している。井戸眼には径・高さとも60cm程の木樽を用いている。樽に底板は伴わなかったが、内部に一回り小径の底板が遺存していた。樽は幅10cm内外の側板19枚で一周し、上中下3段のタガによって組み止めている。下方には竹管を通すための円孔が2箇所に開けられており、北と西方向に竹管を継いだ水道が確認された。また、これら取出口とは別にその中間部(北西方)にも円孔が設けられ、木製の栓により塞がれていた。掘り下げ面付近は常に湧水があり、覆土は黒褐色基調の砂質土である。遺物は磁器片が数点と、井戸眼内の覆土から寛永通宝1点が出土している。



第3図 造構配置図 (S=1:300)

0 10m

溝状遺構(第5・6図) 12条登録した内、ここではS D23・24とS D75、およびS D75と重複するS X76について概述する。

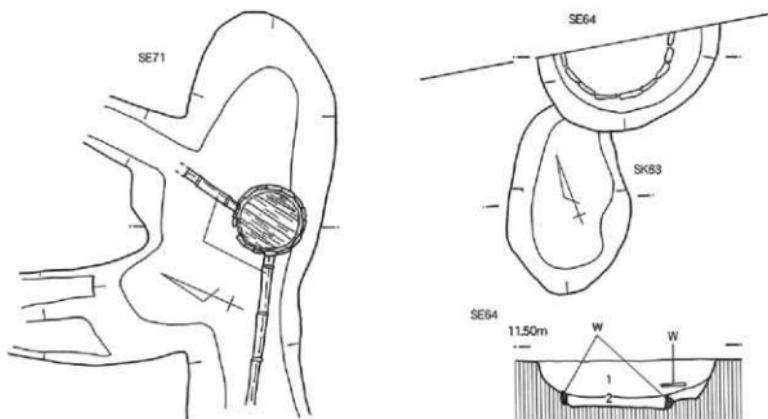
S D23・24(第5図)はA区東端部に位置し、南北方向に縦断する溝跡である。重複関係にあり、断面観察によってS D23がS D24を切っていることが解った。プラン検出時は平行する2条の溝跡として確認したが、掘り下げの結果により中間の地山と認識した部分も覆土であることが判明した。S D23の規模は検出長9.5m・最大幅2.5mで、深さは検出面から70~90cmを測り、南側がより深くなる。調査では中央部分について掘り下げを行っているが、覆土の堆積状況等から東側の壁面はより外側に広がるものと判断された。断面観察でS D24の覆土は水平堆積を呈しているのに対し、S D23では周囲からの流れ込みの様相が認められた。遺物はS D23から珠洲系陶器(第19図4・5)、かわらけ(第29図118・119)、土製品(第31図139)、石製品(第31図144・146)等が出土している。これら遺物の特徴から遺構に与えられる年代は、15世紀代の所産と考えられる。

S D75(第6図)はS E71井戸跡と関連し、水道となる竹管を埋設するために掘られた溝状の遺構である。B区中央域においてS E71から西方向に延び、B区南辺までの検出長は約10mを測る。不整な大型長方形を呈するS X76と重複関係にあり、これを切っている。竹管埋設面のレベルは一定していて、ほぼ水平を保って設置される。竹管は径6cm程度のもので、途中には竹管を繋ぐための木製の枠が施されていた。枠は一面35×20cmの立方体で、この間の竹管1本の長さは約4.2mを測った。S D75以前の構築と判断されるS X76は、炭化物や焼土を含む覆土が埋積する大型の遺構である。北辺は他遺構との重複もあり、そのプランが判然としない。掘り込みの深さも一定せず、底面には起伏や凹凸が認められる。本遺構からは最も多くの遺物が出土しており、全体量の23%を占めた。種別・器種は近世陶器の甕・擂鉢類、碗・皿等のほか仏飯器や水滴を含む磁器、コンロや手あぶり等の瓦質、土製人形に古錢など多種多様な内容である。これら遺物は15世紀から20世紀初頭までの範疇に属するもので、主体的な年代は18世紀後半~19世紀代と捉えられた。

土坑等(第7~12図) 実測図掲載した遺構の内、ここでは主として時期推定可能な遺物が出土したS K39・S K94・S X107についてその概要を記す。

S K39(第10図)はA区中央の南辺C-4グリッドに位置する土坑で、その南域は調査区外にかかる。北辺の長さが約340cmを測り、検出された平面形から竪穴状の隅丸方形を呈する形態と推測された。掘り方では北東角部が段を形成して、また西辺部は底面まで垂直に掘り下げられ、プラン確認面から底面までの深さは60cm前後である。北・東部は各々S K40・S X38と重複している。覆土は黒褐色砂質土を基調としており、3層に区分された。本遺構からは時期推定遺物として珠洲系の擂鉢片(第19図6)を認めた他、底面密着の状態で漆器椀(第43図1)が出土している。遺物から推測される時期は16世紀代と捉えられ、遺構の構築や廃絶も同年代と考えて大過ないと思われる。

S K94(第11図)はB区中央部、B-C-12グリッドに位置する土坑である。東端部でS D77溝状遺構と重複関係にあり、これを切って掘り込まれる。平面形は径140cm程度を測る略円形で、検出面からの深さ約80cm、断面形が逆台形様を呈する。全周において急激に掘り込まれ、底部はほぼ平坦である。断面観察における覆土の埋積状況は、中央部に落ち込む自然堆積の



S E 7 1

1. 10931/1 黒褐色砂質シルト。炭化物を含む。
2. 10931/1 黒褐色砂質シルトに、10755/2灰青褐色粘性シルトが堅状かブロック状に混入する。
3. 5721/1 黒色シルトに、7.5M4/1灰色砂質シルトが堅状かブロック状に混入する。
4. 5721/1 黒色シルトに、7.5M5/1灰色粘性シルトがブロック状に混入する。
5. 7.5M4/1 灰色細砂に、3721/1黑色シルトがブロック状に混入する。
6. 10931/3 黑褐色砂質シルトに、10755/2灰青褐色粘性シルトがブロック状に多量混入する。炭化鉄を含む。

- ①. 10932/2 黑褐色砂質シルト。炭化物を含む。
- ②. 10932/2 黑褐色砂質シルトに、10755/2灰青褐色シルトがブロック状に混入する。炭化鉄を含む。
- ③. 5721/1 黑色砂質シルトに、7.5M4/1灰色シルトがブロック状に混入する。

S E 6 4

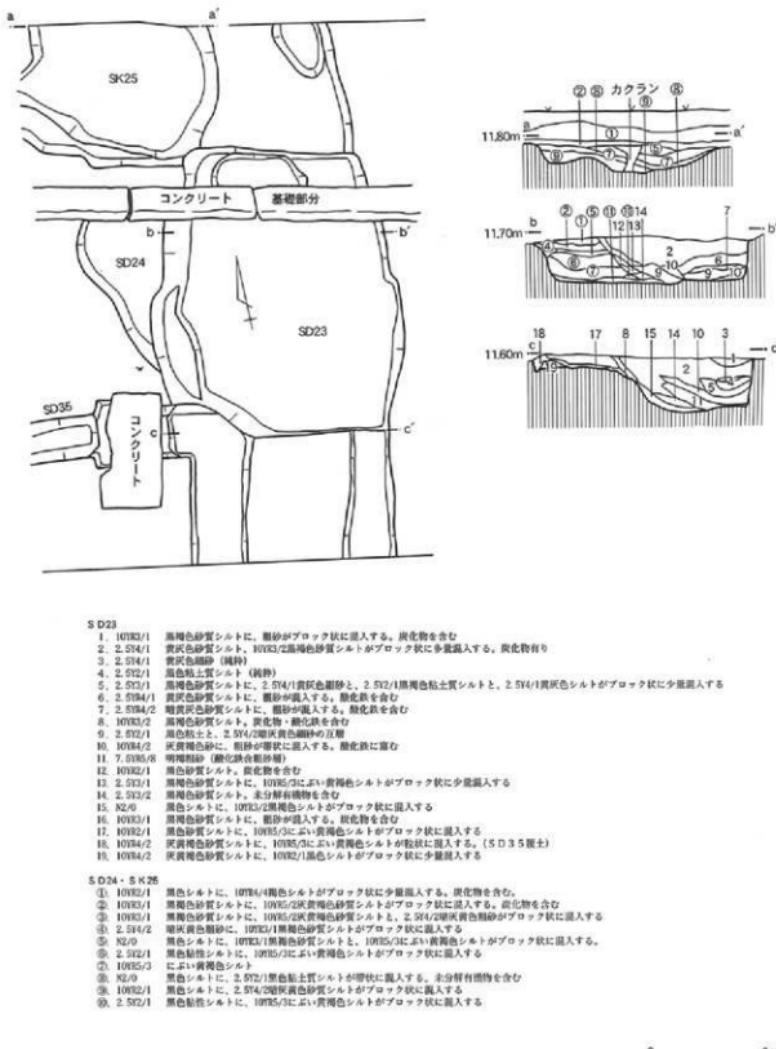
1. 10932/1 黑色砂質シルトに、10755/2灰青褐色砂質シルトと、同細砂が堅状かブロック状に混入する。
2. 10932/1 黑色砂質シルトに、8270/0黑色シルトが堅状に混入する。

S K 6 3

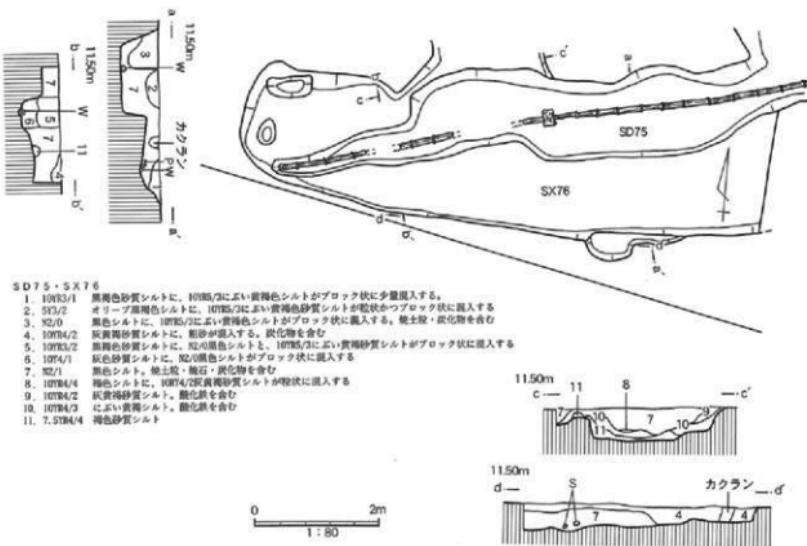
1. 10932/1 黑褐色砂質シルトに、10755/2灰青褐色シルトがブロック状に少量混入する。
2. 10932/1 黑褐色砂質シルトに、10755/2灰青褐色粘性シルトと、同砂質シルトと、8270/0黑色シルトがブロック状に混入する。
3. 10932/1 黑褐色砂質シルトに、8270/0黑色シルトが堅状に混入する。
4. 8270/0 黑色シルトに、10755/2灰青褐色粘性シルトと、同砂質シルトがブロック状に多量混入する。

0 1m
1 : 40

第4図 遺構実測図(1) S E



第5図 遺構実測図(2) SD

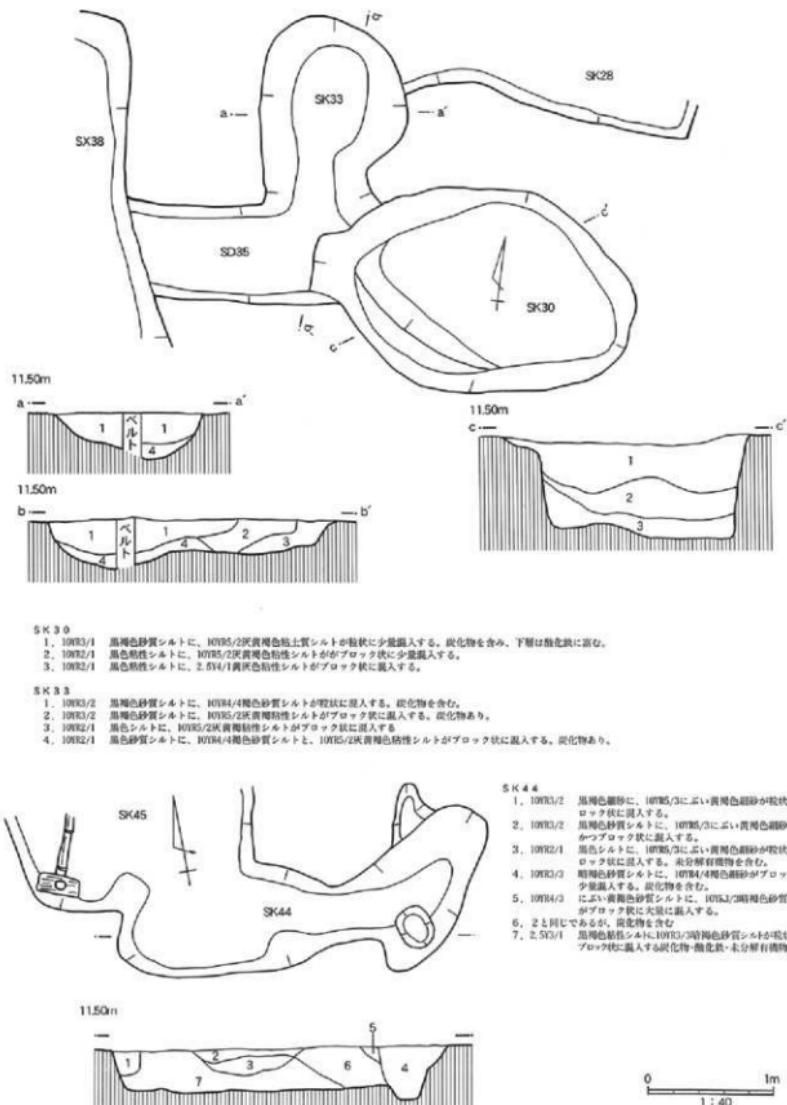


第6図 遺構実測図(3) SD

様相と理解される。遺物は最下層を中心に18世紀代に比定できる磁器が最も多く出土しており、器種には壺・碗・皿・徳利・口紅皿などがある。その他にも近世陶器(第19図10、第20図15)、玩具類(第29図114~116)、瓦質(第30図128)、土製人形(第31図141)、砥石(第31図145)などがあり、年代的には18世紀初頭~19世紀後半に属するものであった。

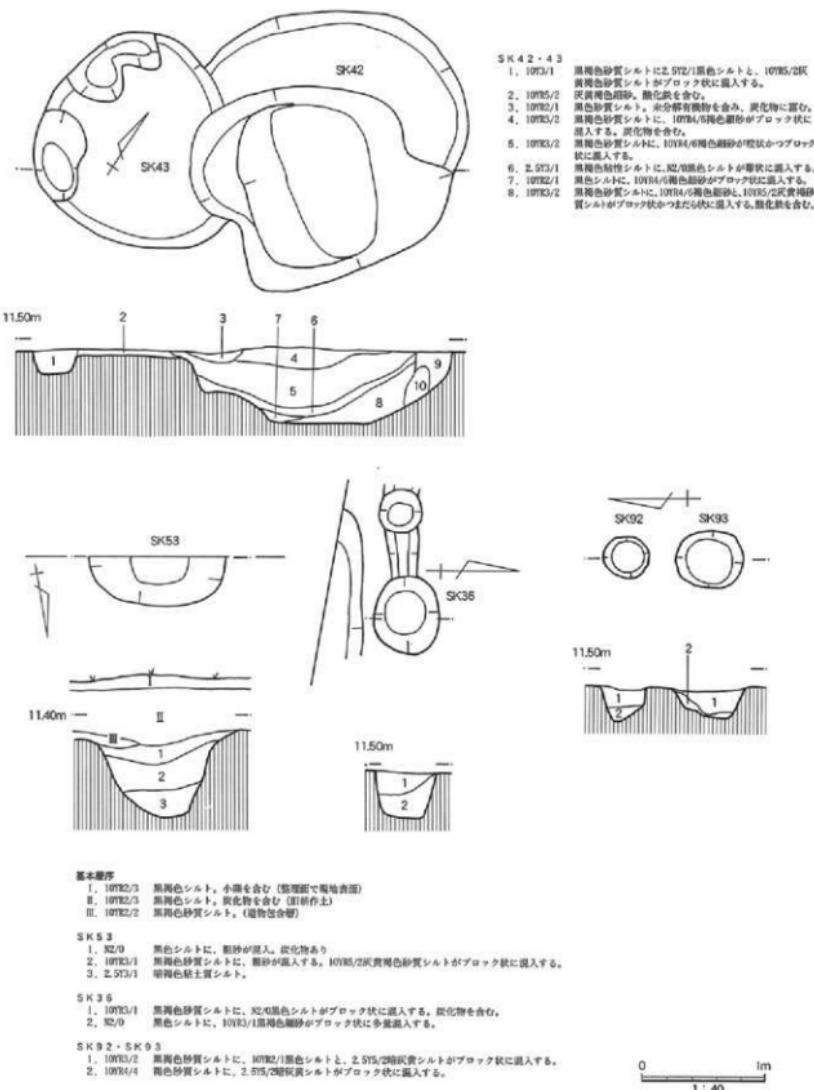
S X107(第12図)はB区中央の北寄り、B-11グリッドに位置している。プラン確認時の平面規模は東西230cm・南北400cm程の大きさで、隅丸長方形形状を呈している。掘り込みに見られる凹凸や形態あるいは断面観察から、複数の遺構が重複しているものと判断された。重複は北半部で認められ、橢円形状の土坑5基程の切り合いと推定される。深さも一様ではなく、全体で7箇所の底面レベルが異なる落ち込みが存在する。遺物はS X76に並んで出土量が多く、全体数の約22%を占めた。甕・擂鉢の陶器類、壺・碗・皿・徳利・口紅皿・レンゲ等の磁器類、焙烙・風口・手あぶり・炭甕・炭壺蓋の瓦質類、石製品の硯・椀・曲物・箸などの木製品といった多様な種別・器種が存在した。また、S X76出土遺物と接合する事例(第26図89)が認められた。年代的には19世紀代のものが主体と捉えられるが、15世紀に溯るものから近代に属するものまで、時期幅の広い内容のものが含まれていた。

その他、A区のSK36・45・61およびB区のSK74・84・91等の各土坑から、少量ながら実測掲載できた遺物が出土している。



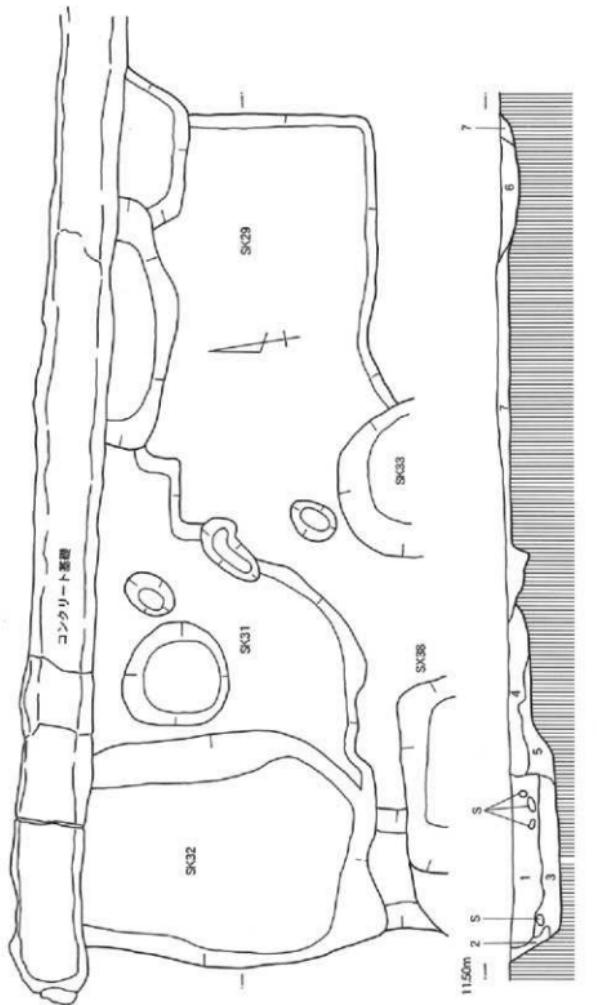
第7図 遺構実測図(4) SK

検出遺構



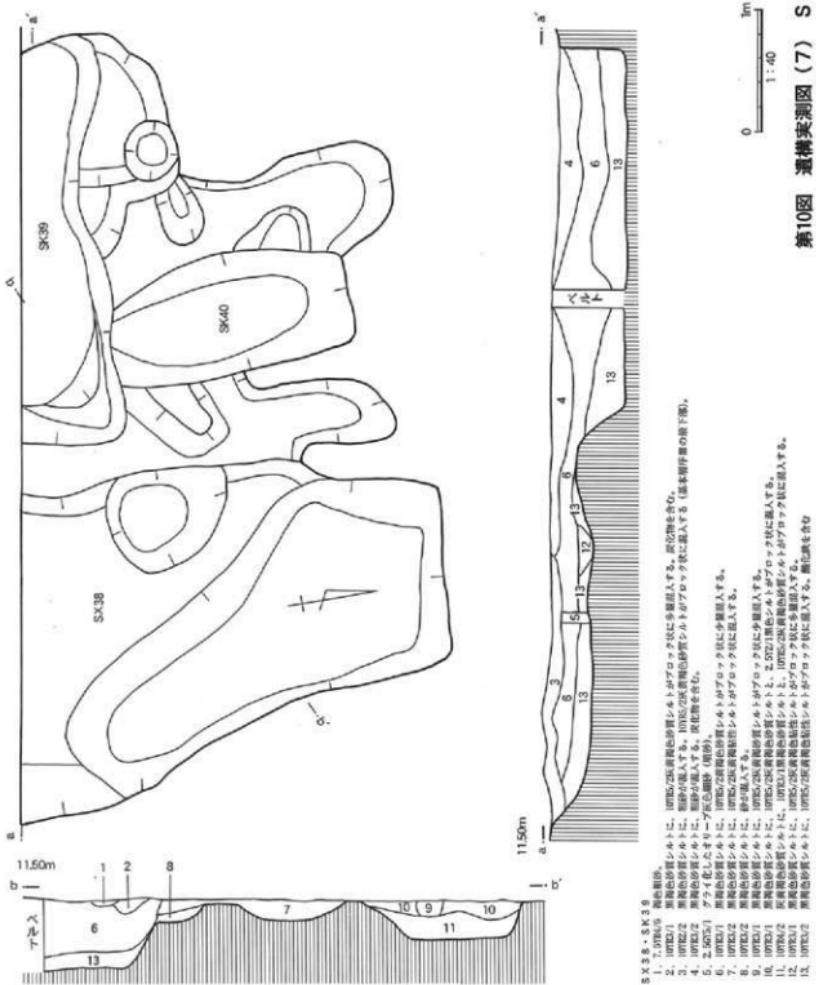
第8図 遺構実測図(5) SK

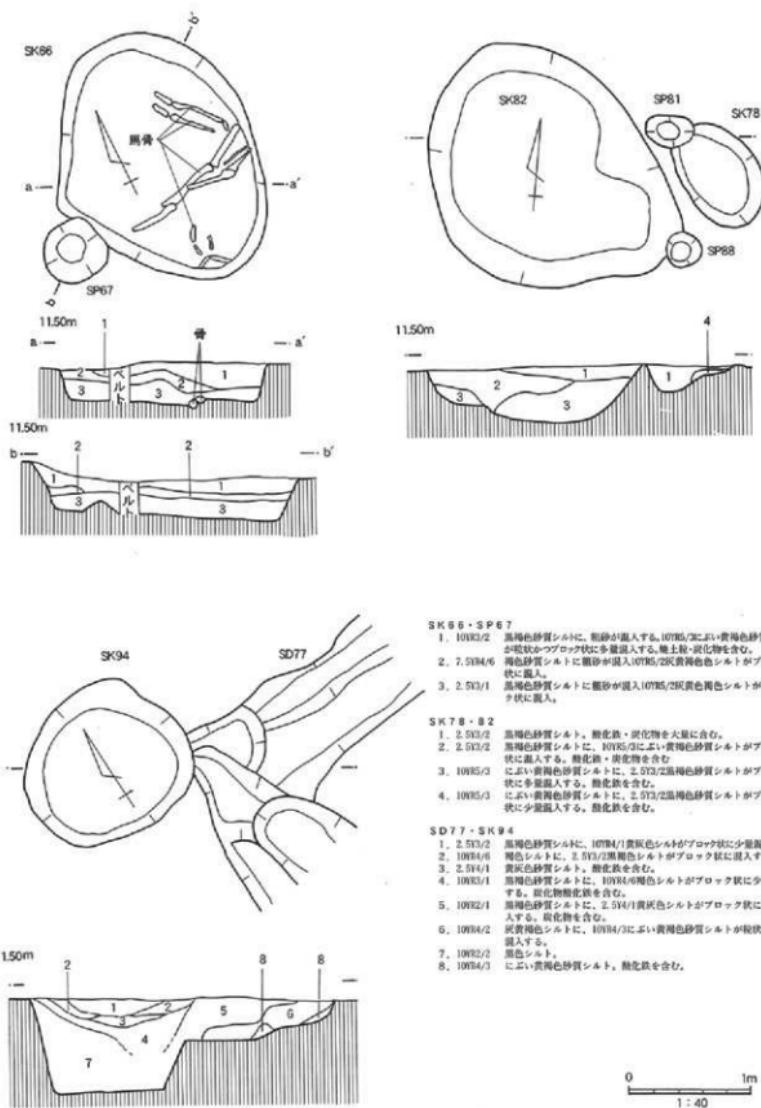
第9図 遷構実測図(6) SK



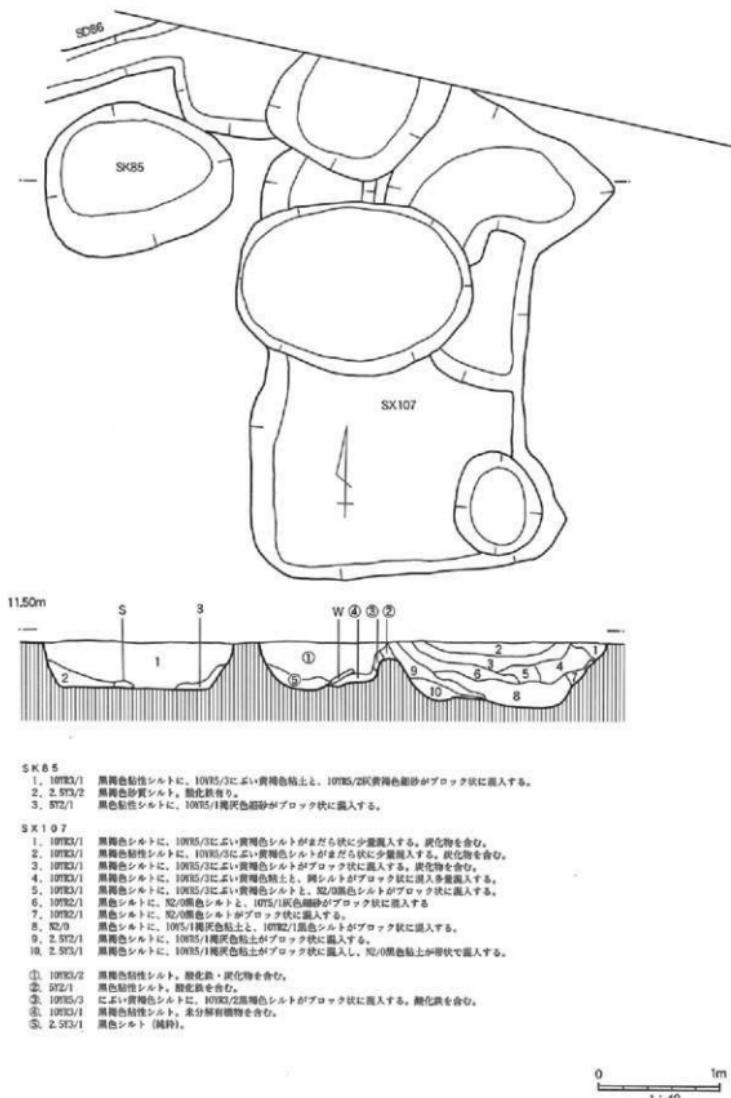
SK 2 - 3.1 - 3.2

1. 10701 黒色砂質シルト、黒色砂質シルトに、白色/灰色/黑色鉛筆ガラフック灰に混入する。
2. 10701 黒色砂質シルト、黒色砂質シルトに、白色/灰色/黑色鉛筆ガラフック灰に混入する。
3. 2.501 黒色砂質シルトに、白色/灰色/黑色鉛筆ガラフック灰に混入する。
4. 2.501 黒色砂質シルトに、白色/灰色/黑色鉛筆ガラフック灰に混入する。
5. 5021 黒色砂質シルトに、白色/灰色/黑色鉛筆ガラフック灰に混入する。
6. 10701 黒色砂質シルトに、白色/灰色/黑色鉛筆ガラフック灰に混入する。
7. 10701 黒色砂質シルトに、白色/灰色/黑色鉛筆ガラフック灰に混入する。





第11図 遺構実測図（8）SK



第12図 遺構実測図(9) SK・SX

3 第2次調査検出遺構

井戸跡(第13図) 調査で井戸跡と確認されたのは、井戸眼と考えられる曲物が検出されたS E 250である。C I区の中央部B-35グリッドに位置し、他遺構との切り合い関係はない。径90cm内外の不整円形を呈している。全周において急激に掘り込まれて底面に至り、底面西側に曲物が設置されている。この部分は円形状に一段深く掘り込まれ、曲物底までの深さは検出面から46cmであった。井戸眼と推測される曲物は径34cm・高さ15cm程の大きさであったが、欠損した痕跡が認められ、本来の高さとは異なるものと理解された。半蔵した土層断面では垂直方向に覆土の別が観察され、掘り方埋土と井戸眼内堆積土の相異と想定された。構内からの出土遺物はなく構築時期等の推定は困難であるが、周辺包含層の出土遺物から察して19世紀代の所産と考えられる。

溝状遺構(第13~16図) 溝状遺構は6条を検出している。ここでは、藤島城外堀(二の丸)の一部の可能性も考えられるS D222他について概述する。

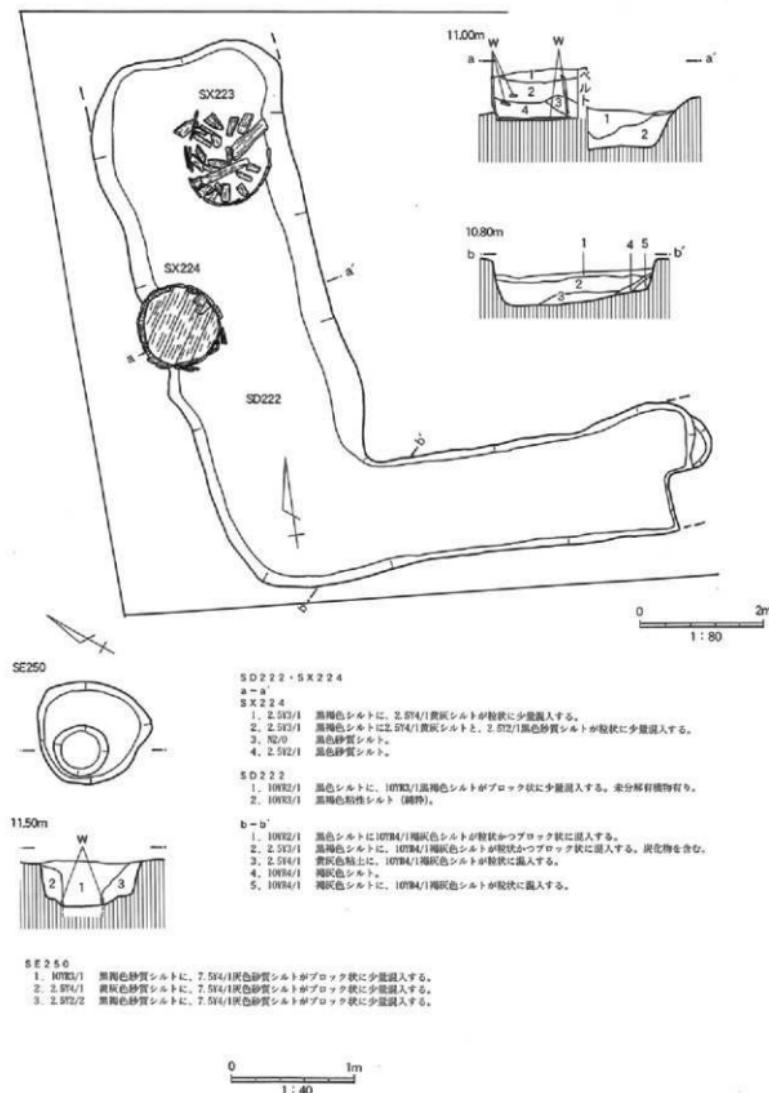
S D222(第13図)は、C 2区西側において確認されたL字形の溝跡である。調査区壁際での検出であったため、全体の規模等は不明である。検出幅は最大4.2mで、さらに南・西側への広がりが予想される。調査区は現県道沿いであったことから、崩落防止のため壁際を除いて掘り下げを実施している。検出面上では、後世の産物である用途不明の木樽が2基遺存している。溝跡の深さは掘り下げ部において70~80cmまで確認したが、壁際に向かってさらに深くなる様相が窺い知れた。覆土は主に泥炭性の粘質土が堆積しており、木片等の未分解有機物を多量に含んでいた。本遺構は規模やL字に曲がる形態などの特徴から推察して、藤島城の外堀に当たる可能性が指摘されるが、年代を比定できる出土遺物がないため推定の域を出ない。

C 1区北西部に位置するS D255(第14図)は、舌状に伸びる溝状の掘り込みである。東端が丸く収まる形状で、西側は調査区外へ続く。西側へ行くほど深さが増し、底面の傾斜が認められる。東端部には径80cm程の木樽が、検出面からやや浮いた状態で遺存している。出土遺物は磁器の細片がほとんどで、時期を判断できる資料はない。

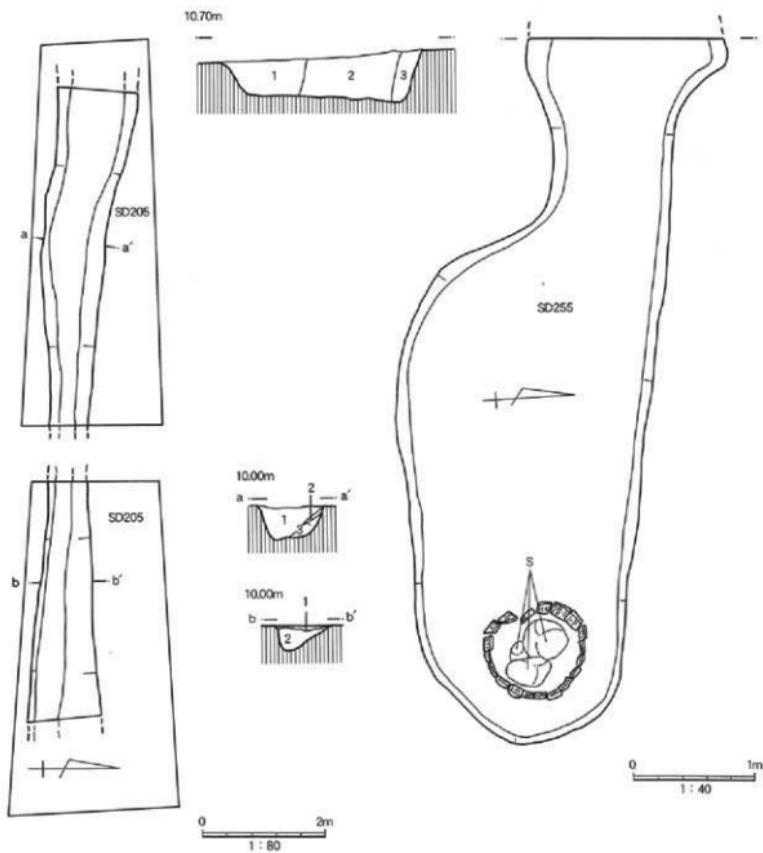
その他、D区検出のS D265・274やC 6区のS D205等の溝跡は、明治期の地籍図に見られる水路跡と考えられるものである。

土坑等(第17・18図) C 1・2区を中心に、53基の遺構を土坑として登録した。形状や規模・掘り込みの深さ等様々であるが、構内に遺物を伴うものは極く少数であった。以下に、実測図掲載した何基かについてその概要を記す。

S K230(第18図)はC 1区東部中央において検出された土坑で、東側に隣接するS K228と重複関係にある。長径130cm・短径74cmを測る8の字状の楕円形を呈し、急激に掘り込まれるために周壁の立ち上がりが垂直的となる。確認面から70cm程で底面に至り、底面には人頭大の礫3個が認められた。本土坑は平面規模に比較して深く掘り下げられることが特徴で、底面のグライ化した砂質層からは恒常的に湧水があった。これらの事由から察して、素掘りの井戸跡の可能性も考えられる。なお、黒色粘質土を基調とした覆土内を含め時期を推定できる出土遺物がなく、構築年代等は不明である。



第13図 遺構実測図 (10) SD・SX



SD 205

a - a'

1. 10Y3/1 黒褐色シルトに、10Y4/1褐灰色シルトが粒状かつブロック状に混入する。炭化物有り。
2. 2.5Y2/1 藍色シルトに、10Y4/1褐灰色シルトがブロック状に混入する。炭化物を含む。
3. 10Y4/1 褐灰色シルトに、2.5Y2/1黒色シルトがブロック状に混入する。炭化物を含む。

b - b'

1. 10Y3/1 黒褐色粘土に、2.5Y1/1黑色粘土が粒状かつブロック状に混入する。
2. 2.5Y5/1 褐灰色粘土に、5Y4/1灰褐色シルトが粒状かつブロック状に混入する。

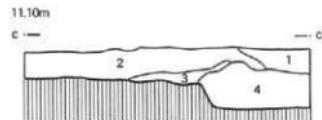
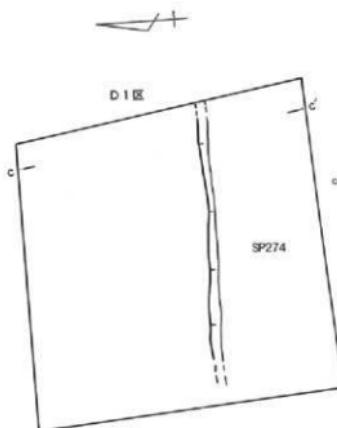
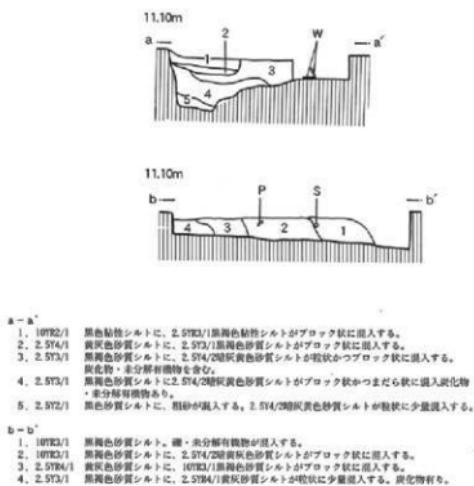
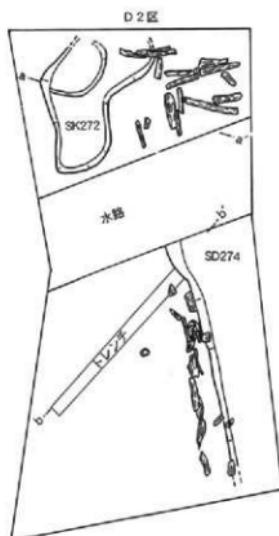
SD 255

1. 10Y4/1

1. 10Y4/1 黑褐色砂質シルトに、10Y2/1黑色シルトがまだら状に少量混入する。
2. 7.5Y2/1 黒色シルトに、10Y3/1褐褐色粘土がブロック状に少量混入する。
3. 10Y3/1 黑褐色粘土に、10Y4/1褐褐色粘土がブロック状に少量混入する。

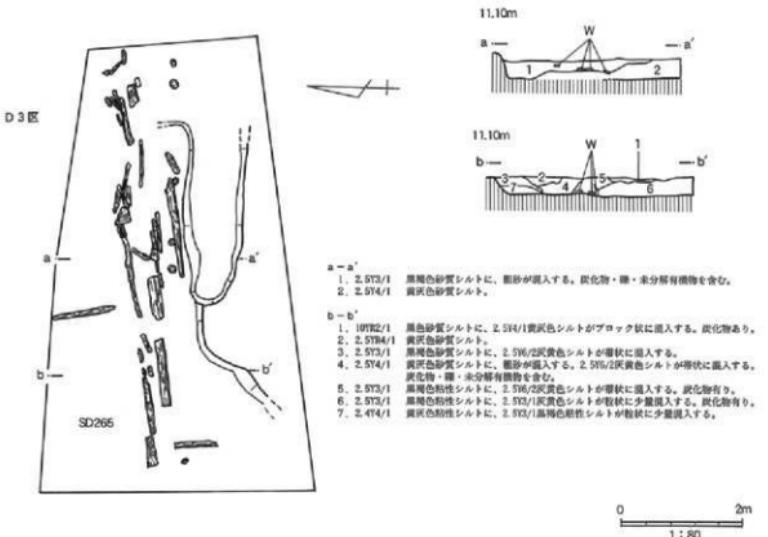
第14図 遺構実測図 (11) SD

検出遺構



0 2m
1:40

第15図 遺構実測図 (12) SD



第16図 遺構実測図 (13) SD

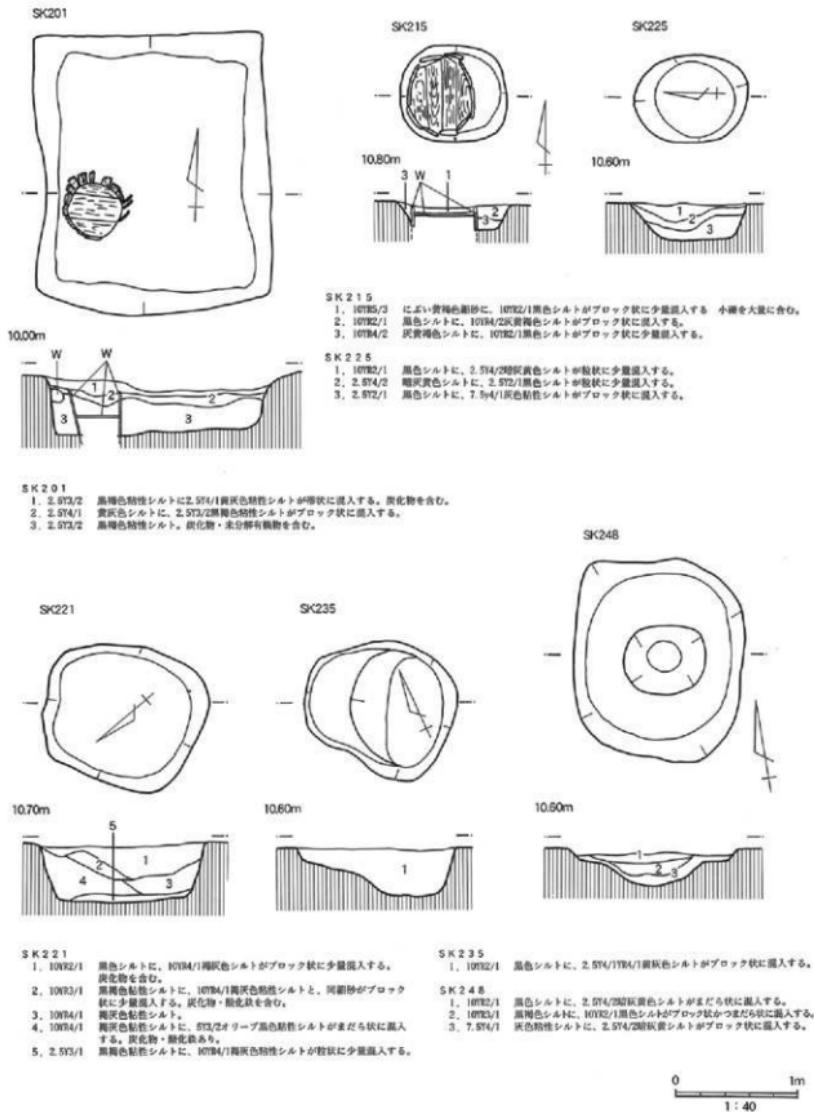
C 3 区で検出した S K201(第17図)は、方形様を呈する堅穴状の遺構である。東西190cm・南北230cmの大きさで、約50cmの深さを測る。3層からなる覆土は、黒色粘土層の間に黄灰シルト層を挟む水平な堆積状況を示し、水位の変動が原因した結果と理解される。粘土層はS D222同様、炭化物や未分解有機物に富んだ腐植土である。底面西側からは、遺構に伴うと思定される中板を要する木樽が検出された。

S K221(第17図)はC 2 区のA-31グリッドに位置し、略円形を呈する土坑である。他遺構との重複ではなく、径120cm内外・検出面からの深さ46cm程を測る。掘り方は全周において均等な傾斜で行われ、ほぼ平坦な底面に至る。5層の別に分けた覆土は、基本的に黒色土・黒褐色土・褐色土の3層準からなる。

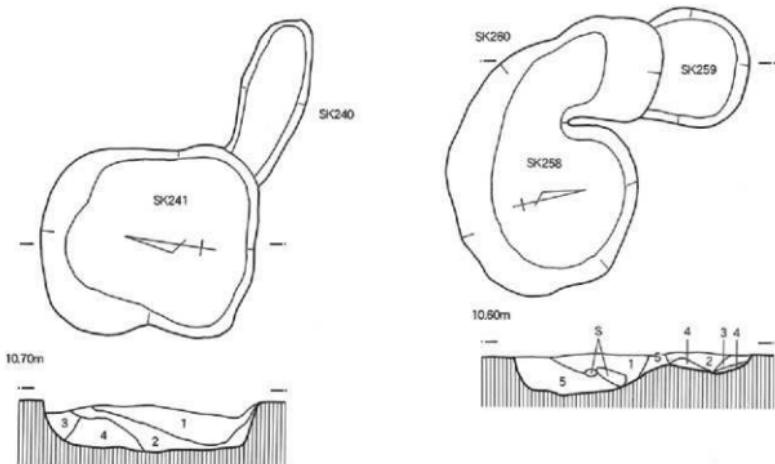
C 1 区B-C-35グリッドに位置する S K241(第18図)は、隅丸方形のプランを持つ土坑である。南北長軸175cmを測る平面規模を有し、南東隅部で S K240と切り合い関係にある。深さ40cm前後で、底面はほぼ平坦である。廃棄後、遺構の北側から埋まっていった様相が覆土の堆積状況から判断され、覆土には4層の別が観察された。

S K248(第17図)はC 1 区北辺中央域で検出した。長径160cm・短径140cmを測り、平面形が隅丸長方形となる土坑である。掘り方は検出面から10cm程下がられた後、底面中央部がさらに梢円状に落ち込み、最深部までは約30cmの掘り込みがなされる。3層からなる覆土は自然堆積の様相が窺われ、中央部に落ち込む形状に沿って埋積していくと理解された。遺物は近世磁器の細片が数点出土したが、時期を特定できるものではない。

検出遺構

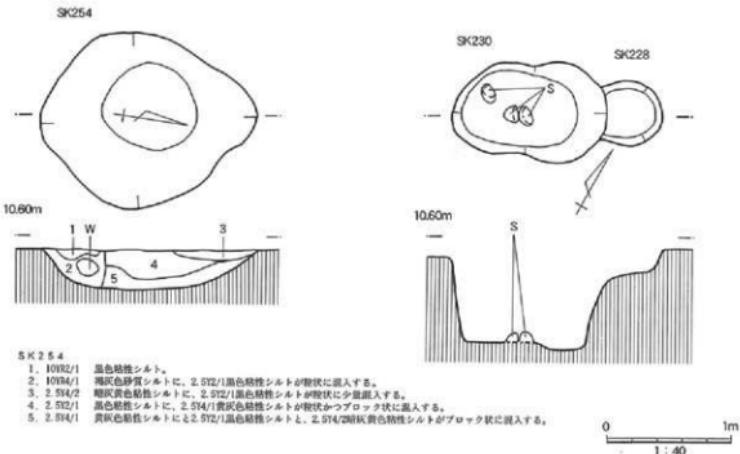


第17図 遺構実測図(14) SD



- SK241**
1. SK4/1 黒色粘性シルトに、2. ST2/2暗赤色粘性シルトと、2. ST2/3黒色粘性シルトが互層状かプロック状に多層混入する。
 2. 2. ST2/1 黒色粘性シルトに、2. ST2/2暗赤色粘性シルトが互層状かプロック状に互層する。
 3. ST4/1 黒色粘性シルトに、2. ST2/2暗赤色粘性シルトが互層状かプロック状に入り込む。
 4. 3とほとんど同じであるが、2. ST4/2オーピー海緑色粘性シルトの侵入の割合が高い。

- SK259・260**
1. 2. ST2/1 黒色シルトに、2. ST3/3暗オーピー海緑色シルトがプロック状に混入する。
 2. 2. ST3/3 暗オーピー海緑色シルトに、2. ST4/1黒色シルトがプロック状に混入する。
 3. 2. ST3/1 黒開色シルトに、2. ST4/1黒色シルトが互層状に混入する。
 4. 2. ST4/1 黒開色シルトに、2. ST3/1黒色シルトが互層状に混入する。
 5. 2. ST4/1 黒開色シルト。



- SK254**
1. 10ST2/1 黒色粘性シルト。
 2. 10ST2/1 黒色粘性シルトに、2. ST2/1黒色粘性シルトが互層状に混入する。
 3. 2. ST4/2 黒開色シルトに、2. ST2/1黒色粘性シルトが互層状に混入する。
 4. 2. ST2/1 黒色粘性シルトに、2. ST4/1黒開色粘性シルトが互層状かプロック状に混入する。
 5. 2. ST4/1 黒開色粘性シルトに2. ST2/1黒色粘性シルトと、2. ST4/2暗赤色粘性シルトがプロック状に混入する。

第18図 遺構実測図(15) SK

IV 出土遺物

1 第1次調査出土遺物

第1次調査では、土器・陶器・磁器・瓦器・土製品・石製品・金属製品・木製品など多様な中近世の遺物が出土し、数量的にコンテナ20箱に相当した。その分布は遺構のそれと軌を一していると捉えられ、特にB区所在のS X76・107の遺構内から多くの遺物が出土した。これらの年代は15世紀から20世紀前葉までの範疇で、主体的時期は18世紀後半～19世紀代に属するものであった。以下では、種別ごとに遺物の特徴等を記述する。なお、遺物個々の属性等については観察表(表3～11)を参照されたい。

かわらけ(第29図118・119)

S D23より破片資料で2点出土している。口径90mm程の小型のもので、ロクロ成形品である。底部が遺存する118は回転糸切りによるもので、119の外面には指押痕が観察される。胎土は精製されているが、一部に砂粒の混入が認められる。118の口縁部内外面に煤が付着しており、燈明皿としての使途が窺われる。年代的には、15世紀代の所産と考えられる。

陶 器(第19～21図)

中世陶器の珠洲・古瀬戸、近世陶器の瀬戸・肥前・唐津・萩・備前・大宝寺の各地製作品が出土している。

中世陶器の珠洲(1～7)の器種に壺・擂鉢がある。壺は口縁部および体部の小破片であり、内外面調整は平行タタキ・精円アテによって行われる。擂鉢も全形の判明する資料ではなく、摺り目の単位が10条と12条のものが認められる。9は古瀬戸の御皿である。口縁部の細片で、自然釉が認められる。

近世陶器の瀬戸(11・12・15・22)には碗・皿・壺・壺の各器種がある。碗・皿は口径115mm前後のもので、11の内面に草花サビ絵が、12の見込みに菊文型押しが施される。唐津焼(13・23～25)の器種には碗・壺・捏鉢がある。13はケズリ出し高台を有する輪花型の碗で、胎釉が施される。24は捏鉢の口縁部資料で、灰釉が施され、外面に波型を呈する刷毛目痕を有する。21は器種不明であるが、萩焼の染付けである。透明釉が施され、文様は筆描きによるものである。34～37は備前焼の擂鉢である。法量の相異から大・小の2種に分類され、前者は口径310mmを超えるもの、後者は235mm内外を測るものと認識される。大宝寺焼(17・26～30)には壺と筆筒が認められた。褐釉または海鼠釉が施され、17の筆筒は口縁に打痕があり、後に灰落としに転用されたと考えられる。

磁 器(第22～29図)

近世の国産品で、壺・碗・皿・徳利・蓋(身)・紅皿・レンゲ・仏花瓶・仏飯器などの各器種が出土している。

壺・碗では瀬戸および肥前産が大半を占め、唐津と伊万里のものが数点存在する。39～43は瀬戸の壺である。39には焼繼ぎ痕が認められ、42の底部には「玩品」の銘が打たれる。72の碗は、端反型を呈する形態的特徴が窺われる。44～57・59～70は肥前の壺・碗である。47は

底部に「大明年製」の銘が打たれる。50～52は波佐見の「くらわんか碗」である。53～55は筒型形状の湯呑み茶碗で、見込みにはコンニャク印判が認められる。59はⅢ期、17世紀後半に比定されるもので、外面文様に網目文が施される。63は広東碗で、焼継ぎ痕が認められる。丸型形態の66は、その特徴から村木窯の所産と判断されるものである。58は伊万里の赤絵茶碗で、鮮やかな色絵が特徴的である。方格区画内に「寿」の文字が認められる。71は唐津の平茶碗で、体部は直線的に外傾する。鉄釉によって全面施釉される。

皿は瀬戸・肥前の他、有田の色絵皿が出土している。73～76・78・88は瀬戸の皿で、口径100mm前後のものと200mm超を測る大小の2種を認める。73・74は輪花型の口縁形態を呈すもので、73の底部には「成化年製」の銘が入る。75は見込みに「渦福」の略書がある。76の染付けは、片刷り紙絵付けによるものである。78の外面には「富貴牡丹花」の銘が認められる。88は輪花型の大皿である。肥前の皿(77・81～86・89・90)には、法量的な大・中・小が存在する。蛇の目高台を持つ83は、波佐見の「くらわんか皿」で釉ハギを有する。84はⅣ期に位置付けられる中皿である。90は口径148mmを測る段重皿で、梅花散文が施される。有田焼の色絵皿14号である87は、口縁が輪花型となる。

91～94の4点は瀬戸の徳利である。91・92は遠山山水絵柄の揃い徳利で、92の底部には「兵」の墨書銘が記される。109は肥前の御神酒徳利と思われる。

蓋身(95)と蓋3点(96～98)は、肥前焼のものである。96には青白釉が施釉され、蛸唐草文が描かれる。17世紀末の年代観が与えられるものである。

99・100は対になる備前の口紅皿で、白色釉が手持ち掛けによって施される。101は肥前の紅皿で、102はそれとセットになる蓋である。

その他、文房具の水滴(104・105)、仏花瓶(106～108)、仏飯器(110～113)、玩具の類(115～117)が出土している。104は型押し成形される箱型のもので、草笥様である。105は鷹型品の頭部資料である。108は灰釉が施され、有田焼の青磁かと思われる。112は有田色絵である。玩具には仏花瓶・御神酒徳利・鉢・福助人形が認められた。

瓦質土器・陶器(第29～31図)

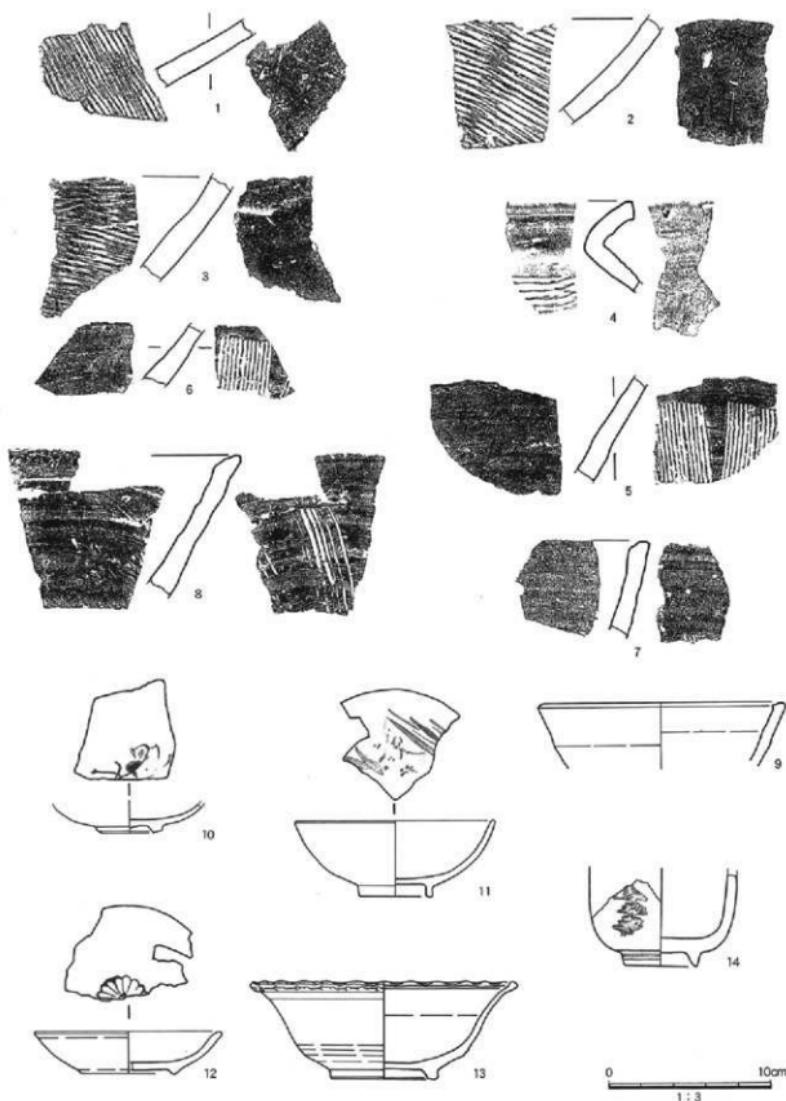
在地系もしくは江戸在地系のもので、19世紀代の産物である。瓦質土器の器種に焙烙(120～122)、コンロ(123～125)、風口(126)、七輪(127)、手あぶり(128・129・133)、火鉢(130)、炭壺(131)・甕(132)とその蓋(134～136)などがある。128は口縁部と体部中央に側帶があり、この部分に褐釉が施される。また、二対ある把手には獣面彫刻が施される。137は懶鉢で、赤褐色胎土の瓦質陶器である。

土製品・石製品・金属製品(第31図138～148)

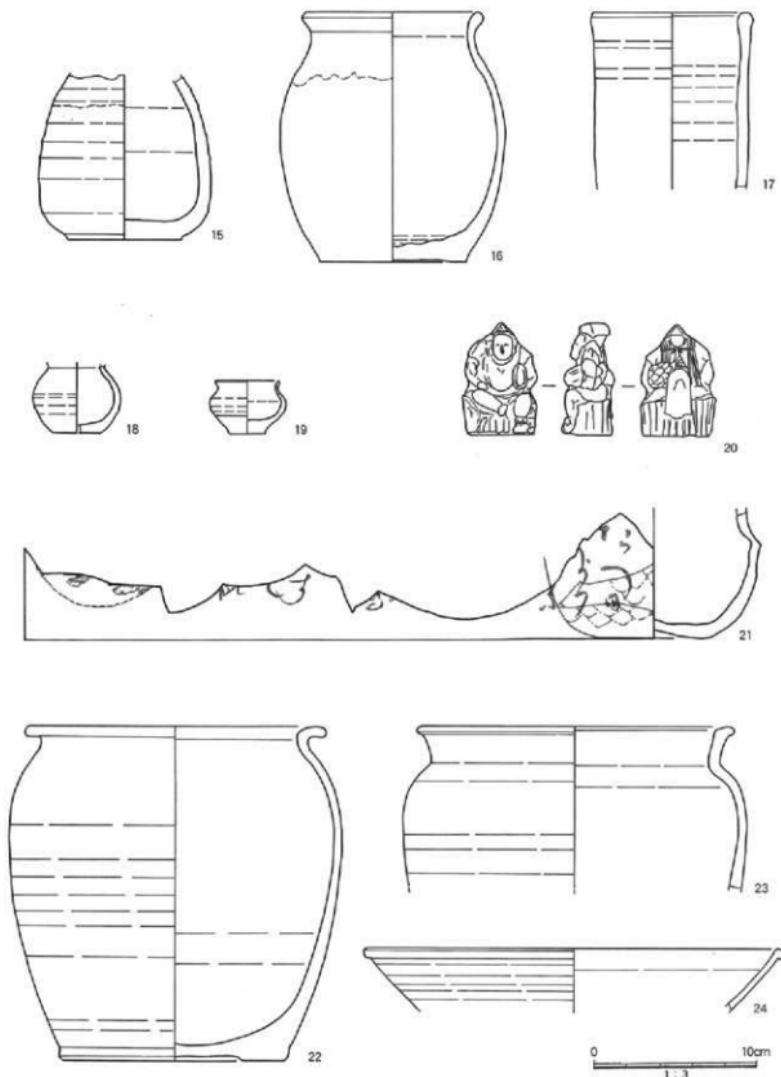
土製品では型押し成形の雛人形が4点出土している。138は官女、139・140は内裏雛、141は母子像と認識される。

石製品では硯2点(142～143)と、砥石3点(144～146)が認められた。

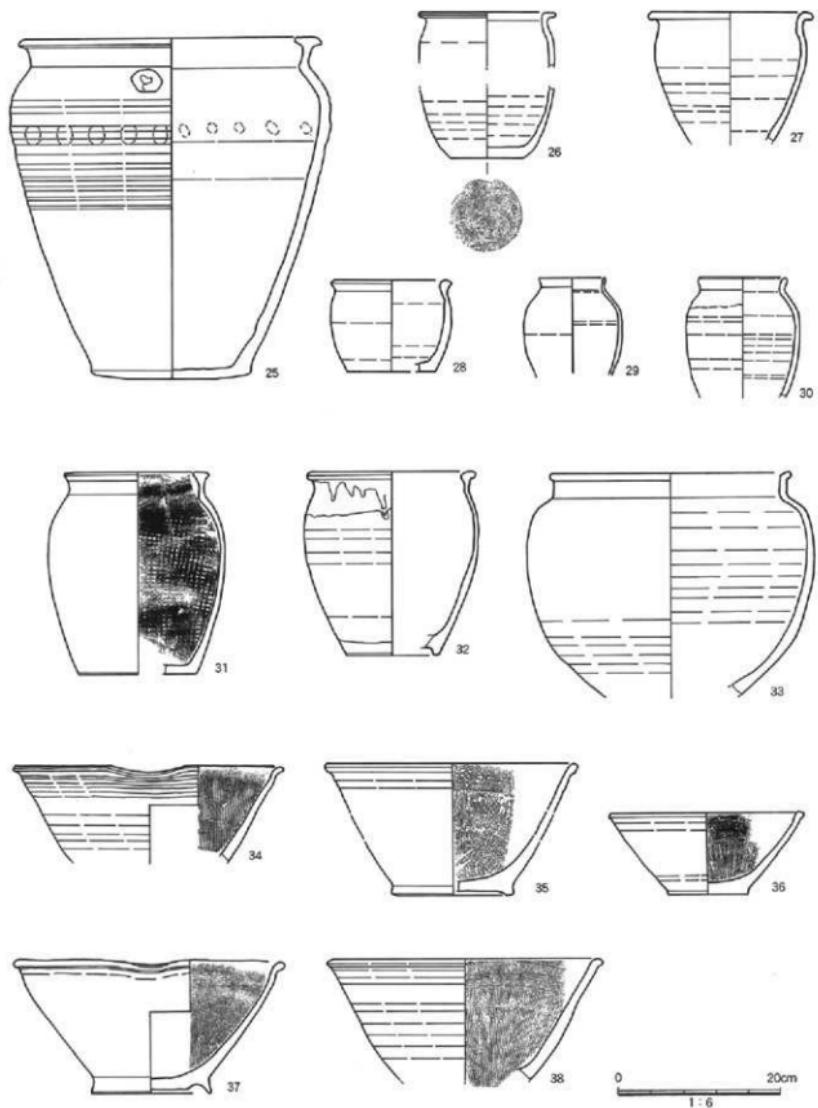
金属製品では寛永通寶(147・148)が2点出土している。



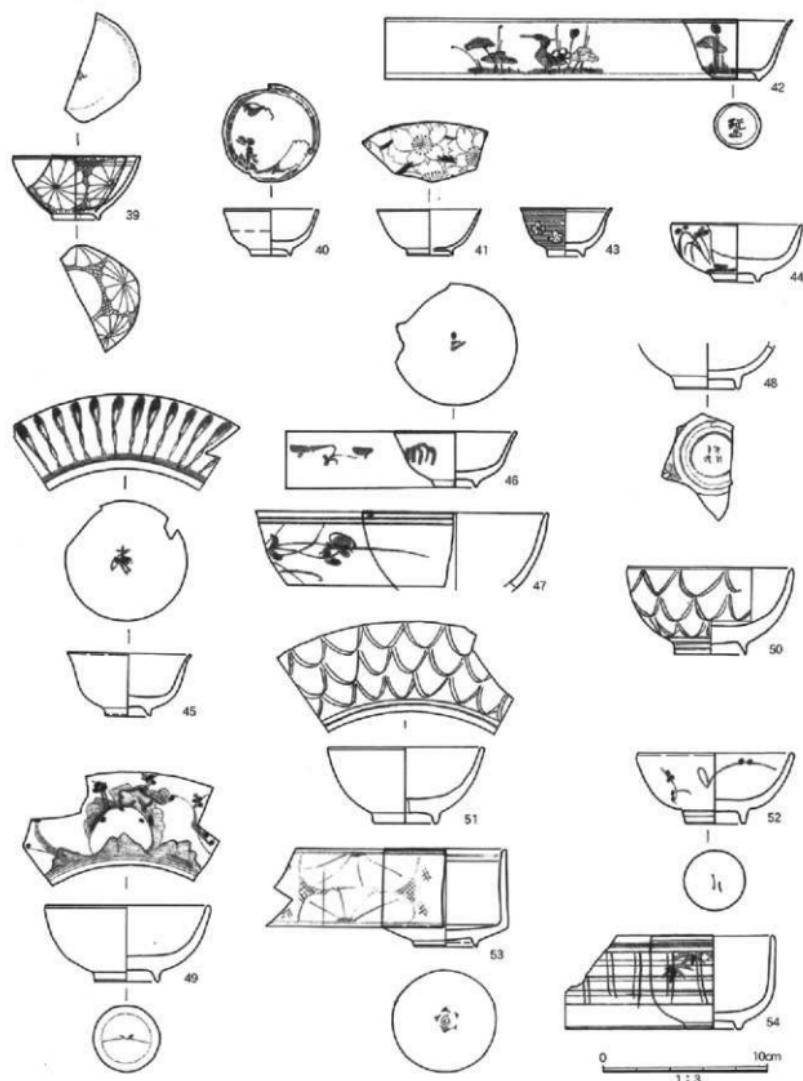
第19図 遺物実測図（1）陶器



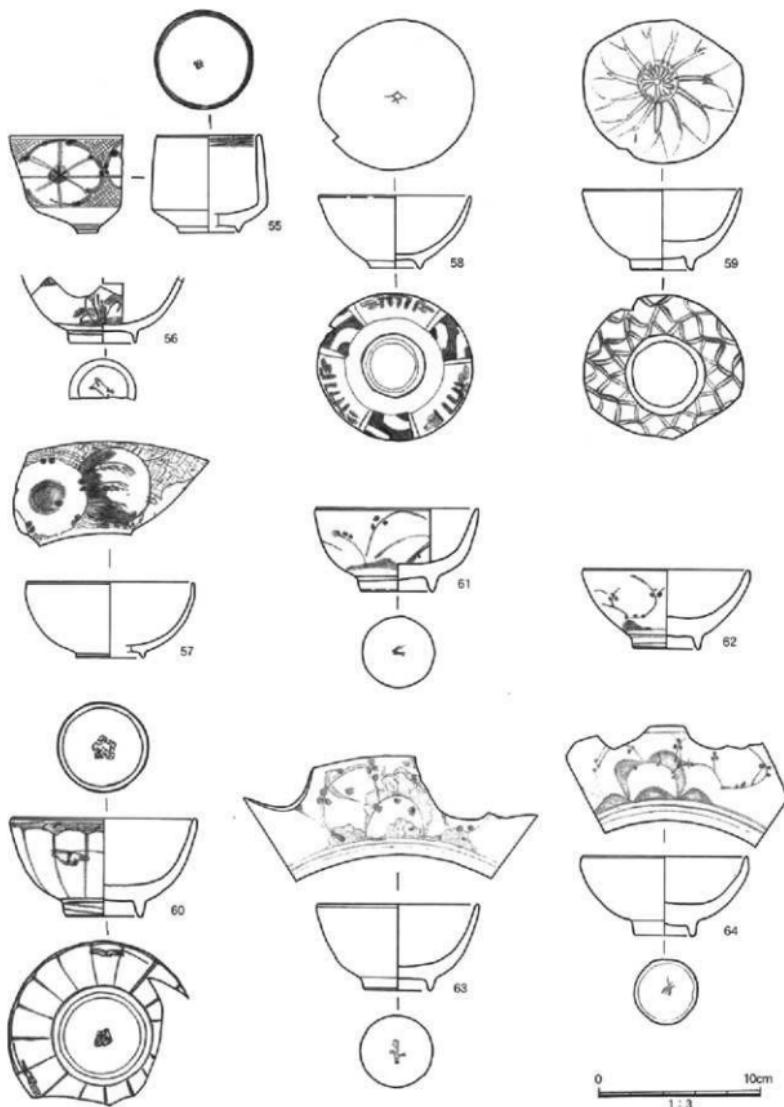
第20図 遺物実測図（2） 陶器



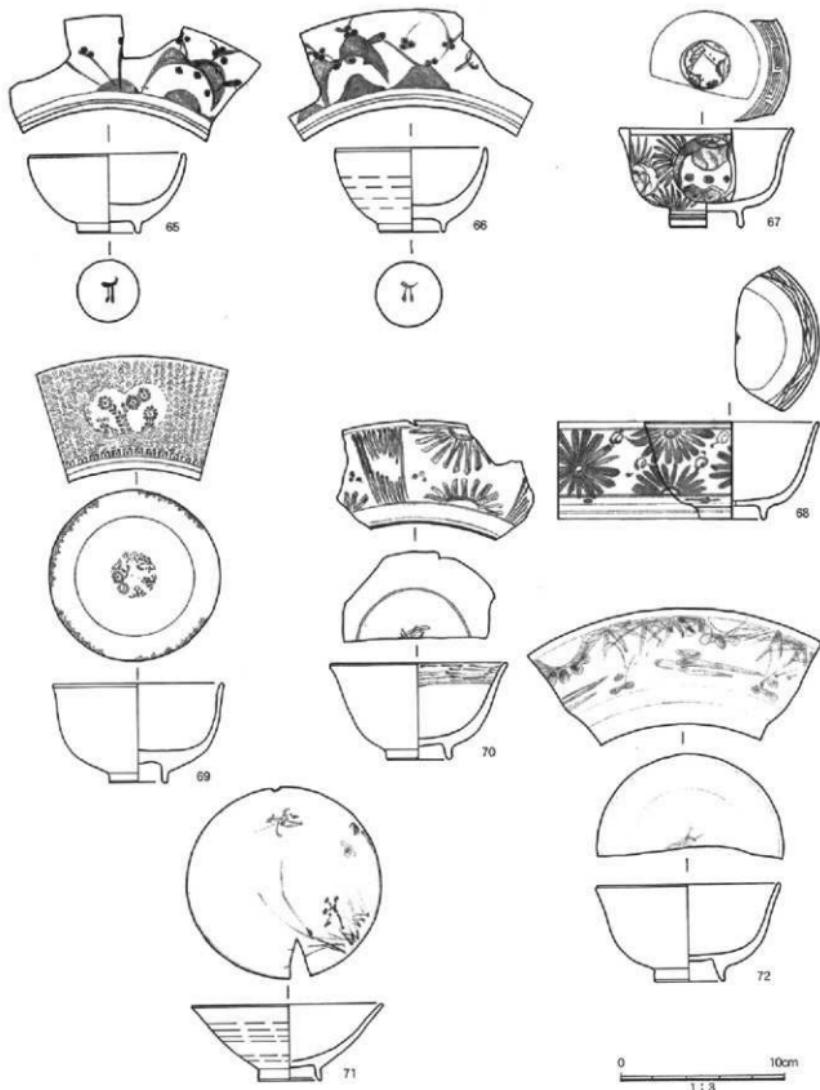
第21図 遺物実測図（3）陶器



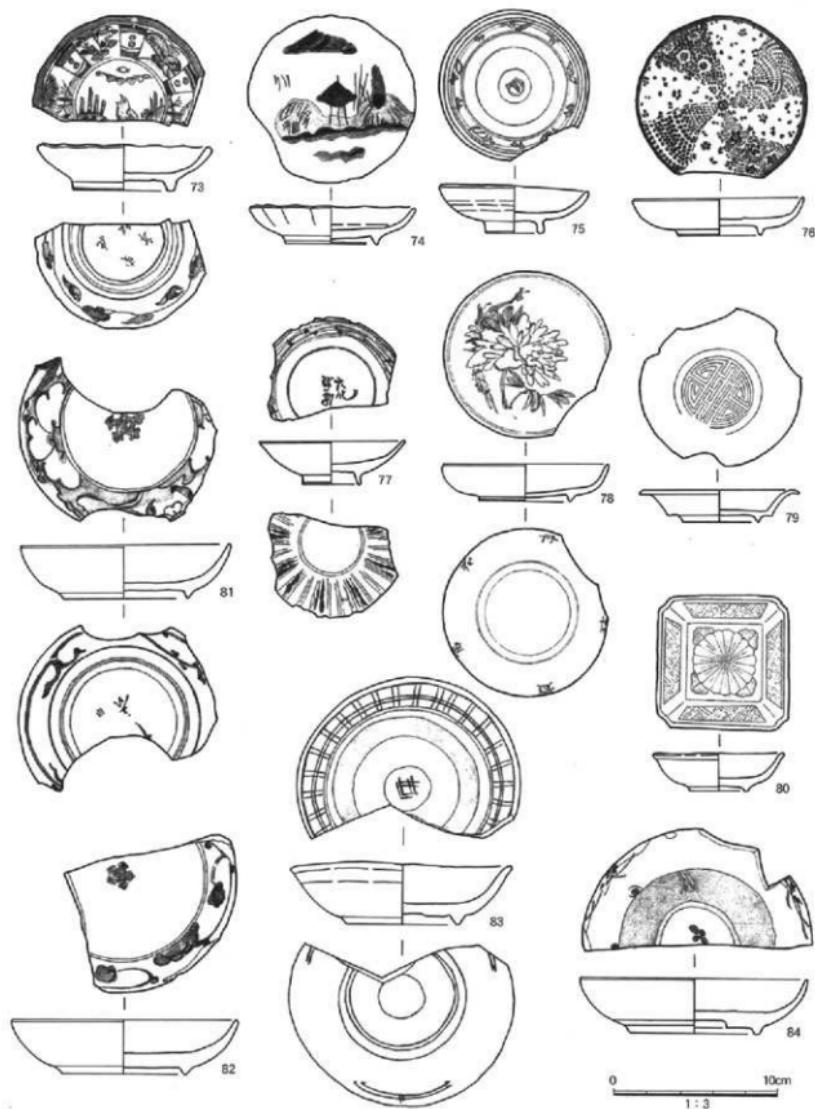
第22図 遺物実測図（4） 磁器



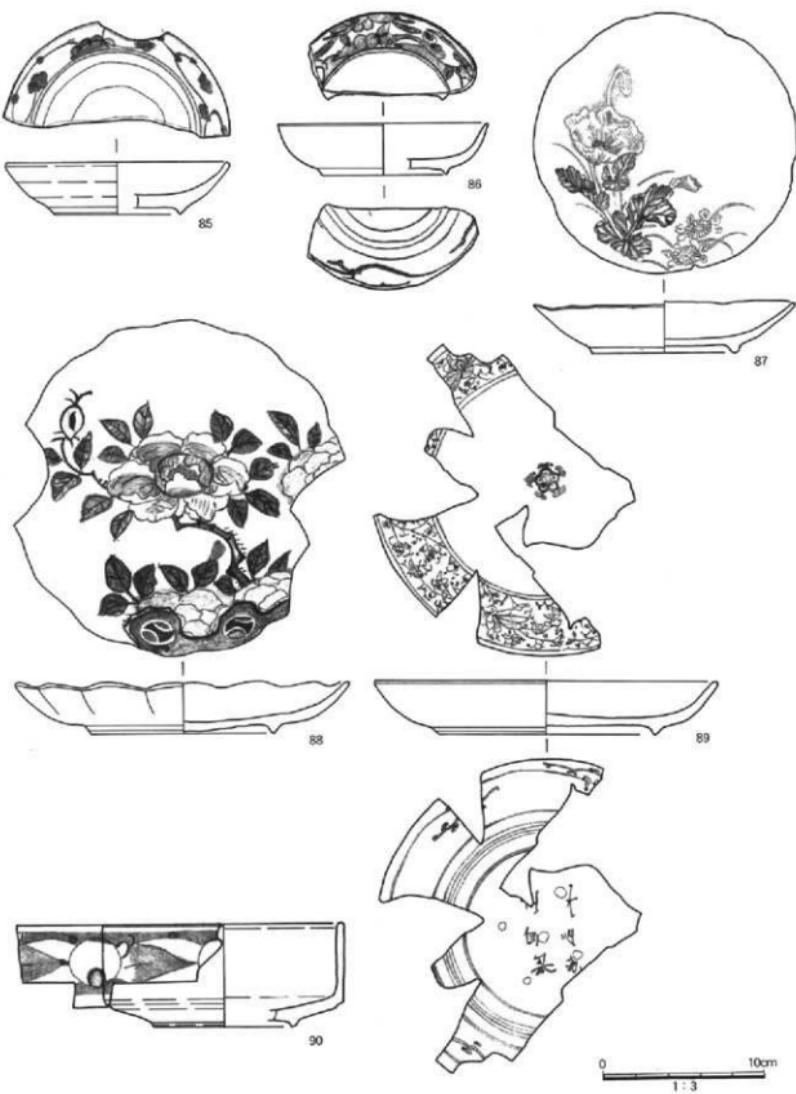
第23図 遺物実測図（5） 磁器



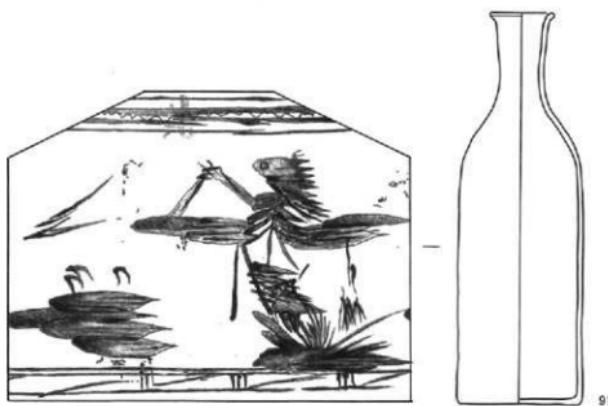
第24図 遺物実測図（6） 磁器



第25図 遺物実測図（7） 磁器



第26図 遺物実測図(8) 磁器

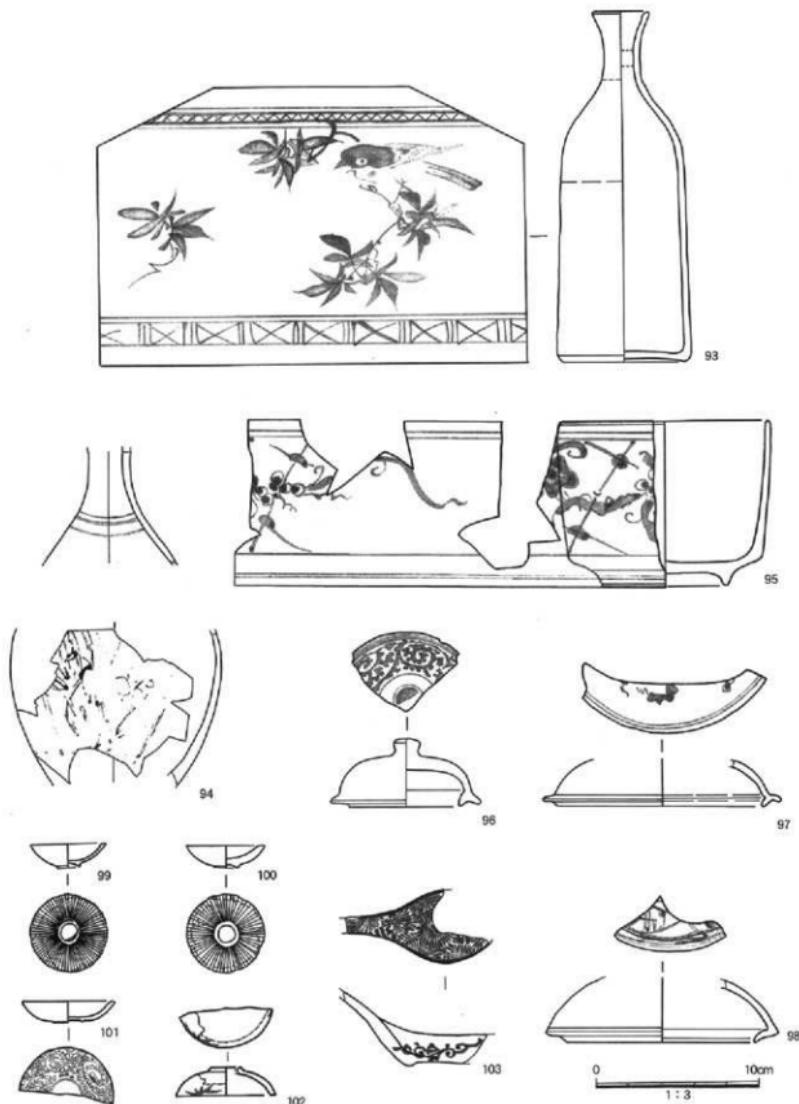


91



92

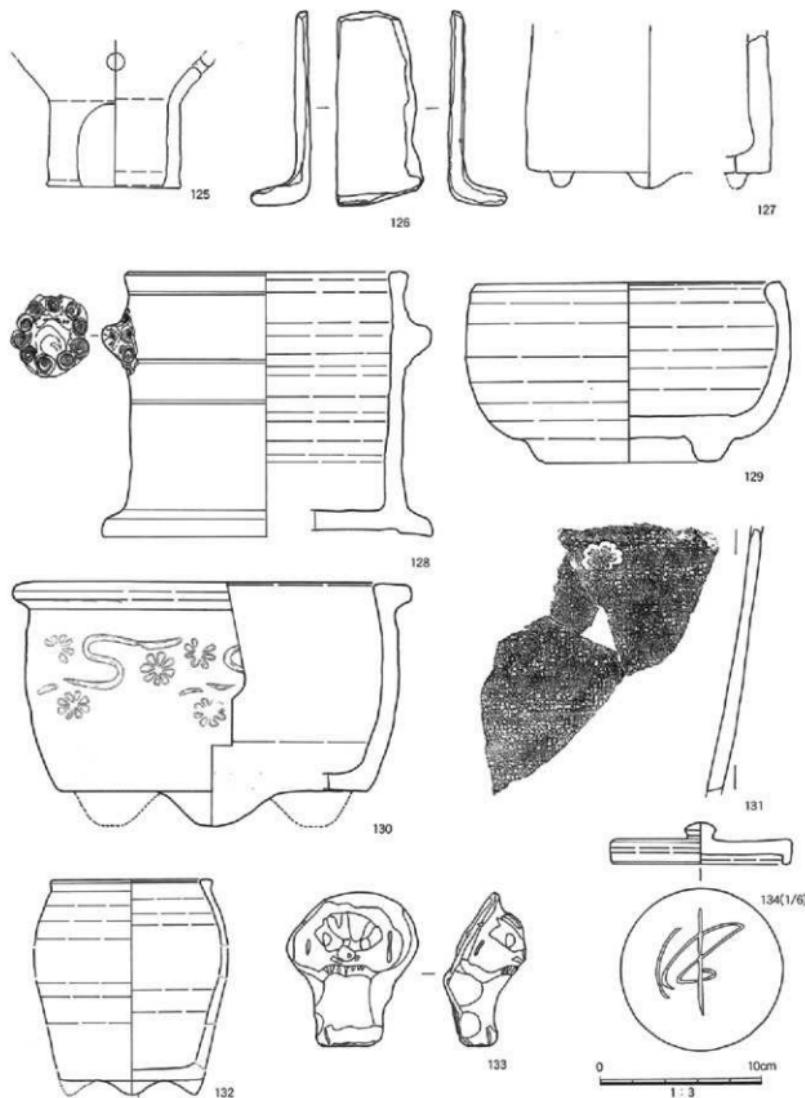
第27図 遺物実測図（9） 磁器



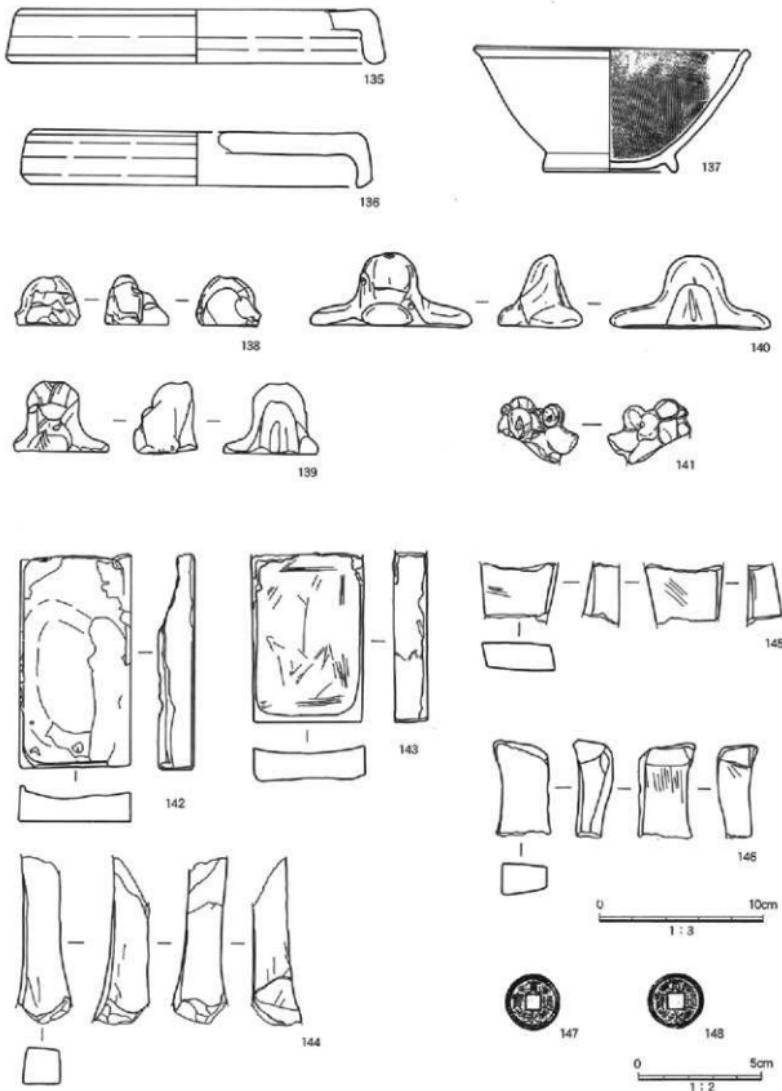
第28図 遺物実測図 (10) 磁器



第29図 遺物実測図 (11) 磁器・土器



第30図 遺物実測図 (12) 土器



第31図 遺物実測図(13) 土器・石製品・古銭

2 第2次調査出土遺物

第2次調査で出土した遺物の種別は、陶器・磁器・瓦質土器・石製品・木製品・骨格器などがあり、数量的にはコンテナ18箱に相当した。遺物の分布状況は第1次調査と異なり、遺構に伴うものは極く少なく、大半のものが包含層から出土している。年代的には1次調査同様、18世紀後半～19世紀が主体と捉えられたが、藤島城に関わる14世紀代の遺物も若干数確認された。以下では、種別に沿って遺物の特徴等を概述する。

陶 器(第32・33図)

中世に帰属する珠洲、近世陶器の唐津・備前・相馬・大宝寺などの各地製作品が出土している。1は珠洲系陶器大壺の口縁部資料である。肥厚してくの字状に屈曲する口縁形態が知られ、外面の口縁直下から平行タキ目が観察される。14世紀代に比定され、本遺跡から出土した遺物の中で最も古いものである。

2は唐津の碗、4・7は鉢である。4は八角鉢で灰釉が施され、底部には墨書による銘が認められる。口径386mmを測る大型品の7は体部が外傾して大きく開く形態で、内面に波溝状の刷毛目文が施される。3・5は相馬の土鍋と鍋蓋である。5の土鍋は口縁にのみ白色釉が施釉されるもので、外面には煤が付着している。6は大宝寺焼の小壺、9・10は湯通し、11は壺である。海鼠釉が施されるが、6は内面と口縁部にかけて施釉される。なお8は、白釉が施される染付けの湯通しで、在地系の製品である。11の壺は、外面の釉が火被りによって変色している。12～15は擂鉢で、12が備前系、その他は在地系の所産と認識される。

磁 器(第34～42図)

近世の国産品で、壺・盃・碗・碗蓋・皿・鉢・徳利・紅皿・仏飯器・香炉などの各器種が出土している。

壺(16・17)は緑釉が施される青磁で、16は肥前産と思われる。17には貫入が認められる。19・20は瀬戸・美濃産の盃である。

碗には瀬戸・肥前・有田・伊万里のものが認められる。18・22・27～31は瀬戸の碗である。22の底部には「青山年製」の銘が入る。31は端反型の器形を呈し、30は形態的特徴から蓋を伴うものと判断される。23は有田の碗で、24の蓋はこれと対になると思われる。双方とも色絵による花鳥図などが描かれる。25・26は伊万里の碗で、松竹梅などが赤絵で描かれる。

皿は瀬戸(35～37・44～47・49)と、肥前(32～34・38～41)のものが目に付く。他に、伊万里(42)と有田(43)のもののが存在する。形態的に輪花型を呈する32・38・47・48、方角型の36、変形型となる42、平型の43、浅胴丸型で段重皿となる41などが特徴的である。38・45・47は蛇の目高台を有する。39・40は見込みにコンニャク印判が押される。49は外面に七言絶句と考えられる「風門外水流柳口」の銘が認められる。

5点掲載した鉢(50～54)は、50が瀬戸、51・52が伊万里、53・54は肥前産のものである。これらは口縁形態が輪花型を呈しており、蛇の目高台を有している。

蓋には瀬戸(55・56)と伊万里(57)があり、3点とも形態と法量が異なるものである。57は19世紀前半の古伊万里に属し、底部に「富貴長春」の銘が入る。

58～62は肥前の徳利で、59と61は染付け絵柄から描いになるものである。63～65は肥前の紅皿である。白釉が施され、蛸唐草型押し文で共通する64・65は対になると思われる。

その他、ミニチュアの壺や桶といった玩具の類(66～68)、仏飯器(69)、香炉(70)が出土している。仏飯器は肥前、香炉は伊万里のものである。

瓦質土器・石製品・骨格器(第42図71～77)

瓦質土器では、火鉢(71)とコンロ(72)が出土している。いづれも19世紀代の江戸在地系に比定され、火鉢の把手には獣面彫刻が施される。

石製品には、戸車(73・74)と硯(75・76)が認められる。75はよく使い込まれており、S D 274溝跡内から出土したものである。

77はS K 239土坑から出土した骨格器の格籠で、基部に紐通し用の孔がある。

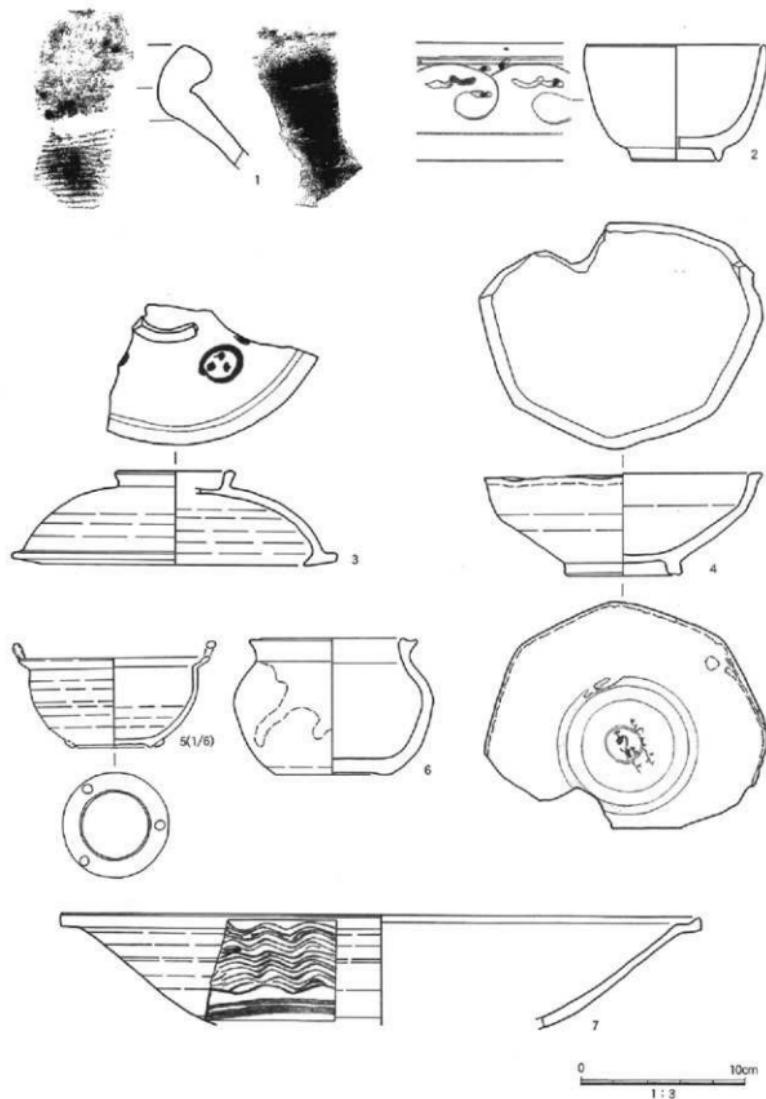
3 木製品(第43図)

第1・2次調査併せて、11箱相当の木製品が出土している。井戸跡に伴う曲物類をはじめ、漆器椀・箸・箆などの食器類、用途不明ながら農・工具と考えられる棒状や板状の加工品、それに下駄などの種が認められる。なお、実測掲載したのは遺存状態が良好で、ほぼ完形に近い極く一部のものに限ったことを付記しておく。

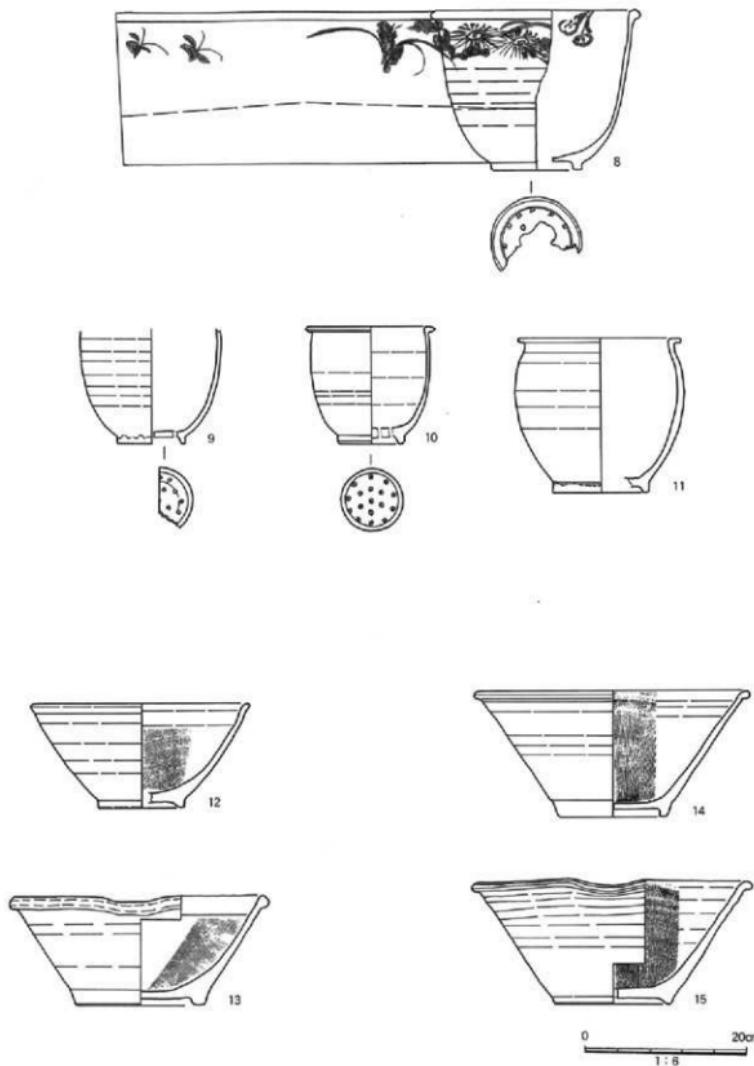
1はA区のS K 39土坑底面から出土した漆器椀である。土圧により押し潰されて変形している。加飾は内外面ともに黒色漆を塗布した後、赤色漆で絵付けを施している。絵付けには赤色漆の濃淡による表現の相異が認められる。2・3は対になる漆器椀で、B区のS X 107から出土したものである。外面黒色漆、内面は赤色漆で全面塗布される。

4は底板を伴う小型の曲物である。側板はほぼ2周したところで、桜皮と推測される樹皮によって固定される。

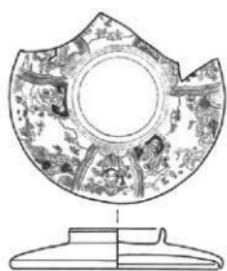
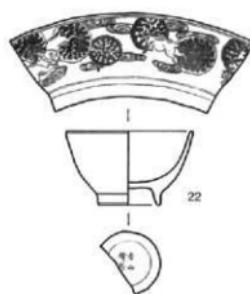
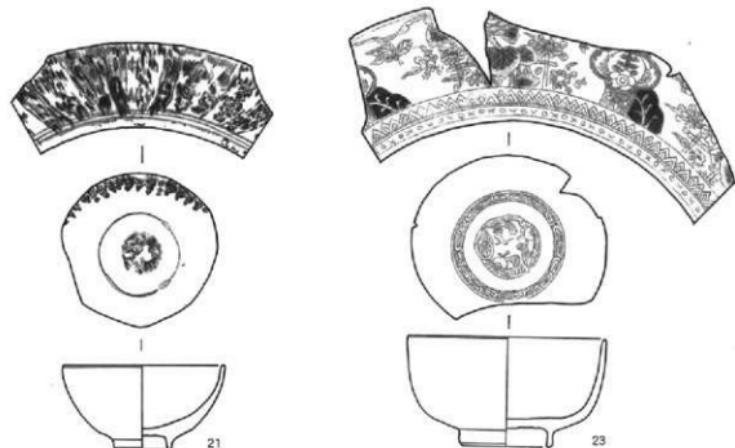
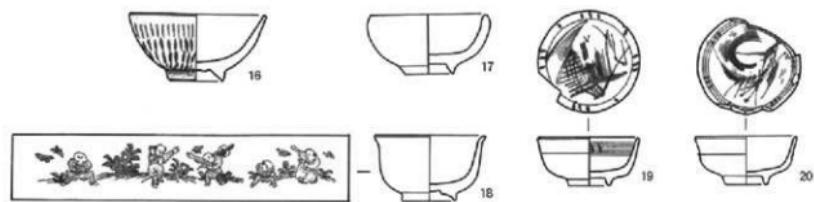
5は差歛下駄である。平面形が隅丸長方形を呈し、台形様の歛は先が摩耗して砂粒がくい込んでいる。



第32図 遺物実測図 (14) 陶器

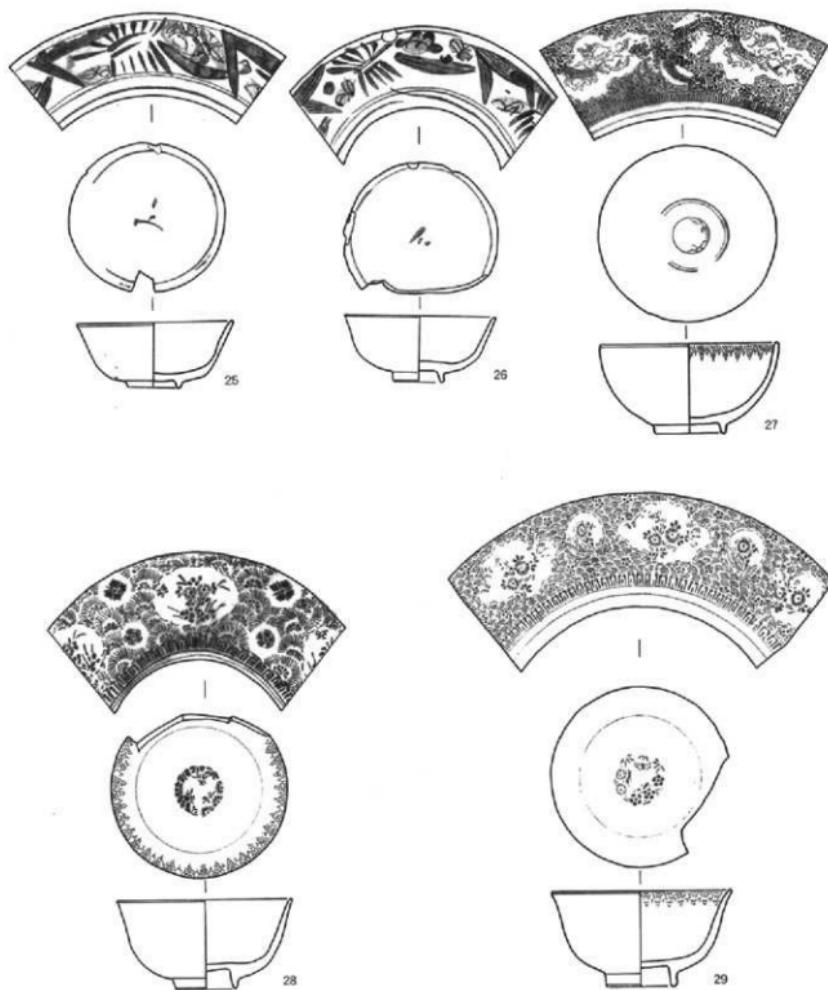


第33図 遺物実測図（15）陶器



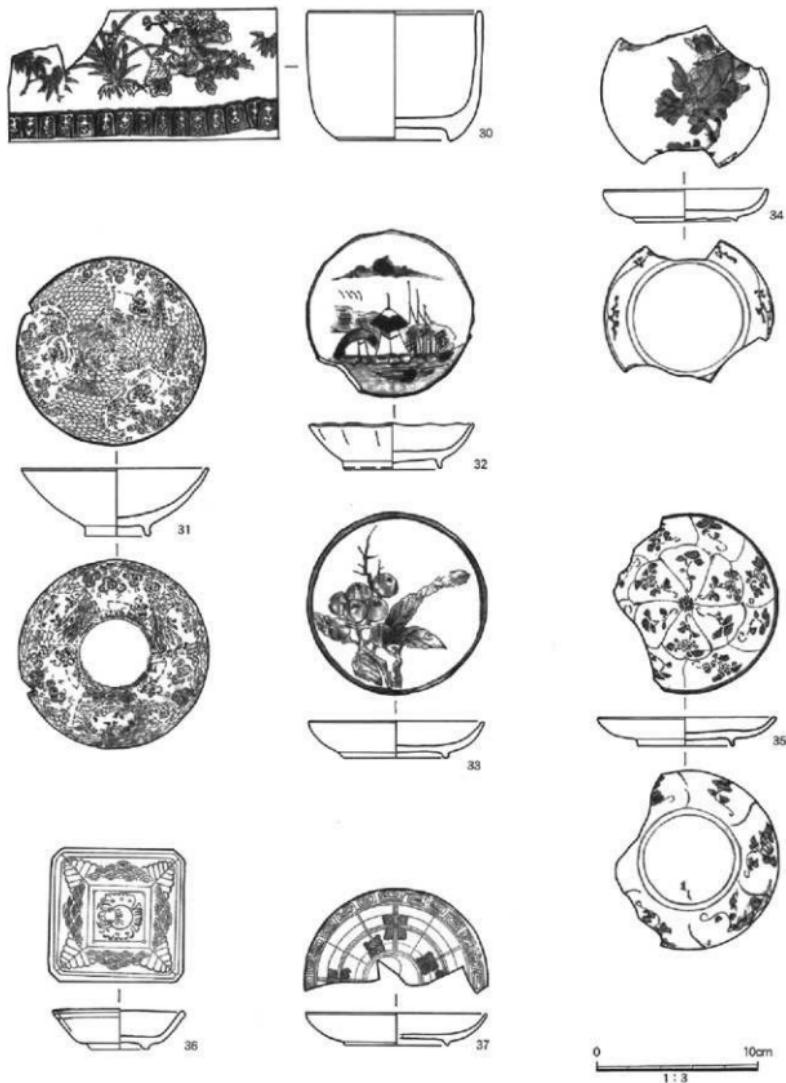
0
10cm
1:3

第34図 遺物実測図 (16) 磁器

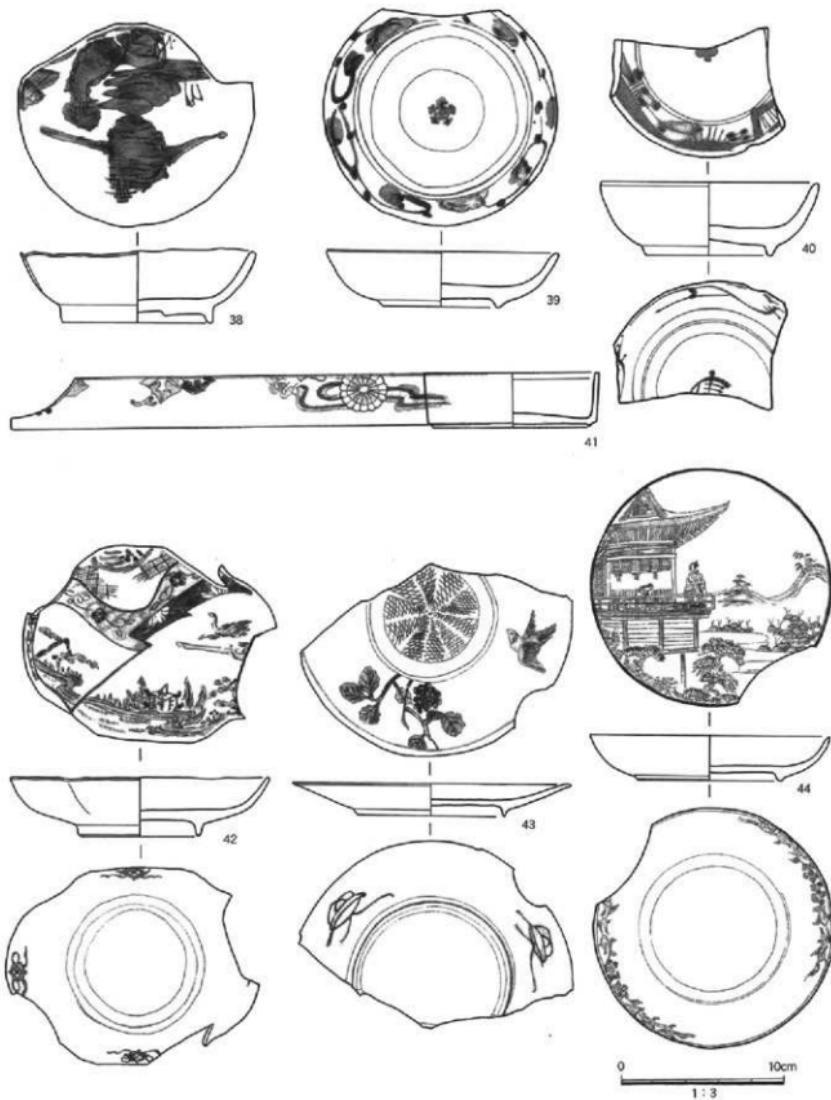


0
10cm
1:3

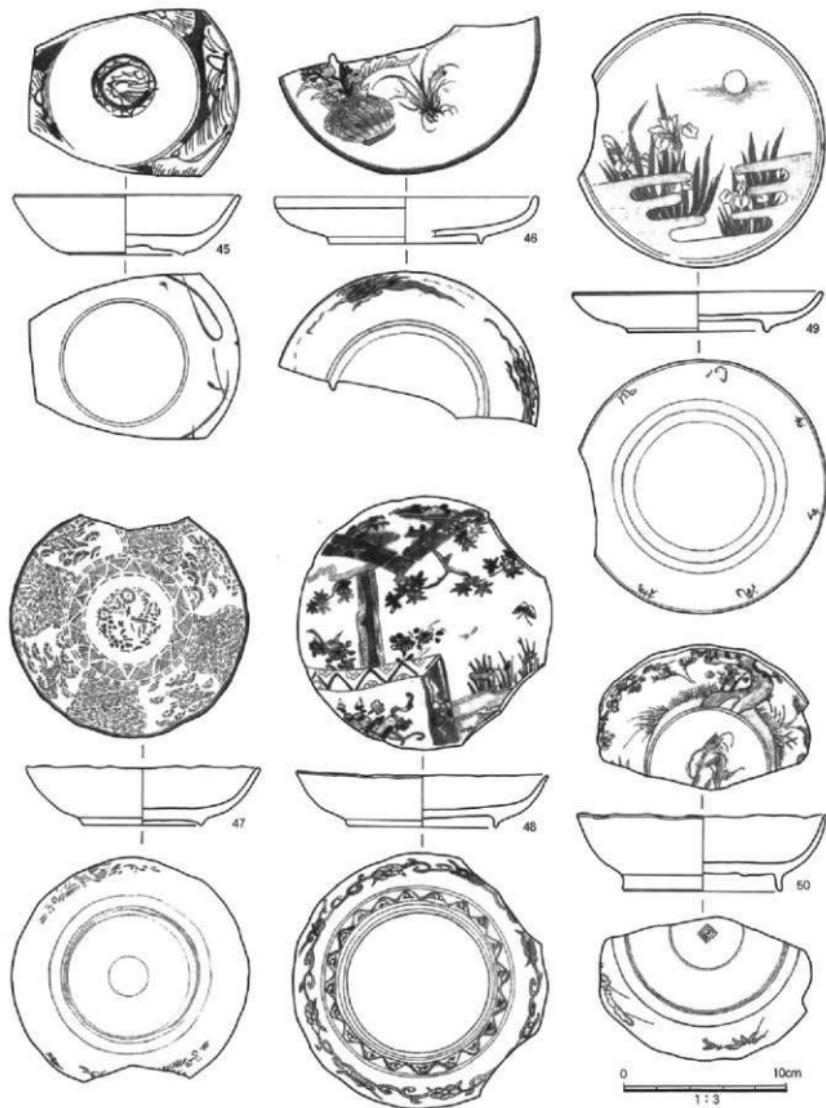
第35図 遺物実測図(17) 磁器



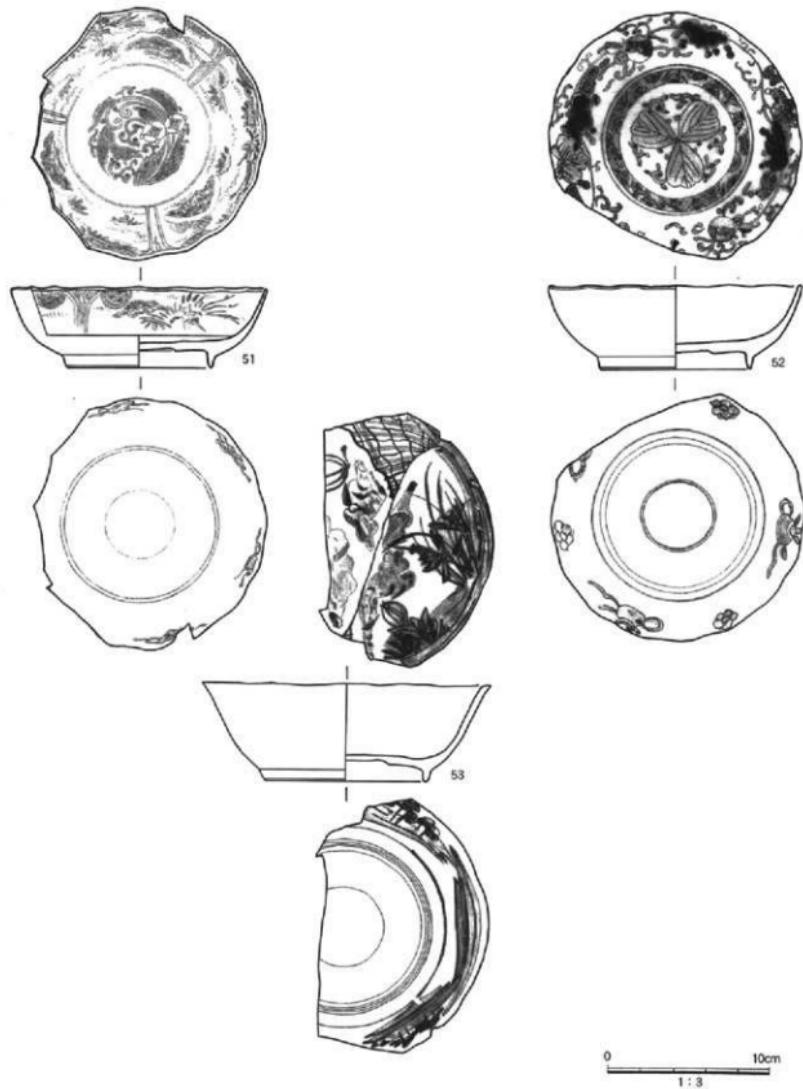
第36図 遺物実測図 (18) 磁器



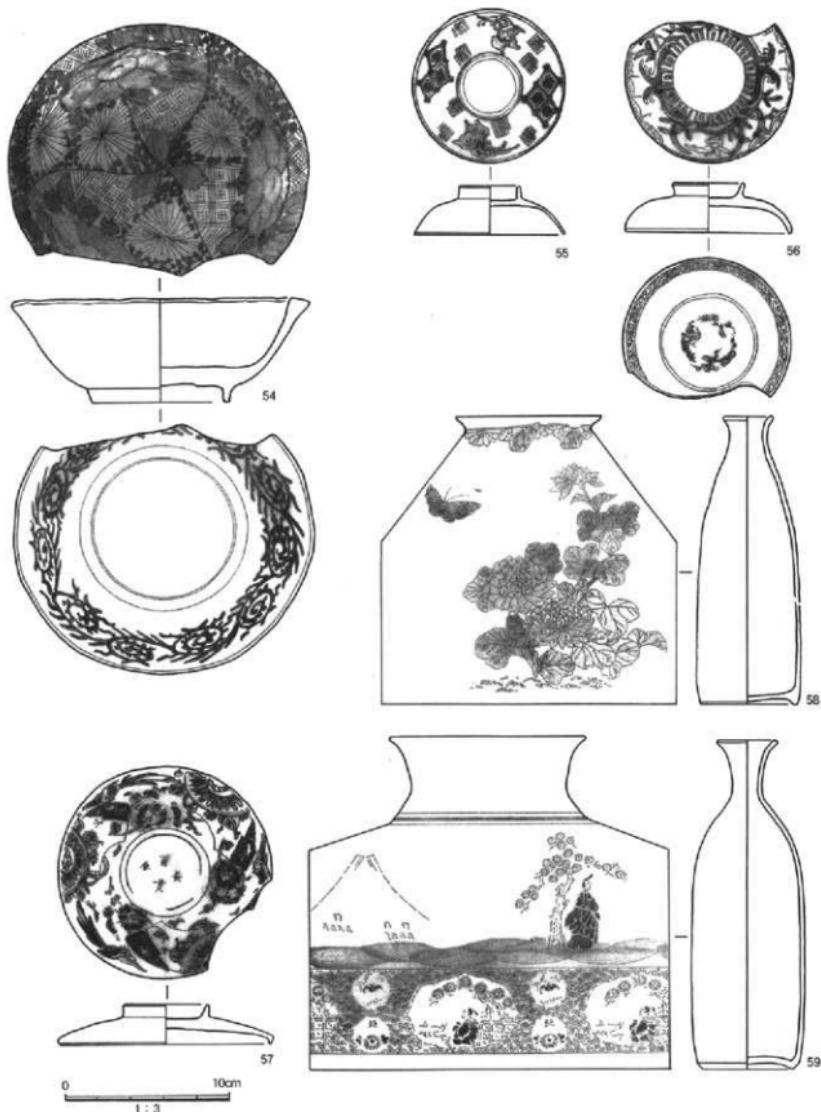
第37図 遺物実測図 (19) 磁器



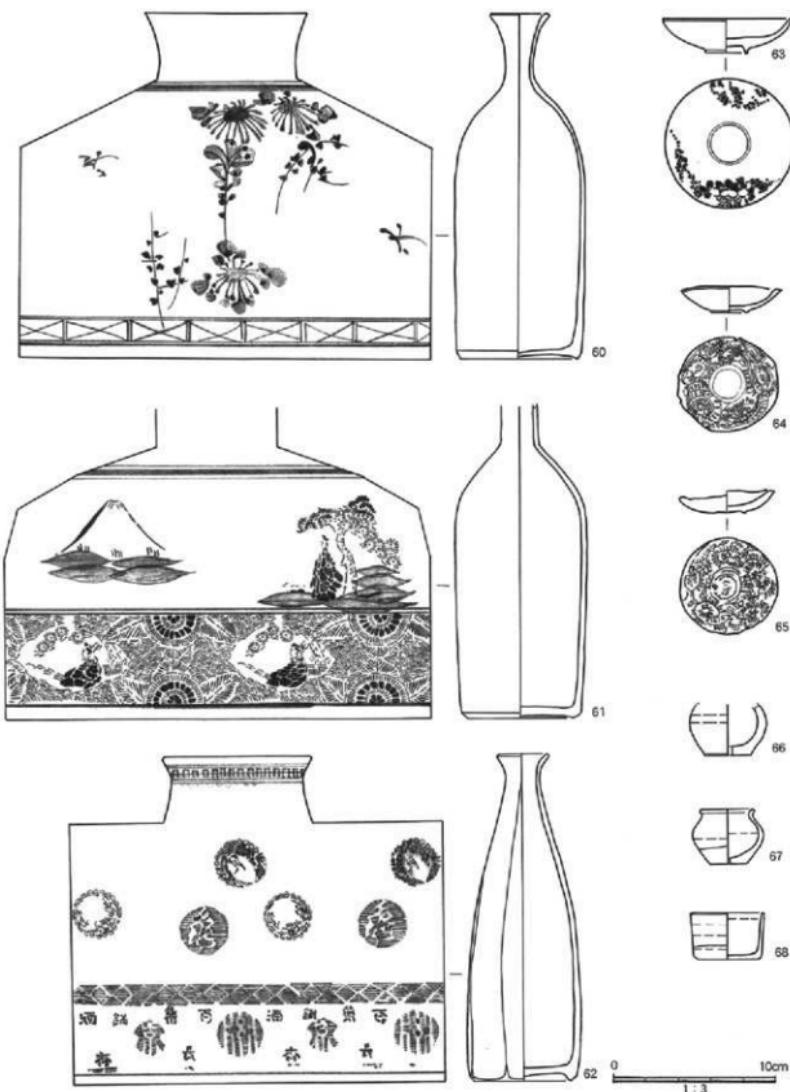
第38図 遺物実測図 (20) 磁器



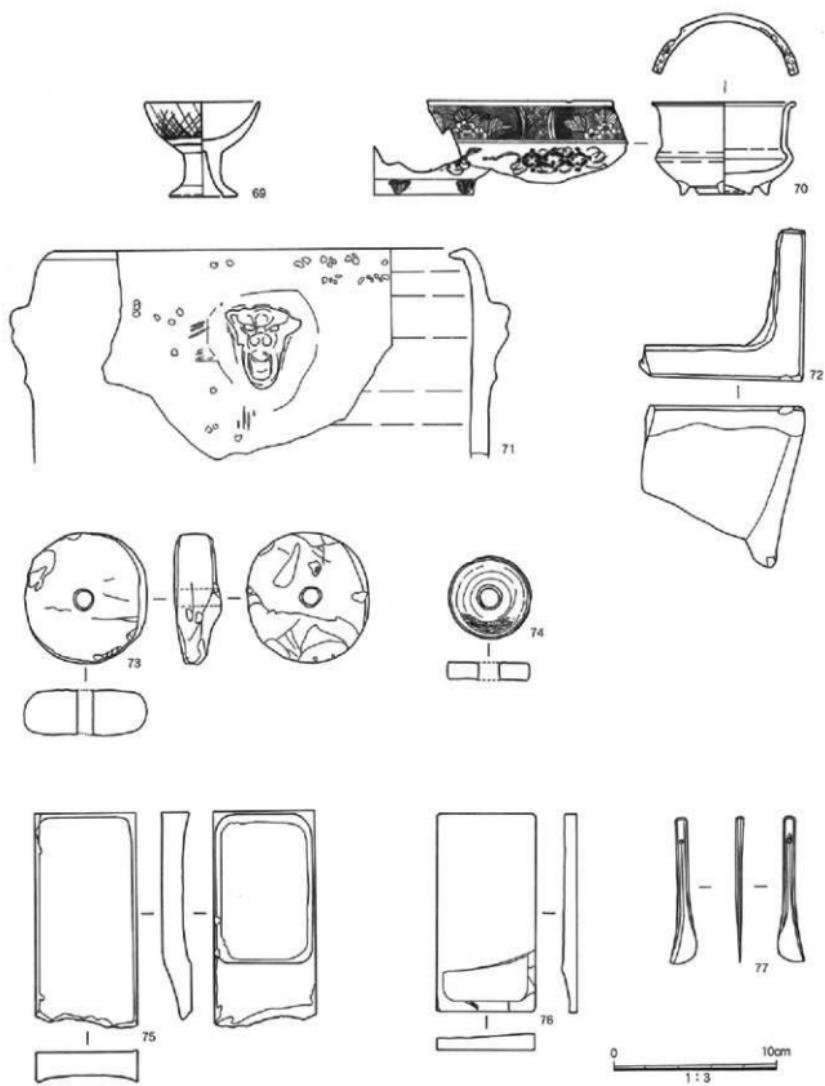
第39図 遺物実測図 (21) 磁器



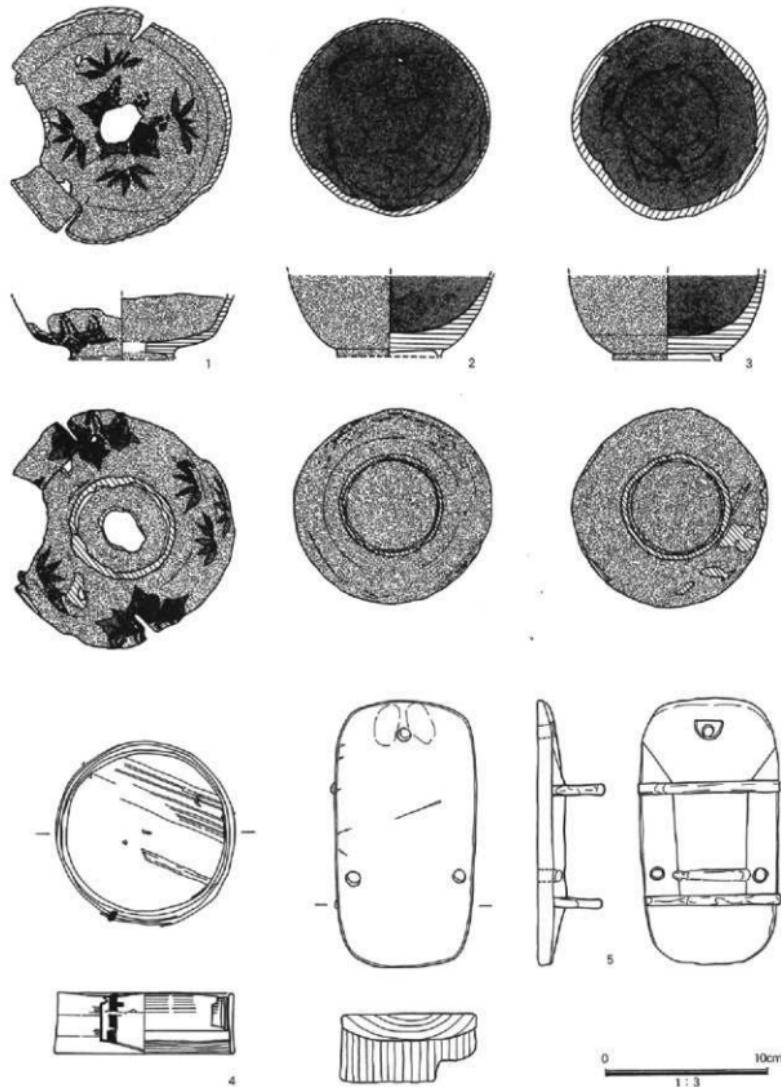
第40図 遺物実測図 (22) 磁器



第41図 遺物実測図 (23) 磁器・陶器・玩具



第42図 遺物実測図 (24) 仏具・土器・石製品・骨格器



第43図 遺物実測図 (25) 木製品

表3 第1次調査出土遺物観察表(1)

| 序号 番号 | 遺物 番号 | 器種 | 形状特徴 | 計測値(mm) | | | 釉色 | 胎土色 | 模様 | 印 | 跡 | 附付 | 文様 | その他 | 製作 | | 出土地点 |
|----------|----------|----------------|-------|---------|-------|-------|-------|------------------------|-------------------------|-----------------------------|---|----|----|-----|---------------|---------------|-------------|
| | | | | 口径 | 底径 | 高さ | | | | | | | | | 調作地 | 製作年代 | |
| 19 回 | 1 | 陶器 盤 | | | | | 灰 | 内面- 横内アテ 外側- 平行タクチ | | | | | | 難波 | 15世紀 | SX76-F2 | |
| | 2 | 陶器 盤 | | | | | 灰 | 内面- 横内アテ 外側- 平行タクチ | | | | | | 難波 | 15世紀 | SX49-F | |
| | 3 | 陶器 盤 | | | | | 灰 | 内面- 横内アテ 外側- 平行タクチ | | | | | | 難波 | 15世紀 | S0105-F | |
| | 4 | 陶器 盤 | | | | | 赤褐色 | 内面- ロクロ底 内側- アテ痕 | | | | | | 難波 | 15世紀 | S023-F | |
| | 5 | 陶器 盤鉢 | | | | | 灰 | 内面- ロクロ底 内側- 12条の縞目 | | | | | | 難波 | 15世紀 | S023-F | |
| | 6 | 陶器 盤鉢 | | | | | 灰 | 外側- ロクロ底 内面- 10条の縞目 | | | | | | 難波 | 16世紀 | SX39-F | |
| | 7 | 陶器 盤鉢 | | | | | 灰 | 内面- 外側- ロクロ底 縞目有り | | | | | | 難波 | 中世 | SX01-F | |
| | 8 | 陶器 盤鉢 | | | | | 灰 | 内面- ロクロ底 内側- 縞目 | | | | | | 在地系 | 15世紀 | SX107-F | |
| | 9 | 陶器 皿 | (152) | | | | 自然釉 | 灰白 | 内外面- ロクロ底 | | | | | | 瀬戸 (古瀬戸) | 15世紀 | SX36-F |
| | 10 | 陶器 皿 | | 40 | | | 透明釉 | 灰白 | 見込み- 草花サビ跡 | | | | | | 堅前 (京焼写し) | 1700~ 1750 | SX94-F |
| | 11 | 陶器 中碗 | | 118 | 46 | 47 | 122 | 透明釉 | 灰 | 内側- 草花サビ跡 全体に黄土有り | | | | | 瀬戸 京焼写し | 1750~ 1800 | SX09-F |
| | 12 | 陶器 小皿 | 方角皿 | (115) | (60) | 26 | (116) | 静態 | 褐 | 見込み- 砂型押し | | | | | 瀬戸 | 1850~ 1900 | S099-F |
| | 13 | 陶器 碗 | 輪花型 | 158 | 67 | 60 | 164 | 輪輪 | 灰茶 | 口縁- 輪花 ケズリ有り高台 | | | | | 唐津 | 1900~ 1950 | SX107-F |
| 20 回 | 14 | 陶器 中碗 | | | | 46 | 透明釉 | 灰 | 外側- 桜文コニヤ克印柄 全体に黄土有り | | | | | 瀬戸 | 1800~ 1850 | SX94-F | |
| | 15 | 陶器 皿 | | | 69 | | 102 | 緑釉 | 褐 | 内面- 外側- ロクロ底有り 縞目- 赤褐色有り | | | | | 瀬戸 | 19世紀後 | SX04-F |
| | 16 | 陶器 皿 | | 102 | 90 | 15 | 138 | 海鼠釉 | 茶 | 内外面- ロクロ底 | | | | | 金太郎丸 | 1800~ 1870 | SX76-F |
| | 17 | 陶器 皿 | 圓皿 | 96 | | | 100 | 海鼠釉 | 褐 | 口縁- 打ち有り の間に、灰落しに似用 | | | | | 大宝寺 | 19世紀後 | SX76-F3 |
| | 18 | 陶器 玩具 | | | 30 | | | 海鼠 海鼠 | 褐 | 口縁部から心肩部にかけて海鼠釉 | | | | | | 1750~ 1800 | SX76-F1 |
| | 19 | 陶器 玩具 灰陶 | | 40 | 23 | 33 | 48 | 荷包釉 | 褐 | 内面- 外側- ロクロ底 底面- 黑褐色 | | | | | 唐津 | 1850年頃 | C-10 III |
| | 20 | 陶器 玩具 人形 | | 75 | 横42 | 厚さ29 | | | 不明 | 黒拂り(大風呂) 壓出し成形 メッキ底有り | | | | | 不明 | 1850~ 1900 | SX76-F |
| | 21 | 陶器 不明 | | | | 72 | | 透明釉 | 灰茶 | 捺付 内面- 細押し痕有り 外側- 体部に壓巻 | | | | | 萩 | 1900年頃 | C-9 III |
| | 22 | 陶器 盤 | | (186) | 136 | (206) | | 褐色釉 | 灰 | 内外面- ロクロ底 | | | | | 瀬戸 | 1850~ 1880 | C-8 III |
| | 23 | 陶器 盤 | | | 196 | | | | 茶 | 内外面- ロクロ底 外側- 文様有り | | | | | 唐津 | 1870~ 1920 | SX76-F2 |
| | 24 | 陶器 盤鉢 | | (520) | | | | 灰褐色 | 赤褐色 | 内外面- ロクロ底有り 刷毛目底有り | | | | | 唐津 | 1870~ 1920 | SX76-F1 |
| 21 回 | 25 | 陶器 盤 | | (362) | (205) | (422) | (376) | 褐釉 | 赤褐色 | 内面- ロクロ底 内側- アテ痕 | | | | | 唐津 | 1850~ 1900 | SX76-F |
| | 26 | 陶器 盤 | | | 88 | | | 海鼠釉 | 灰茶 | 内外面- ロクロ底有り 底面- 黑褐色 | | | | | 大宝寺 | 1820~ 1880 | SX76-F |
| | 27 | 陶器 盤 | | | 178 | | 202 | 海鼠釉 | 茶 | 内外面- ロクロ底 | | | | | 大宝寺 | 1820~ 1880 | SX76-F |
| | 28 | 陶器 盤 | | (146) | (107) | 113 | | 海鼠釉 | 褐 | 内外面- ロクロ底有り 火被り | | | | | 大宝寺 | 1900~ 1940 | SX76-F2 |
| | 29 | 陶器 盤 | | | 80 | | | 褐色釉 | 灰茶 | 内外面- ロクロ底有り 火被り | | | | | 大宝寺 | 1900~ 1940 | SX76-F2 |
| | 30 | 陶器 盤 | | | 110 | | 138 | 海鼠釉 | 褐 | 内外面- ロクロ底 | | | | | 大宝寺 | 1900~ 1940 | SX76-F |
| | 31 | 陶器 盤 | | (136) | (145) | 247 | (216) | 海鼠釉 | 褐 | 内外面- ロクロ底 内側- 緑子目アテ | | | | | 在地系 | 1850~ 1880 | SX76-F2 |
| | 32 | 陶器 盤 | | | 112 | 224 | 214 | 海鼠釉 | 白茶 | 内外面- ロクロ底 | | | | | 在地系 | 1880~ 1900 | SX107-F |
| | 33 | 陶器 盤 | | (290) | | (272) | (354) | 白色釉 | 赤褐色 | 刷毛目底有り | | | | | 在地系 | 1880~ 1900 | SX107-F |
| | 34 | 陶器 盤鉢 | | (326) | | | (332) | 褐色釉 | 茶 | 内外面- ロクロ底有り | | | | | 唐前 | 19世紀後 | SX76-F2 + 3 |
| | 35 | 陶器 盤鉢 | | (310) | (162) | (163) | | 褐色釉 | 茶 | | | | | | 唐前 | 19世紀後 | SX76-F2 |

表4 第1次調査出土遺物観察表(2)

| 件目 番号 | 遺物 番号 | 器種 | 形状特徴 | 計測 値(mm) | | | 粘土 | 陶土色 | 模様 印 韵 | 焼付 | 文様 | その他 | 製作 | | 出土地点 | |
|--------------|----------|----------|------|----------|------|-----|-------|-----|--------|------------------------------------------------|--------|-----|----------------|---------------|---------------|--------|
| | | | | 口径 | 底径 | 高さ | | | | | | | 製作地 | 製作年代 | | |
| 第 21 回 | 36 | 陶器 灰灰 | | 236 | 97 | 102 | 241 | 褐色 | 茶 | | | | 焼前 | 20世紀初 | SK076-F2 | |
| | 37 | 陶器 油灰 | | 234 | 145 | 164 | 224 | 褐色 | 茶 | 内外面- ロクロ模 | | | 焼前 | 20世紀初 | SK04-F | |
| | 38 | 陶器 灰灰 | | 306 | | | | 褐色 | 褐 | 内面- 滑目 | | | 在地系 | 1850~ 1850 | SK07-F | |
| | 39 | 陶器 灰灰 | | 76 | 30 | 40 | 78 | 透明釉 | 灰白 | 染付- 外面- 水割り唇ちらし文 燒籠が折り | | | 窯戸 | 1750~ 1800 | SK04-F | |
| | 40 | 陶器 灰灰 | | 59 | 26 | 29 | | 透明釉 | 白 | 染付- 仰腹手縫付け- 口紅有り 腰帶- 座草つなぎ 内面- 富士に松原 | | | 窯戸 | 1750~ 1800 | SK07-F | |
| | 41 | 陶器 灰灰 | | 82 | 28 | 29 | 63 | 透明釉 | 白 | 内面- 桜花もしら済 | | | 窯戸 | 1850~ 1900 | SK07-F | |
| | 42 | 陶器 灰灰 | | 67 | 68 | 37 | 68 | 透明釉 | 白 | 染付- 外面- 水辺に鶴の餘 意疏に「玩品」款 | | | 窯戸 | 1850~ 1900 | SK07-F | |
| | 43 | 陶器 灰灰 | | | 23 | 30 | 56 | 透明釉 | 白 | 染付- 外面- 桜花ちらし | | | 窯戸 | 1900~ 1860 | SK04-F | |
| | 44 | 陶器 灰灰 | | 80 | 26 | 36 | 81 | 透明釉 | 白 | 染付- 外面- 草花文 | | | 肥前 | 1850~ 1900 | SK04-F | |
| | 45 | 陶器 灰灰 | | 72 | 27 | 39 | 76 | 透明釉 | 白 | 染付- 见込み-「海」字 外面- 磨すち文 | | | 肥前 | 1900年頃 | C-12 Ⅲ | |
| 第 22 回 | 46 | 陶器 灰灰 | | 74 | 20 | 35 | 74 | 透明釉 | 白 | 染付- 流込み-「海」字 外面- 桜花ちらし | | | 肥前 | 不明 | C-10 Ⅲ | |
| | 47 | 陶器 小瓶 | | 112 | | | 112 | 透明釉 | 白 | 染付- 外面- 草花文 | | | 肥前 | 1750~ 1820 | SK04-F | |
| | 48 | 陶器 小瓶 | | | | 40 | | 透明釉 | 白 | 底面に「大明製」銘 73年一か | | | 肥前 | 1780~ 1820 | SK04-F | |
| | 49 | 陶器 小瓶 | | 99 | 40 | 47 | 102 | 透明釉 | 灰白 | 染付- 外面- 松竹梅文 | | | 肥前 | 1780~ 1810 | SK04-F | |
| | 50 | 陶器 小瓶 | | 100 | 44 | 53 | 102 | 透明釉 | 灰 | 染付- 外面- 圖日文 | | | 肥前 | 波佐見 くわんか窓 | 1740~ 1780 | SK07-F |
| | 51 | 陶器 小瓶 | | (95) | (40) | 47 | | 透明釉 | 灰 | 染付- 外面- 圖日文 | | | 肥前 | 波佐見 くわんか窓 | 1740~ 1780 | B-8 Ⅲ |
| | 52 | 陶器 小瓶 | | 93 | (37) | 44 | 96 | 透明釉 | 白 | 染付- 外面- 草花つなぎ 底面が折り | | | 肥前 | 波佐見 くわんか窓 | 1740~ 1790 | SK04-F |
| | 53 | 陶器 小瓶 | 筒型 | 62 | 38 | 61 | 76 | 透明釉 | 白 | 染付- 見込み- 五弁花漏彌ぐすしコンニャ 印押 外側- 外面- 水割り唇ちらし | | | 肥前 | 1800~ 1850 | SK04-F | |
| | 54 | 陶器 小瓶 | 湯呑 | 76 | 35 | 57 | | 透明釉 | 白 | 染付- 外面- 竹に耕子文 | | | 肥前 | 1850~ 1900 | SK07-F | |
| | 55 | 陶器 小瓶 | 湯呑 | 64 | 38 | 60 | 72 | 透明釉 | 白 | 染付- 見込み- 五弁花コンニャ印押 外側- 水割り唇ちらし | | | 肥前 | 1800~ 1850 | SK07-F | |
| 第 23 回 | 56 | 陶器 小瓶 | | | | 40 | | 透明釉 | 白 | 染付- 草花文 | 底面に銘有り | | 肥前 | 1900~ 1925 | SK04-F | |
| | 57 | 陶器 小瓶 | | (102) | (42) | 47 | (104) | 透明釉 | 白 | 染付- 外面- 水底丸家月見・スキ文 燒籠が紙有り | | | 肥前 | 1900~ 1950 | SK04-F | |
| | 58 | 陶器 小瓶 | | 93 | 32 | 45 | 94 | 透明釉 | 白 | 色繪 外側- 方格区画内に「海」字 | | | 伊万里 赤絵茶碗 | 不明 | SK07-F | |
| | 59 | 陶器 中壺 | | 96 | 38 | 50 | 98 | 透明釉 | 灰 | 染付- 見込み- 五弁花漏彌ぐすし 印押 外側- 圖日文 | | | 肥前 | 1550~ 1600 | SK06-F1 | |
| | 60 | 陶器 中壺 | | 112 | 46 | 61 | 114 | 透明釉 | 白 | 染付- 見込み- 五弁花コンニャ印押 外側- 燐窓織籠ちらし 花底に「尚昌」略書 | | | 肥前 | 1680~ 1710 | SK04-F | |
| | 61 | 陶器 中壺 | | 98 | 44 | 52 | 100 | 透明釉 | 白 | 染付- 外面- 草花文 底面に銘有り | | | 肥前 | 1750~ 1780 | SK04-F | |
| | 62 | 陶器 中壺 | | 100 | 40 | 49 | 102 | 透明釉 | 白 | 染付- 外面- 草花文 | | | 肥前 | 1780~ 1810 | SK04-F | |
| | 63 | 陶器 中壺 | | (100) | 42 | 53 | | 透明釉 | 白 | 染付- 外面- 松竹梅草花文 底面に銘有り 燐窓織籠ちらし | | | 肥前 | 1780~ 1810 | SK04-F | |
| | 64 | 陶器 中壺 | | (100) | 39 | 49 | (104) | 透明釉 | 灰白 | 染付- 外面- 松竹梅文 | | | 肥前 | 1780~ 1810 | SK07-F | |
| | 65 | 陶器 中壺 | | (96) | 38 | 49 | (98) | 透明釉 | 灰 | 染付- 外面- 松竹梅文 | | | 肥前 | 1810~ 1840 | SK07-F | |
| | 66 | 陶器 中壺 | 丸壺 | (92) | 41 | 52 | (94) | 透明釉 | 灰 | 染付- 外面- 竹子文 底面- 番付- 外側- 丸壺草花文 | | | 対木窓 (くわんか窓) | 19世紀初 | 包含層 B 層 | |
| | 67 | 陶器 中壺 | | 103 | 42 | 61 | 106 | 透明釉 | 白 | 染付- 口沿- そらぐく文 底面- 番付- 丸壺草花文 | | | 肥前 | 1800~ 1850 | SK07-F | |
| | 68 | 陶器 中壺 | | (106) | (40) | 60 | | 透明釉 | 白 | 染付- 口沿- そらぐく文 底面- 番付- 丸壺草花文 | | | 肥前 | 1800~ 1900 | SK04-F | |
| | 69 | 陶器 中壺 | | 104 | 36 | 61 | 106 | 透明釉 | 白 | 染付- 口沿- おへ字 底面- 番付- 方耕子文 | | | 肥前 | 1800~ 1900 | SK07 | |
| | 70 | 陶器 中壺 | | 104 | 44 | 49 | 108 | 透明釉 | 白 | 染付- 見込み- おへ字 底面- 番付- 方耕子文 | | | 肥前 | 1800~ 1900 | SK07 | |

表5 第1次調査出土遺物観察表(3)

| 序 番 号 | 遺 物 番 号 | 形 状 類 | 形狀特徵 | 計 測 値 (mm) | | | | 釉面 | 胎土色 | 裝飾 | 山 紋 | 染付 | 文様 | その他 | 製 作 | | 出土地点 |
|-------------|------------------|-------------|------|---------------------|-------|----------|-------|-----|-----|---------------------------------------------------|--------|----|----|-----|--------------|----------------------------|-------------------|
| | | | | 口径 | 底径 | 高さ | 最大径 | | | | | | | | 製作地 | 製作年代 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 第24回 | 71 | 磁器 中盤 | | 112 | 38 | 46 | 118 | 透明釉 | 白 | 染付 内面-本仙文 | | | | | 信濃 (平茶碗) | 19世紀 | A区包含層 |
| | 72 | 磁器 中盤 | 輪反型 | 110 | 43 | 60 | 114 | 透明釉 | 白 | 染付 外面-松竹梅文 | | | | | 關戸 | 1850年頃 | B-8 III |
| | 73 | 磁器 小皿 | 輪花型 | 100 | 62 | 28 | 107 | 透明釉 | 白 | 染付 君臨天子花型壓印-松竹-草花-二つ丸 見込み-草-蝶-松-竹-草花-二つ丸 | | | | | 關戸 | 1850~ 1900 | SK107-F |
| | 74 | 磁器 小皿 | 輪花型 | 102 | 58 | 22 | | 透明釉 | 白 | 染付 内面-櫻蘭山水繪 ロサビア | | | | | 關戸 | 1850~ 1900 | SK107-F |
| | 75 | 磁器 小皿 | | 91 | 35 | 30 | 93 | 透明釉 | 白 | 染付 見込み-「鴻臚」略書 邊縁-花文-草木-白梅 ハギ有り | | | | | 關戸 | 1850~ 1900 | SK107-F |
| | 76 | 磁器 小皿 | | 104 | 50 | 23 | 105 | 透明釉 | 白 | 染付 片解-透款仕付け 内面-風車-菊花-松-波文 | | | | | 關戸 | 大正~ 昭和初期 | SK49 |
| | 77 | 磁器 小皿 | | (88) | (36) | 27 | (90) | 透明釉 | 白 | 染付 見込み-「大化年製」鉢 | | | | | 肥前 | 1900年頃 | B-10 III |
| | 78 | 磁器 小皿 | | 101 | 58 | 24 | 103 | 透明釉 | 白 | 染付 外面-落款社丹花絵 見込み-牡丹花絵 | | | | | 關戸 | 1850~ 1900 | SK107-F |
| | 79 | 磁器 小皿 | | 90 | 48 | 20 | 98 | 透明釉 | 白 | 見込み-青文型押印 仏足風の可能性有り | | | | | 關戸 | 1850~ 1900 | SK107-F |
| | 80 | 磁器 小皿 | 方角型 | 81 | 36 | 24 | | 透明釉 | 白 | 見込み-菊花型押印 邊縁-青文型押印 | | | | | 關戸 | 1850~ 1900 | SK107-F |
| 第25回 | 81 | 磁器 中皿 | | (128) | 76 | 33 | (129) | 透明釉 | 白 | 染付 内面-輪-輪もじらし-葉裏-「大化年製」鉢 見込み-五瓣化粧ニクイ鉢 | | | | | 肥前 | 被施瓦 1740年代 | SK76-F3 |
| | 82 | 磁器 中皿 | 輪花型 | 127 | 76 | 34 | 140 | 透明釉 | 白 | 染付 内面-五瓣花コニャック鉢 邊縁-「落款」略書 見込み-「五瓣化粧ニクイ鉢」 | | | | | 關戸 | 1750~ 1790 | SK94-F |
| | 83 | 磁器 中皿 | | 126 | 68 | 37 | 136 | 透明釉 | 白 | 染付 邊縁-斜子文 内面-松葉文 鉢の目高 沙目有り | | | | | 關戸 | 肥前 被施瓦 1860~ 1880 | SK107-F |
| | 84 | 磁器 中皿 | | (140) | (78) | 34 | | 透明釉 | 白 | 染付 見込み-「鉢の文 | | | | | 關戸 | 1860~ 1880 | SK76-F2 |
| | 85 | 磁器 中皿 | | 136 | 77 | 32 | 137 | 透明釉 | 白 | 染付 内面-草花-草芽なぎ 輪ハギ-虎頭ぎ有り | | | | | 關戸 | 1750~ 1790 | SK94-F |
| | 86 | 磁器 中皿 | | 128 | | 76 | 32 | 透明釉 | 白 | 染付 内面-草花文 邊縁-草花文 | | | | | 關戸 | 1750~ 1790 | SK76-F2 |
| | 87 | 磁器 中皿 | 輪花型 | 156 | 90 | 31 | 160 | 透明釉 | 白 | 色繪 内面-織もじ 口紅有り | | | | | 有田 色繪屋14号 | 1950~ | SK97-F |
| | 88 | 磁器 大皿 | 輪花型 | 206 | 112 | 31 | | 透明釉 | 白 | 染付 内面-鈍丹絵 | | | | | 關戸 | 1950~ 1960 | SK86-F |
| | 89 | 磁器 大皿 | | (210) | (134) | 33 | (212) | 透明釉 | 白 | 染付 見込み-五瓣花コニャック鉢 見込み-「落款」略書 鉢の目高 沙目有り | | | | | 關戸 | 1860~ 1880 | SK76-F SK107-F |
| | 90 | 磁器 洗皿 | | 148 | | 63 | | 透明釉 | 白 | 染付 内面-梅花散文 | | | | | 關戸 | 1750~ 1780 | SK76-F2 |
| 第26回 | 91 | 磁器 便器 | | 76 | 7 | 24 | 16 | 透明釉 | 白 | 染付 内面-「道山」山絵に帆掛4舟 見込み-「落款」略書 | | | | | 關戸 | 1800~ 1850 | SK107-F |
| | 92 | 磁器 便器 | | 38 | 72 | 232 | | 透明釉 | 白 | 染付 内面-「道山」山絵に唐人臉 白墨に「高」字墨跡 | | | | | 關戸 | 1800~ 1850 | SK94-F |
| | 93 | 磁器 便器 | | (34) | 82 | 26 | | 透明釉 | 白 | 染付 内面-南斗に垂 | | | | | 關戸 | 1800~ 1850 | SK107-F |
| | 94 | 陶器 便器 | | | (130) | | | 透明釉 | 灰 | 内面-草木文 | | | | | 關戸 | 1750~ 1775 | SK76-F2 |
| | 95 | 磁器 湯呑(油) | | (130) | 76 | 102 | | 透明釉 | 灰 | 染付 内面-竹面い4朝顔 | | | | | 關戸 | 1750~ 1800 | SK94-F |
| | 96 | 磁器 蓋 | | (66) | | 42 | (92) | 白色釉 | 白 | 内面-蘿蔔唐草文 | | | | | 肥前 | 1860年代 B-C 16~19 | SK94-F |
| | 97 | 磁器 蓋 | | (146) | | | (28) | 透明釉 | 白 | 染付 内面-草花文 | | | | | 關戸 | 1750~ 1790 | SK76-F2 |
| | 98 | 磁器 蓋 | | 115 | | | | 透明釉 | 白 | 染付 内面-草面い4朝顔 | | | | | 關戸 | 1750~ 1800 | SK76-F2 |
| | 99 | 磁器 口紅瓶 | | 47 | 14 | 15 | 48 | 白色釉 | 白 | 壓押し成形 手持も掛け鉢 100才 | | | | | 關戸 | 1850~ 1900 | SK94-F |
| | 100 | 磁器 口紅瓶 | | 47 | 14 | 15 | 48 | 白色釉 | 白 | 壓押し成形 手持も掛け鉢 | | | | | 關戸 | 1850~ 1900 | SK107-F |
| 第27回 | 101 | 磁器 紅瓶 | | 57 | 29 | 13 | 29 | 透明釉 | 白 | 染付 内面-草花文压印 | | | | | 關戸 | 1850年頃 C-10 III | |
| | 102 | 磁器 紅瓶 | | (61) | (17) | | | 透明釉 | 白 | 染付 生地に一部真入有り | | | | | 關戸 | 1850年頃 C-7 II | |
| | 103 | 磁器 レンゲ | | | | | | 透明釉 | 白 | 染付 内面-草花文 内面-「高」字墨跡 | | | | | 關戸 | 1850~ 1940 | SK107-F |
| | 104 | 文部具 水滴 | 筆型 | たて | 60 | よこ 46 | | 透明釉 | 灰 | 内面-草花文 | | | | | 關戸 | 1850~ 1940 | SK74-F |
| | 105 | 文部具 水滴 | 筆型 | たて | よこ | 高さ | | 透明釉 | 灰 | 内面-草花文 | | | | | 關戸 | 1850~ 1900 | SK76-F2 |

表6 第1次調査出土遺物観察表(4)

| 件名 番号 | 遺物 番号 | 器種 | 形状特徴 | 計測値(mm) | | | 釉薬 | 胎土色 | 模様 印文 染付 文様 | その他 | 製作 | | 出土地点 |
|-------------|----------|---------------|------|----------|----------|----------|------|-----|-------------|------------------------|----------------|---------------|---------|
| | | | | 口径 | 底径 | 高さ | | | | | 製作地 | 製作年代 | |
| | | | | (mm) | (mm) | (mm) | | | | | | | |
| 第 四 回 | 106 | 唐物 仏花瓶 | | | (42) | (84) | | 透明釉 | 白 | 染付 外面-水仙文 火受け有り | 瀬戸 | 1760~ 1800 | SH35-P2 |
| | 107 | 唐物 仏花瓶 | | | | (36) | | 透明釉 | 灰 | 染付 | 瀬戸 | 1820~ 1860 | 包含層Ⅲ層 |
| | 108 | 唐物 仏花瓶 | | (40) | 63 | (53) | (43) | 灰釉 | 灰白 赤褐色 | 内面の胎土が黒化 | 肥前 有田 (青磁) | 1900年頃 | 包含層Ⅱ層 |
| | 109 | 御神酒池利 | | 15 | | (100) | | 透明釉 | 灰 | 染付 外面-鮑唐草文 | 肥前 | 1750~ 1800 | SH36-P2 |
| | 110 | 唐物 仏花器 | | | 46 | 37 | | 透明釉 | 白 | 染付 外面-鮑唐草文 | 肥前 | 1700~ 1750 | SH36-P |
| | 111 | 唐物 仏花器 | | | 62 | | | 透明釉 | 灰 | 染付 外面-菊ちらし | 肥前 | 1750~ 1800 | SH36-P2 |
| | 112 | 唐物 仏花器 | | | 56 | | | 透明釉 | 白 | 染付 外面-丸窓鶴子文 見込みに見吊り | 肥前 有田 (有田焼) | 1900年頃 | 包含層Ⅰ層 |
| | 113 | 唐物 仏花器 | | | 60 | | | 透明釉 | 灰 | 染付 外面-鯉鈎唐草文 蛇の目高台 | 肥前 | 1800~ 1850 | SH36-P1 |
| | 114 | 瓦質 仏花瓶 | | | (24) | (37) | (32) | 透明釉 | 白 | 外腹-文様有り(種類不明) | 肥前 | 1750~ 1800 | SH34-P |
| | 115 | 瓦質 御神酒池利 | | | | | 44 | 透明釉 | 灰 | 外腹-鮑唐草文 | 肥前 | 1800~ 1850 | SH34-P |
| | 116 | 瓦質 鉢 | | (46) | (30) | (30) | (46) | 透明釉 | 灰 | | 瀬戸 | 1850~ 1900 | SH34-P |
| | 117 | 羅襪足 人形 | | | | | | 透明釉 | 白 | 羅襪足(羽足) 壓印し成形 | 瀬戸 | 1850~ 1900 | A区包含層 |
| | 118 | かわらけ 燈明皿 | | 92 | 72 | 13 | 94 | | 青 | 内面-ロクロ底 底面-赤切妻底有り | 在地系 | 15世紀 | SH23-P |
| | 119 | かわらけ 小皿 | | (82) | | (20) | (93) | | 青 | 内面-ロクロ底 外周-壓印し成形 | 在地系 | 15世紀 | SH24-P |
| 第 五 回 | 120 | 瓦質 鉢 | | | | | | 灰 | 青 | 取っ手-指押し痕有り 壓印し成形 | 江戸在地系 | 1820~ 1860 | SH107-P |
| | 121 | 瓦質 鉢 | | | | | | 灰 | 青 | 型押し成形 | 江戸在地系 | 1820~ 1860 | SH107-P |
| | 122 | 瓦質 鉢 | | | | | | 灰 | 青 | 取っ手-指押し痕有り 壓印し成形 | 江戸在地系 | 1850~ 1890 | SH107-P |
| | 123 | 瓦質 コシロ | | | 162 | | | 灰 | 青 | 外腹- 離縫刻絵 | 江戸在地系 | 1820~ 1860 | SH36-P2 |
| | 124 | 瓦質 コシロ | | | 150 | | | 灰 | 青 | 型押し成形 | 江戸在地系 | 1820~ 1860 | SH36-P1 |
| | 125 | 瓦質 コシロ | | | (84) | (78) | | 青 | | | 在地系 | 1850~ 1880 | B5- III |
| | 126 | 瓦質 鏡口 | | | | | | 灰 | 青 | 型押し成形 | 江戸在地系 | 1820~ 1860 | SH107-P |
| | 127 | 瓦質 七輪 | | | | | | 青 | 青 | 型押し成形 | 在地系 | 1850~ 1900 | SH37-P |
| | 128 | 瓦質 手あぶり | | 168 | 200 | 163 | 204 | 褐茶 | 青 | 内面-ロクロ底 足元-脚面延展 | 江戸在地系 | 1850~ 1890 | SH34-P |
| | 129 | 瓦質 手あぐいの吸口 | 細縄垂 | 172 | 134 | 111 | 186 | 褐茶 | 青 | 内面-ロクロ底 手元-吸口底有り | 江戸在地系 | 1850~ 1890 | SH107-P |
| | 130 | 瓦質 火鉢 | | | (244) | | | 褐茶 | 青 | 外腹- 蘭花印 型押し成形 | 江戸在地系 | 1820~ 1860 | B-10 P |
| | 131 | 瓦質 灰皿 | | | | | | 青 | 青 | 内面- ロクロ底 | 江戸在地系 | 1820~ 1860 | B5- III |
| | 132 | 瓦質 灰皿 | | 170 | 160 | 264 | 239 | 灰茶 | 青 | 内外面- ロクロ底 | 江戸在地系 | 1820~ 1860 | SH107-P |
| | 133 | 瓦質 手あぐいの吸口 | | タチ 93 | ヨコ 78 | 高さ 42 | | 灰茶 | | | 江戸在地系 | 1820~ 1860 | SH27-P |
| | 134 | 瓦質 灰皿 | | 196 | 194 | 48 | 223 | 灰 | 青 | 内面-へき書有り | 江戸在地系 | 1850~ 1890 | SH107-P |
| 第 六 回 | 135 | 瓦質 灰皿蓋 | | | (232) | | 33 | 青 | | | 江戸在地系 | 1850~ 1900 | SH31-P |
| | 136 | 瓦質 灰皿 | | 196 | 199 | 33 | 200 | 赤青 | | | 在地系 | 1850~ 1900 | SH31-P |
| | 137 | 瓦質 陶器類 | | 329 | 162 | 154 | 340 | 赤青 | 青 | 内外面- ロクロ底有り | 在地系 | 1820~ 1860 | A区包含層 |
| | 138 | 土製品 人形 | 人形 | タチ 31 | ヨコ 64 | 厚さ | | | 青 | 官女 型押し成形 | | | SH36-P |
| | 139 | 土製品 人形 | | タチ 33 | ヨコ 36 | 厚さ | 32 | | 青 | 内面(女) 型押し成形 | | | SH23-Y |
| | 140 | 土製品 人形 | | タチ 58 | ヨコ 32 | 厚さ | 16 | | 青 | 内面(女) 型押し成形 | | | SH36-P2 |

表7 第1次調査出土遺物観察表(5)

| 探査番号 | 遺物番号 | 器種 | 形状特徴 | 計測値(mm) | | | 粘土色 | 装飾 | 印鉢 | 染付 | 文様 | その他 | 製作 | | 出土地点 |
|------|------|------------|------|-----------|----------|----------|-----|----|----|----|--------------|-----|-----|------|---------|
| | | | | 口径 | 底径 | 高さ | | | | | | | 製作地 | 製作年代 | |
| 第31回 | 141 | 土製品 蠶人形 | | タテ 34 | ヨコ 43 | 厚さ 17 | | | | | 母子像 壓印し成形 | | | | SKE4-P |
| | 142 | 石製品 鏡 | | タテ 129 | ヨコ 66 | 厚さ 22 | | | | | | | | | SKE07-Y |
| | 143 | 石製品 鏡 | | タテ 113 | ヨコ 69 | 厚さ 20 | | | | | | | | | SKE07-Y |
| | 144 | 石製品 磨石 | | タテ 34 | ヨコ 43 | 厚さ 17 | | | | | | | | | SKE3-Y |
| | 145 | 石製品 磨石 | | タテ 58 | ヨコ 32 | 厚さ 16 | | | | | | | | | SKE4-P |
| | 146 | 石製品 磨石 | | タテ 34 | ヨコ 43 | 厚さ 17 | | | | | | | | | SKE3-Y |
| | 147 | 金銅製品 古鏡 | | | | | | | | | 寛永通宝 | | | | SKE1-P |
| | 148 | 金銅製品 古鏡 | | | | | | | | | 寛永通宝 | | | | SKE6-F |

表8 第2次調査出土遺物観察表(1)

| 探査番号 | 遺物番号 | 器種 | 形状特徴 | 計測値(mm) | | | 粘土色 | 装飾 | 印鉢 | 染付 | 文様 | その他 | 製作 | | 出土地点 |
|------|------|-----------|------|---------|-------|------|-------|----------------------|-----------------------|---------------------------------------|----|-----|----------------|---------------|-------------|
| | | | | 口径 | 底径 | 高さ | | | | | | | 製作地 | 製作年代 | |
| 第32回 | 1 | 陶器 大瓶 | | | | | 灰茶 | 外面- 平行タケ 内面- 横目アチ | | | | | 淡河 | 14世纪 | C区包含層 |
| | 2 | 陶器 中瓶 | | 110 | 54 | 72 | 112 | 透明釉 | 灰 | 外面- サビ鉢 | | | 唐津 | 1750~ 1800 | C区包含層 |
| | 3 | 陶器 土瓶 | | | | 58 | 灰胎 | 海 | 内面- ロクロ瓶 | | | | 相馬 | 1550~ 1900 | D区 II |
| | 4 | 陶器 瓶 | 八角瓶 | 154 | 68 | 83 | 172 | 灰胎 | 灰茶 | 内外面- ロクロ底 外側- 壁が竹縞、白色胎は口縁のみ | | | 唐津 | 1850~ 1900 | C区包含層 |
| | 5 | 陶器 土鍋 | | 220 | 86 | 111 | 250 | 白色胎 | 茶色 | 内外面- ロクロ底 外側- 脚が竹縞、底面に赤目模様有り | | | 相馬 | 1900~ 1950 | C区包含層 |
| | 6 | 陶器 小瓶 | | 80 | 70 | 84 | 122 | 海鼠胎 | 茶 | 内面と口縁部にかけて海鼠胎 底面に赤目模様有り | | | 大室寺 | 1880~ 1930 | C区包含層 |
| | 7 | 陶器 瓶 | | 386 | | (70) | (392) | 茶色 | 内外面- ロクロ底 内面- 解説自文 | | | | 唐津 | 1850~ 1900 | C区東部 包含層 |
| | 8 | 磁器 湯沸し | | 236 | 110 | 196 | 256 | 白胎 | 青 | 染付 外面- 花文 | | | 在地系 | 1850~ 1900 | C区包含層 |
| 第33回 | 9 | 陶器 湯沸し | | | 94 | | 174 | 海鼠胎 | 灰茶 | | | | 大室寺 | 1820~ 1850 | C区包含層 |
| | 10 | 陶器 湯沸 | | 136 | 78 | 144 | 158 | 海鼠胎 | 青 | | | | 大室寺 | 1850~ 1920 | C区包含層 |
| | 11 | 陶器 瓶 | | 200 | 120 | 191 | 208 | 海鼠胎 | 灰 | 外面- ロクロ瓶 外側の海鼠胎が火被りで変色 | | | 大室寺 もしらは在地系 | 1880~ 1950 | C区包含層 |
| | 12 | 陶器 瓶 | | 258 | 108 | 129 | 272 | 海鼠胎 | 茶色 | 内面-10条目ほどの割り目有り | | | 僧前系 | 1900~ 1950 | D区 D区P30 |
| | 13 | 陶器 瓶 | | 304 | 156 | 134 | 320 | 海鼠胎 | 白茶 | | | | 在地系 | 1900~ 1950 | C区包含層 |
| | 14 | 陶器 瓶 | | (340) | (134) | 156 | | 黑褐 | 内外面- ロクロ底 内面- 直目 | | | | 在地系 | 1900~ 1950 | C区包含層 |
| | 15 | 陶器 瓶 | | 332 | 148 | 150 | 346 | 海鼠 | 茶 | 内外面- ロクロ底 内面- 壁に目 | | | 在地系 | 1900~ 1950 | C区包含層 |
| | 16 | 粗織 环 | | 70 | 30 | 37 | 75 | 海鼠 | 白 | 青磁 | | | 肥前 | 1750~ 1800 | C区包含層 |
| 第34回 | 17 | 粗織 环 | | 70 | 30 | 37 | 75 | 海鼠 | 灰 | 青磁 買入有り | | | 不明 | 不明 | C区包含層 |
| | 18 | 粗織 小瓶 | | 66 | 34 | 41 | 68 | 透明釉 | 白 | 染付 外側- 童子に花・蝶紋らし | | | 肥前 | 1900~ 1950 | C区包含層 |
| | 19 | 粗織 瓶 | | 60 | 26 | 30 | 62 | 透明釉 | 白 | 染付 | | | 肥前- 美濃 | 1850~ 1900 | C区包含層 |
| | 20 | 粗織 瓶 | | 62 | 26 | 30 | 68 | 透明釉 | 白 | 染付 | | | 肥前- 美濃 | 1850~ 1900 | C区包含層 |
| | 21 | 粗織 小瓶 | | 100 | 36 | 52 | 50 | 透明釉 | 灰 | 染付 見込み-コンニャク印判 継邊- 乱らし文・外側- 鋼ひ鉢 | | | 肥前 | 1800~ 1850 | C区包含層 |
| | 22 | 粗織 小瓶 | | (76) | (38) | 46 | (76) | 透明釉 | 白 | 染付 外側- 片断紙の丸孔に免給 底裏に「青山年鑑」 | | | 肥前 | 1850~ 1900 | C区包含層 |
| | 23 | 粗織 中瓶 | | 120 | 58 | 61 | 122 | 透明釉 | 白 | 色絵 外側- 花鳥紋 24対 | | | 有田 | 1800~ 1850 | C区包含層 |
| | 24 | 粗織 中瓶 | | 128 | | 25 | 131 | 透明釉 | 白 | 色絵 外側- 山方花鳥風景绘 | | | 有田 | 1800~ 1850 | C区包含層 |

表9 第2次調査出土遺物観察表(2)

| 探査番号 | 遺物番号 | 器種 | 形状特徴 | 計測値(mm) | | | 釉系 | 胎土色 | 装飾印文 | 染付 | 文様 | その他 | 製作 | | 出土地点 | | |
|------|------|------|--------|---------|------|-----|-------|-----|----------------------------------------|------------------------------------|-------------------------|--------------------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|--------|
| | | | | 口径 | 底径 | 高さ | | | | | | | 製作地 | 製作年代 | | | |
| | | | | 最大径 | | | | | | | | | | | | | |
| 第35回 | 25 | 磁器中盤 | | 95 | 33 | 41 | 透明釉 | 白 | 色絵 外面-竹赤輪 282-対 | | | | 伊万里 | 1800~ 1850 | CJK包含層 | | |
| | 26 | 磁器中盤 | | 92 | 32 | 41 | 透明釉 | 白 | 色絵 外面-松竹梅赤輪 | | | | 伊万里 | 1800~ 1850 | DKE③RP25 | | |
| | 27 | 磁器中盤 | | 106 | 41 | 56 | 透明釉 | 白 | 染付 縞辺-ろうらぐ文 外側-模様指輪 | | | | 源戸 | 1850~ 1900 | DKE③RP4 | | |
| | 28 | 磁器中盤 | | 108 | 36 | 56 | 透明釉 | 白 | 染付 見込み-松竹梅文 縞辺-ろうらぐ文 外側-片割り紙の落書き文 | | | | 源戸 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | | |
| | 29 | 磁器中盤 | | 109 | 40 | 59 | 111 | 透明釉 | 白 | 染付 見込み-松竹梅文 縞辺-ろうらぐ文 外面-透紙留置 | | | 源戸 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | | |
| 第36回 | 30 | 磁器中盤 | 蓋物 | 106 | 70 | 80 | 108 | 透明釉 | 白 | 染付 外面-春蘭指輪 | | | 源戸 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | | |
| | 31 | 磁器中盤 | 縞反覆 | 112 | 20 | 42 | 115 | 透明釉 | 白 | 染付 内外面-型紙透り絵 | | | 源戸 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | | |
| | 32 | 磁器小皿 | 輪花型 | 100 | 61 | 28 | 102 | 透明釉 | 白 | 内面-山水樓閣圖 ロサビ有り | | | 肥前 | 1750~ 1800 | CJK包含層 | | |
| | 33 | 磁器小皿 | | 106 | 66 | 23 | 109 | 透明釉 | 灰白 | 染付 内面-雨天露 ロサビ有り | | | 肥前 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | | |
| | 34 | 磁器小皿 | | 102 | 33 | 20 | 透明釉 | 白 | 染付 内面-牡丹紋 外側-桜草つなぎ 鮎の目高台 | | | 肥前 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | | | |
| | 35 | 磁器小皿 | | 106 | 60 | 18 | 110 | 透明釉 | 白 | 染付 | | | 源戸 | 1900~ 1950 | SZ203-F | | |
| | 36 | 磁器小皿 | 方角型 | 92 | 35 | 25 | 透明釉 | 灰 | 内面-型押し文有り | | | 源戸 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | | | |
| 第37回 | 37 | 磁器小皿 | | | 64 | 20 | 112 | 透明釉 | 白 | 染付 縞辺-片割り紙落書き文 ロサビ有り | | | 源戸 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | | |
| | 38 | 磁器中皿 | 輪花型 | 138 | 90 | | 透明釉 | 白 | 内面-山水楼 足の目高台 | | | 肥前 | 1750~ 1800 | CJK包含層 | | | |
| | 39 | 磁器中皿 | | 142 | 70 | 34 | 143 | 透明釉 | 白 | 染付 見込み-五弁花コニャク山河 縞辺-海女つなぎ 絵ハギ有り | | | 肥前 | 1750~ 1800 | CJK包含層 | | |
| | 40 | 磁器中皿 | | (134) | (76) | 45 | 透明釉 | 灰 | 染付 見込み-五弁花コニャク山河 縞辺-万葉歌合鶴文 外面-唐草つなぎ | | | 肥前 | 1750~ 1800 | DKE③ II | | | |
| | 41 | 磁器中皿 | 洗脚丸型底重 | 100 | 94 | 29 | 106 | 透明釉 | 白 | 染付 外面-南に桔梗鉢 | | | 肥前 | 1900~ 1950 | CJK包含層 | | |
| | 42 | 磁器中皿 | 束形型 | (150) | 74 | 36 | 透明釉 | 白 | 色繪 内面-青磁区画繪 | | | 伊万里 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | | | |
| | 43 | 磁器中皿 | 平底 | 154 | 92 | 20 | 172 | 透明釉 | 白 | 内面-花園区画繪 | | | 有田 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | | |
| 第38回 | 44 | 磁器中皿 | | | 146 | 89 | 28 | 147 | 透明釉 | 白 | 内面-片割り紙の接觸繪 外側-唐草つなぎ | | | 源戸系 | 1800~ 1850 | CJK包含層 | |
| | 45 | 磁器中皿 | | | | 70 | 37 | 140 | 透明釉 | 白 | 染付 鮎の目高台 | | | 源戸 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | |
| | 46 | 磁器中皿 | | | | 182 | 94 | 29 | 182 | 透明釉 | 白 | 色絵 内面-花園上春細繪 外側-花文 | | | 源戸 | 1900~ 1950 | CJK包含層 |
| | 47 | 磁器中皿 | 輪花型 | 142 | 74 | 35 | 144 | 透明釉 | 白 | 染付 見込み-松竹梅文 縞辺-松竹梅に鳥足 縞辺-鳥竹梅に鳥足 | | | 源戸 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | | |
| | 48 | 磁器中皿 | 輪花型 | 150 | 91 | 33 | 156 | 透明釉 | 白 | 色繪 内面-水仙に水翁 外側-梅-山茶花文 | | | 不明 | 1800~ 1850 | CJK包含層 | | |
| | 49 | 磁器中皿 | | | | 146 | 89 | 28 | 147 | 透明釉 | 白 | 染付 内面-松竹梅 外側-楓葉外水仙開口器 | 七言詠句か? | | 源戸 | 1900~ 1950 | CJK包含層 |
| | 50 | 磁器洗沫 | 輪花型 | (152) | (98) | 48 | (154) | 透明釉 | 白 | 色繪 縞辺-松竹梅 縞辺-松竹梅に鳥足 | | | 源戸 | 1850~ 1900 | DKE包含層 | | |
| 第39回 | 51 | 磁器鉢 | 輪花型 | 154 | 45 | 50 | 156 | 透明釉 | 白 | 色繪 縞辺-花鳥-松竹梅三方繪 | | | 伊万里 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | | |
| | 52 | 磁器鉢 | 輪花型 | 154 | 92 | 52 | 156 | 透明釉 | 灰 | 色繪 縞辺-蘆葦と蘭のツタ草つなぎ 外側-柳-山茶花文 | | | 伊万里 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | | |
| | 53 | 磁器鉢 | 环洗い | | 100 | 60 | 178 | 透明釉 | 白 | 染付 内面-青磁繪 外側-松木繪 | 鰐の目高台 | | 肥前 | 1800~ 1850 | CJK包含層 | | |
| | 54 | 磁器鉢 | 輪花型 | 164 | 82 | 64 | 185 | 透明釉 | 白 | 染付 内面-蘆花型紙透繪 外側-綿草草つなぎ 鮎の目高台 | | | 肥前 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | | |
| | 55 | 磁器鉢 | | | | 94 | 38 | 30 | 94 | 透明釉 | 白 | 染付 楊枝 | | | 源戸 | 1850~ 1900 | CJK包含層 |
| 第40回 | 56 | 磁器鉢 | | | | | 31 | 103 | 透明釉 | 白 | 染付 見込み-松竹梅文 外側-草花化粧绘 | | | 源戸 | 1850~ 1900 | CJK包含層 | |
| | 57 | 磁器鉢 | | | | 126 | | 25 | 132 | 透明釉 | 白 | 色繪 花鳥-松竹梅 縞辺-花鳥 | 庭眞に貴賀共春;路 | | 伊万里 | 1800~ 1850 | CJK包含層 |
| | 58 | 磁器鉢 | | | | 30 | 60 | 176 | 31 | 透明釉 | 白 | 染付 外側-草丹絵 | | | 肥前 | 1850~ 1900 | CJK包含層 |
| | 59 | 磁器鉢 | | | | 38 | 56 | 203 | 70 | 透明釉 | 白 | 染付 外側-三割り紙の富士山・帆 縞辺舟・波下に人物絵 | 61と対 | | 肥前 | 1850~ 1900 | CJK包含層 |

表10 第2次調査出土遺物観察表(3)

| 辨 別 番 号 | 遺 物 番 号 | 器 種 | 形状特徴 | 計測値(mm) | | | | 釉 層 | 胎 土 色 | 装飾 | 印 結 | 焼付 | 文様 | その他 | 製 作 | | 出土地点 |
|------------------|------------------|-----------|-------------|----------|----------|-------|-------|--------|-------------|----------------------------------|--------|----|----|-----|--------|---------------|-----------------|
| | | | | 口径 | 底径 | 高さ | 最大径 | | | | | | | | 製作地 | 製作年代 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 第 41 回 | 60 | 磁器 碗 | | 34 | 72 | 213 | 72 | 透明釉 | 白 | 染付 外面- 菊花紋 | | | | | 肥前 | 1850~ 1900 | CKK 包含層 |
| | 61 | 磁器 碗 | | | 60 | | 82 | 透明釉 | 白 | 染付 外面- 印紙の富士山・帆 船・舟・波下に人物紋 | | | | | 肥前 | 1850~ 1900 | CKK 包含層 |
| | 62 | 磁器 碗 | | 30 | 50 | 201 | 70 | 透明釉 | 灰白 | 染付 外面- 片摺り紙の鶴・龜・菊花文 | | | | | 肥前 | 1850~ 1900 | CKK 包含層 |
| | 63 | 磁器 碗 | | 79 | 25 | 21 | 80 | 透明釉 | 白 | 染付 外面- 社内・藤紋 | | | | | 肥前 | 1800~ 1850 | CKK 包含層 |
| | 64 | 磁器 碗 | | 56 | 21 | 18 | 62 | 白釉 | 白 | 外腹- 鮎唐草型押し 6&上対か? | | | | | 肥前 | 1800~ 1850 | DEG④ 包含層 |
| | 65 | 磁器 碗 | | 54 | 20 | 14 | 60 | 白釉 | 白 | 外腹- 鮎唐草型押し | | | | | 肥前 | 1800~ 1850 | DEG④ 包含層 |
| | 66 | 玩具 金 | | | | 29 | | | | 褐胎 | 褐 | | | | 在地系 | 1900~ 1940 | DEG③ II |
| | 67 | 玩具 金 | | (27) | (25) | 34 | | | | 灰胎 | 茶 | | | | 在地系 | 不明 | DEG③ 826 |
| | 68 | 玩具 木 | | (46) | (36) | 29 | | | | 褐胎 | 褐 | | | | 在地系 | 1900~ 1940 | CKK 包含層 |
| 第 42 回 | 69 | 磁器 仏壇器 | | 68 | 40 | 59 | 70 | 透明釉 | 反白 | 染付 | | | | | 肥前 | 1800~ 1850 | CKK 包含層 |
| | 70 | 磁器 香炉 | | (88) | (33) | (57) | | 透明釉 | 白 | 色々 外面-赤絵 | | | | | 伊万里 | 1750~ 1800 | DEG② 包含層 |
| | 71 | 瓦質 火鉢 | | (250) | | (124) | (280) | | 茶 | 脚把手有り | | | | | 江戸在地系 | 1850~ 1900 | CKK 包含層 |
| | 72 | 瓦質 コンロ | | | | | | | | 灰茶 | | | | | 江戸在地系 | 1800~ 1850 | CKK 包含層 |
| | 73 | 石製品 戸裏 | 直径 75 | | 厚さ 28 | | | | | | | | | | 不明 | 不明 | DKK 包含層 |
| | 74 | 石製品 戸裏 | 直径 50 | | 厚さ 11 | | | | | | | | | | 不明 | 不明 | DKK 包含層 |
| | 75 | 石製品 鏡 | タテ (135) | ヨコ 43 | 厚さ 17 | | | | | | | | | | 不明 | 不明 | SK274-F3 NP7 |
| | 76 | 石製品 鏡 | タテ 121 | ヨコ 59 | 厚さ 11 | | | | | | | | | | 不明 | 不明 | DKK 包含層 |
| | 77 | 骨格標 若尾 | | | | | | | | | | | | | 不明 | 不明 | SK239-F |

表11 木製品観察表

| 辨 別 番 号 | 遺 物 番 号 | 器 種 | 計測値(mm) | | | 内 面 | 外 面 | 出土地点 | 備 考 | |
|------------------|------------------|--------|---------|-----|-------|--------|--------|-------|--------|------------|
| | | | 口径 | 底径 | 高さ | | | | | |
| 第 43 回 | 1 | 袖 | | | (65) | (44) | 黒漆 | 黒漆 | SK39 | 内外面に赤繪で墨葉文 |
| | 2 | | | | (124) | (64) | (50) | 赤漆 | SK107 | |
| | 3 | | | | (120) | 67 | (52) | 赤漆 | SK107 | |
| 第 44 回 | 4 | 曲 物 | 109 | | 38 | 圓ケビキ | 底板ケヅリ | SK107 | 側面板底止め | |
| | 5 | 下 駄 | 長さ165 | 幅88 | 高さ44 | | | SK274 | 逆曲 | |

V まとめと考察

藤島D遺跡は藤島町の市街地である中町に所在し、藤島川や京田川によって形成された河間低地上に立地する。今回の調査は都市計画街路事業(県道改良工事)を原因としたもので、調査面積は第1・2次併せて2,280m²を対象とした。以下に調査で得られた成果について要約し、若干の考察を加えてまとめとする。

- 1) 検出された遺構は、井戸跡・溝跡(溝状遺構)・大小の土坑と不定型状の落ち込みなど約120基を数えた。遺構分布の概観は、1次調査区では2箇所の集中区域が認められ、地盤の安定した微高地上を利用したものと認識された。一方、2次調査区では北西域において井戸跡ほかの遺構がある程度まとまって検出された。
- 2) 井戸跡は3基確認され、井戸眼として曲物を設置する例と水道配管施設として竹管を敷設する例の2形態が認められた。18条登録した溝跡には、水路や区画溝としての性格を持つものの他、藤島城二の丸堀の一部の可能性も考えられるものも存在した。その他、土坑や堅穴状の遺構、落ち込みなど約110基余が検出され、本稿では主として構内から時期推定可能な遺物が出土したものについて概述した。
- 3) 2ヶ年の調査で出土した遺物は、土器・陶磁器・瓦器・土製品・石製品・金属製品・木製品・骨格器などで、整理箱にして38箱相当を数えた。分布の概観では、1次調査において遺構内出土のものが大半であったのに対し、2次調査ではその大半が包含層から出土したものであった。これは、1次調査区は搅乱や整地等により遺物包含層が削平されたが、2次調査区域では包含層が遺存した結果と考えられた。
- 4) 陶磁器の器種は食器や調理・貯蔵器が一般的であり、瓦器には焙烙・手あぶり・炭壺などの暖房具を認めた。土製品に難人形、石製品には硯・砥石・戸車など、木製品に椀・箸・曲物・下駄などの各器種が存在した。その他、玩具や文房具の類もあり、多種多様な内容が認められた。
- 5) 陶磁器や瓦器はいづれも国産のもので、在地系と搬入品が認められた。搬入品の生産地は珠洲・瀬戸・美濃・唐津・備前・肥前・有田・伊万里・相馬など、全国各地に及んだ。年代的には藤島城創築にかかる14世紀のものから昭和戦後のものまでを含み、量的主体をなすのは18世紀後半～19世紀代の所産に比定される遺物であった。

遺跡は「藤島城跡」の東方約300mに位置することから、その外郭とされる部分に当たる。遺跡発見の契機となった平成9年度の分布調査では、過去の盛土整地等が原因して中世の遺物包含層は削平されて遺存しないと推測された。今回の調査の結果、江戸時代以降の近世遺構が主体的に検出され、藤島城に関わる中世の遺構については判然としない状況であった。出土した遺物には14・15世紀に比定されるものも含まれるが、流れ込みなど二次堆積の要因が強いと思われる。当該期の遺構が存在した可能性は考えられるが、後世の整地や掘り込み等によって破壊されたと受け取られ、その様相は不明と言わざるを得ない。しかし、前述した

ごとく遺跡は藤島城の外郭部に当たり、立地環境から想定しても中世の街並みが存在していたことが考えられる。また中世以降、近世の町が続いていることは本調査からも実証され、現代に至るまで延々とした歴史のある町と言えるであろう。

庄内平野のほぼ中央に位置する藤島の地は、穀倉地帯の中心的拠点として開けたとともに地理的に陸上交通や水運の要衝であった。このことは流通や交易の発達を想起させ、江戸時代に日本海を往来した「船前船」により、全国各地の物産が運ばれたことは想像に難くない。交易の実態は出土遺物の内容から裏付けられるとともに、当時の庶民生活をも彷彿させる。

《参考文献》

- 山形県 1978:『土地分類基本調査 藤岡』
岡村吉右衛門 1978:『日本の民衆 南北大系27』平凡社
藤島町 1984:『藤島町史 上巻』
矢部良明 1998:『日本やきもの史』美術出版社
伊藤邦弘・布施明子 1990:『藤島城跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第159集
伊藤邦弘・氏家信行 1993:『藤島城跡第5次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第193集
野尻 伸他 1994:『藤島城跡第6次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第18集
須賀井新一・高桑 壮 1997:『荒川2遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第43集

報告書抄録

| | |
|--------|---------------------------------------------|
| ふりがな | ふじしまでーいせきはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 藤島D遺跡発掘調査報告書 |
| 副書名 | |
| 卷次 | |
| シリーズ名 | 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第82集 |
| 編集者名 | 野尻侃 須賀井新人 多田和弘 |
| 編集機関 | 財団法人 山形県埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301 |
| 発行年月日 | 2001年3月31日 |

| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コ一ド | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
|--------------------|----------------------------------------------|------|-------------|-------------------|--------------------|------------------------------------------------------------------------------|------------------------|------------------------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| ふじしまでーいせき 藤島D遺跡 | やまがたけんひがしがわ 山形県東田川 ぐんじしまちやまち 郡藤島町中町 | 6423 | 平成9年 度登録 | 38度 46分 00秒 | 139度 54分 10秒 | 第1次調査 19980916 ～ 19991030 第2次調査 19990913 ～ 19991119 | 880 1,400 | 都市計画街路 事業藤島駅前 花線 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|-------|-----|---------------------|---------------|-------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------|
| 藤島D遺跡 | 集落跡 | 中世 (14・15 世紀) | 溝 | かわらけ 陶器(壺・擂鉢) | 遺構の主的時期は江戸末 ～大正時代まで、陶磁器を 中心とした多様な遺物が出 土した。 |
| | | 近世 (16～19 世紀) | 井戸 土坑 溝 | 陶器(壺・甕・擂鉢) 磁器(壺・碗・皿) 土製品(人形) 石製品(硯・砥石) 金属製品(貨幣) | |

(総出土箱数: 38)

図 版



第1次調査区全景（東から）

図版2



面整理（東から）



トレンチ掘り下げ（西から）



水路跡精査（西から）



断面実測（東から）



溝跡精査（西から）



A区完掘状況（西から）



B区完掘状況（東から）

第1次調査

図版4



SE71土層断面（西から）



SE64土層断面（東から）



SE71井戸眼検出状況①（西から）



SE71井戸眼検出状況②（東から）



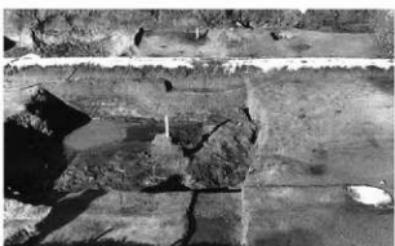
SD23土層断面①（南から）



SD23土層断面②（南から）



SD23土層断面③（北から）



SD23完掘状況（南から）

第1次調査



SD75・SX76土層断面①（東から）



SD75・SX76土層断面②（南から）



SD75・SX76土層断面③（北から）



SD75・SX76土層断面④（東から）



SE71・SD75・SX76完掘状況（空中写真）

第1次調査

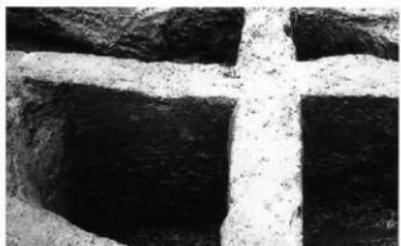
図版6



SK33・SD35土層断面（東から）



SK33土層断面（南から）



SK30土層断面（北から）



SK30・33・SD35完掘（空中写真）



SK44・SD47土層断面①（東から）



SK47・SD47土層断面②（東から）

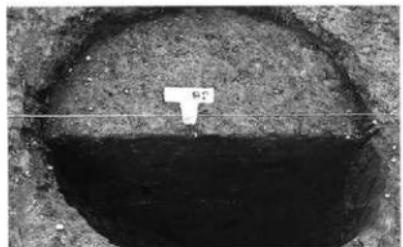


SK42・43土層断面（南から）



SP36土層断面（東から）

第1次調査



SP92土層断面（東から）



SP93土層断面（東から）



SK29・32土層断面①（南から）



SK29・32土層断面②（南から）



SK29・32周辺遺構完掘状況（南から）
第1次調査

図版8



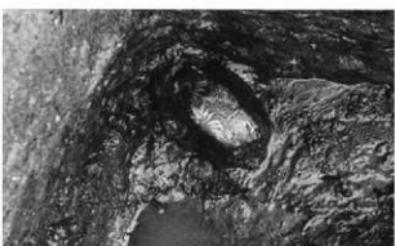
SX38・SK39土層断面①（北から）



SX38・SK39土層断面②（北から）



SK39遺物出土状況①（北から）



SK39遺物出土状況②（北から）



SK66土層断面①（東から）



SK66土層断面②（北から）



SK66完掘状況（南から）



SK66遺物出土状況（東から）

第1次調査



SK78・SP81土層断面（北から）



SK82土層断面（北から）



SD77・SK94土層断面（北から）



SK94土層断面（北から）



SX107遺物出土状況（南から）

第1次調査

図版10



C3~5区検出状況①（西から）



C6区検出状況②（西から）



C2区検出状況（西から）



C1区検出状況（西から）



D3区検出状況（西から）



D1・2区検出状況

第2次調査



SD222完掘状況（空中写真）



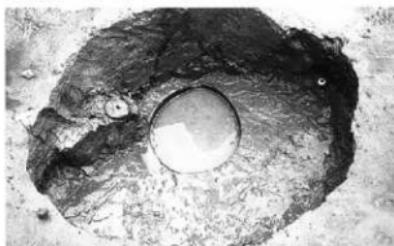
SD222土層断面（西から）



SX224遺物出土状況（南から）



SE250土層断面（東から）



SE250完掘状況（東から）

第2次調査

図版12



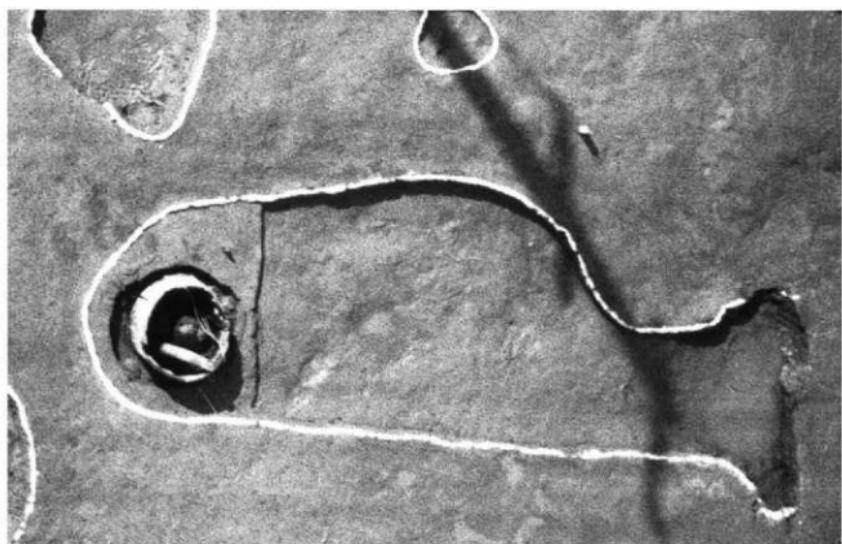
SD205完掘状況（西から）



SD205土層断面（東から）



SX264遺物出土状況（南から）



SD250・SX264完掘状況（空中写真）

第2次調査



D2区水路跡検出状況（西から）



D2区土層断面①（東から）



D2区土層断面②（西から）



D2区遺物出土状況①（東から）



D2区遺物出土状況②（北から）



D1区遺物出土状況（北から）



D1区土層断面（西から）

第2次調査

図版14



D3区水路跡検出状況（西から）



D3区土層断面①（西から）



D3区土層断面②（西から）



D3区遺物出土状況（北から）

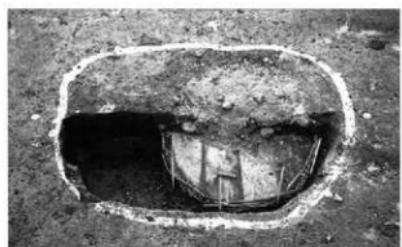
第2次調査



SK201土層断面（南から）



SK201完掘状況（南から）



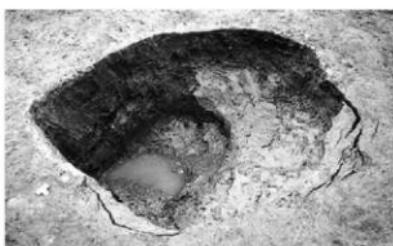
SK215土層断面（東から）



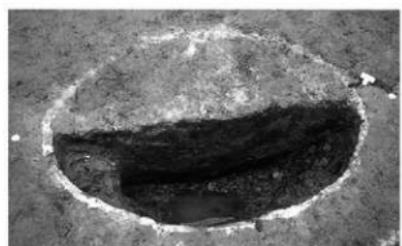
SK215完掘状況（西から）



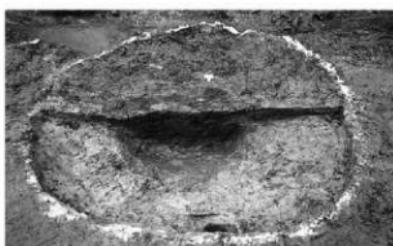
SK221土層断面（東から）



SK221完掘状況（東から）



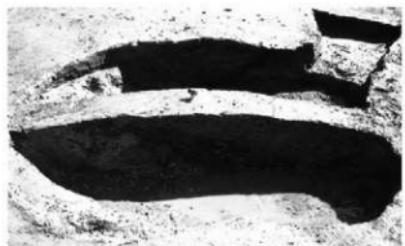
SK248土層断面（南から）



SK225土層断面（南から）

第2次調査

図版16



SK241土層断面（西から）



SK259・SK260土層断面（西から）



SK254土層断面（東から）

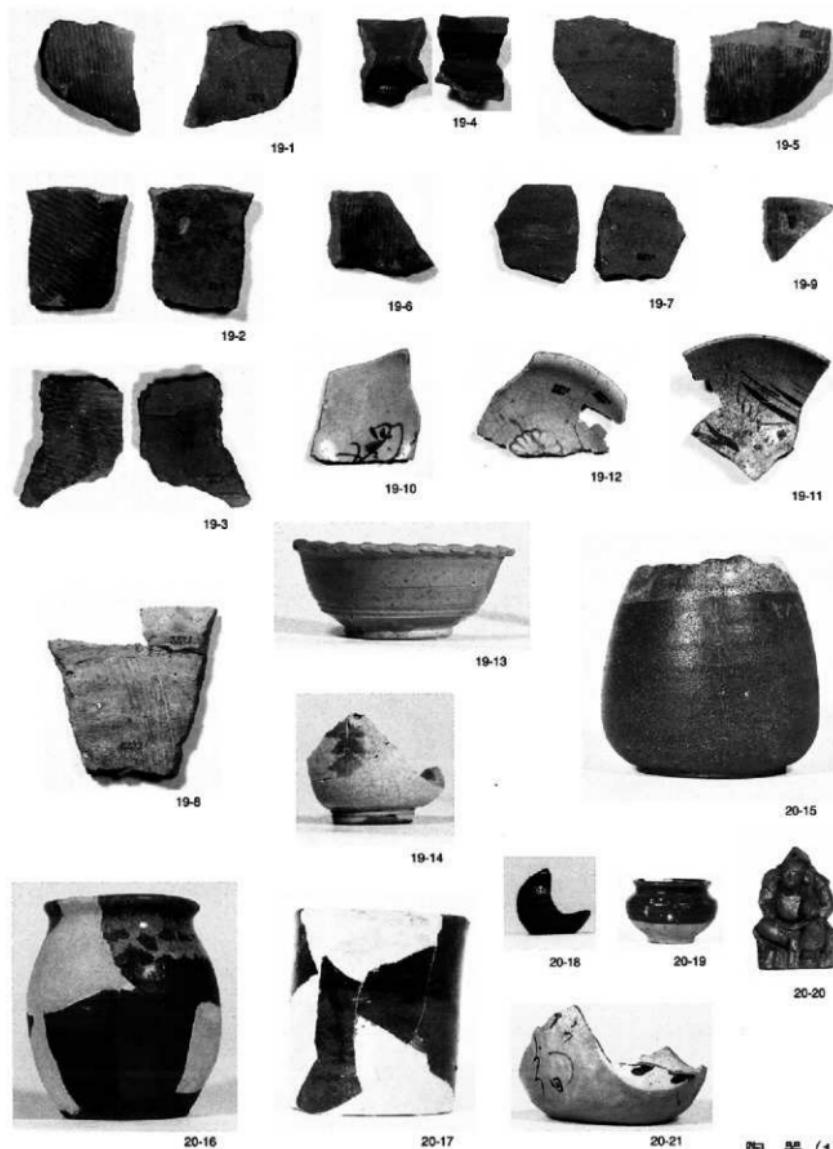


SK230完掘状況（東から）



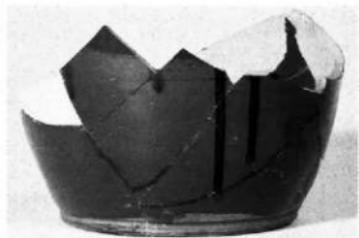
C1区完掘状況（西から）

第2次調査



陶器(1)
第1次調査

図版18



20-22 (1/6)



20-23 (1/6)



20-24 (1/6)



21-25



21-26



21-27



21-31



21-32



21-28



21-29



21-34



21-30

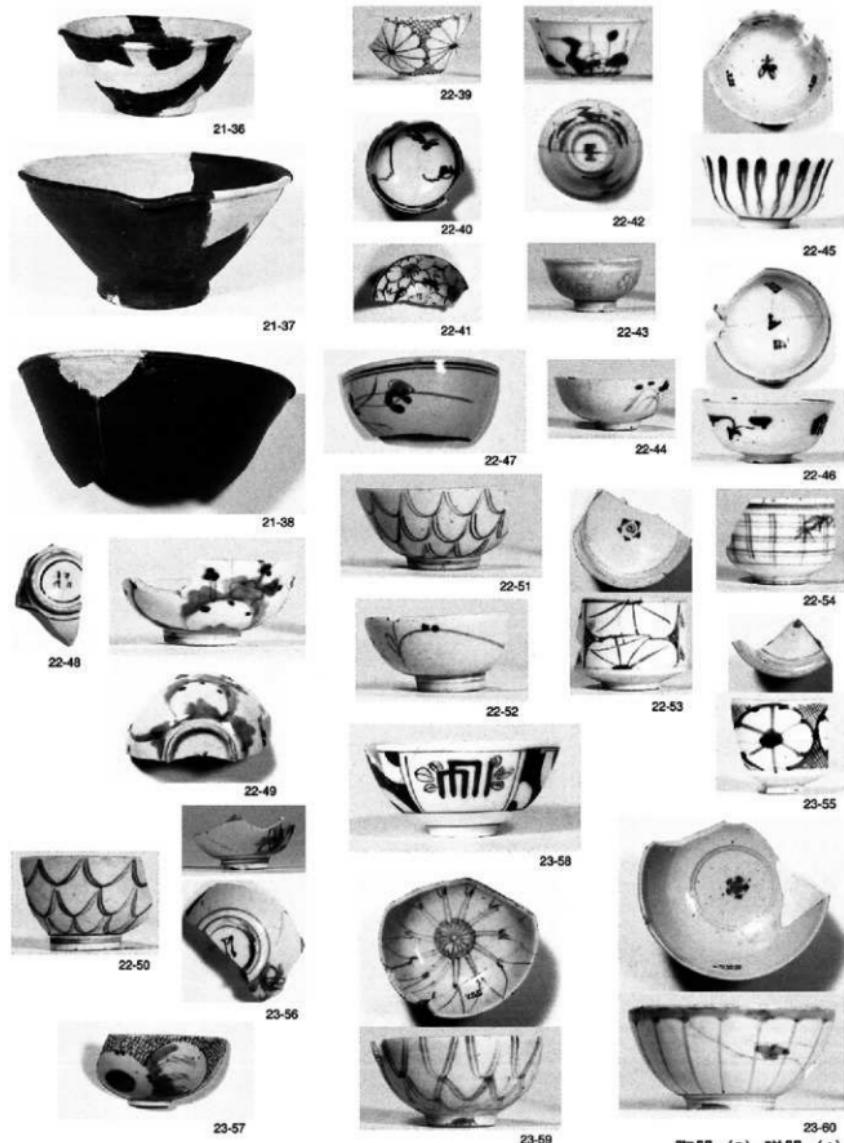


21-33



21-35

陶器(2)
第1次調査



陶器 (3) 磁器 (1)

第1次調査

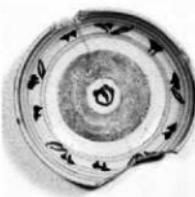
図版20



磁器(2)
第1次調査



25-74



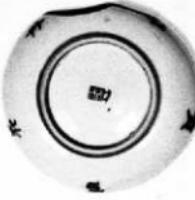
25-75



25-76



25-77



25-79



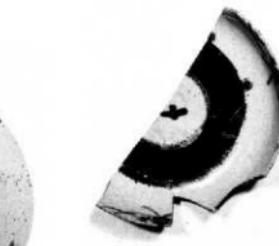
25-80



25-81



25-82



25-83



25-84



25-85

図版22



26-86



26-87



26-89



26-90



27-91



27-92



28-93



28-94



28-95

磁器(4)
第1次調査



磁器(5)・かわらけ・土器(1)

第1次調査

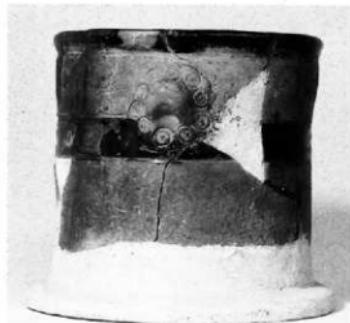
図版24



30-127



30-129



30-126



30-130



30-131



30-132 (1/6)



30-134 (1/6)



30-136



30-133



30-135

土 器 (2)
第1次調査



30-137 (1/6)



30-138



30-139



30-140



30-141



30-142



30-143



30-144



30-145



30-146



30-147 (1/4)



30-148 (1/4)

土器（3）・土製品・石製品・貨幣
第1次調査

図版26



陶器(1)
第2次調査



33-14 (1/6)



34-16



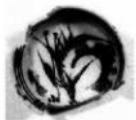
34-17



34-18



33-15 (1/6)



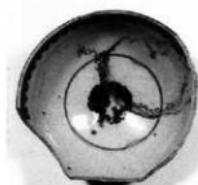
34-20



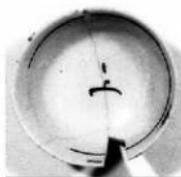
34-19



34-22



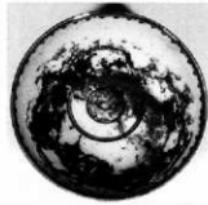
34-21



35-25



35-26



35-27



34-24

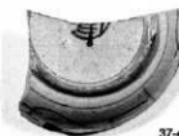
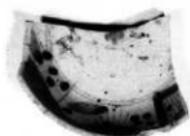
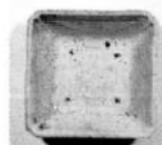
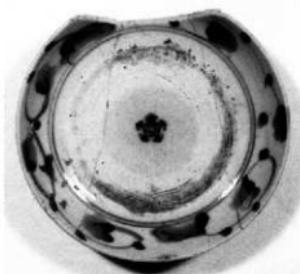
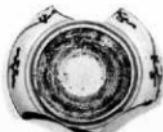
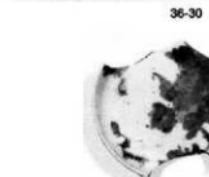
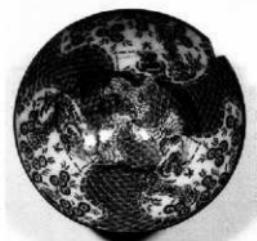


34-23



35-28

図版28



36-36

36-37

37-40

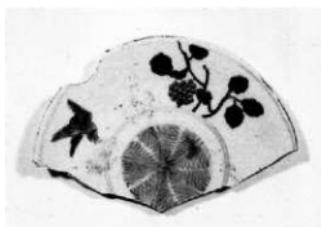
磁器(2)
第2次調査



37-41



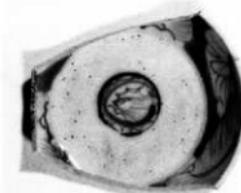
37-42



37-44



37-43



38-45



38-46

図版30



30-47



30-50

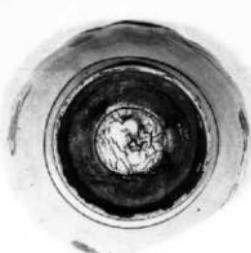


30-48

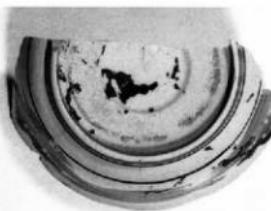
30-49

30-51

磁器(4)
第2次調査



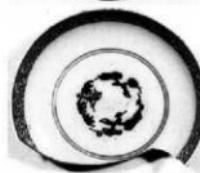
40-55



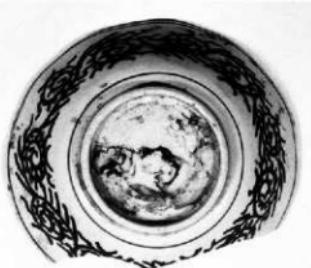
39-52



40-56



39-53



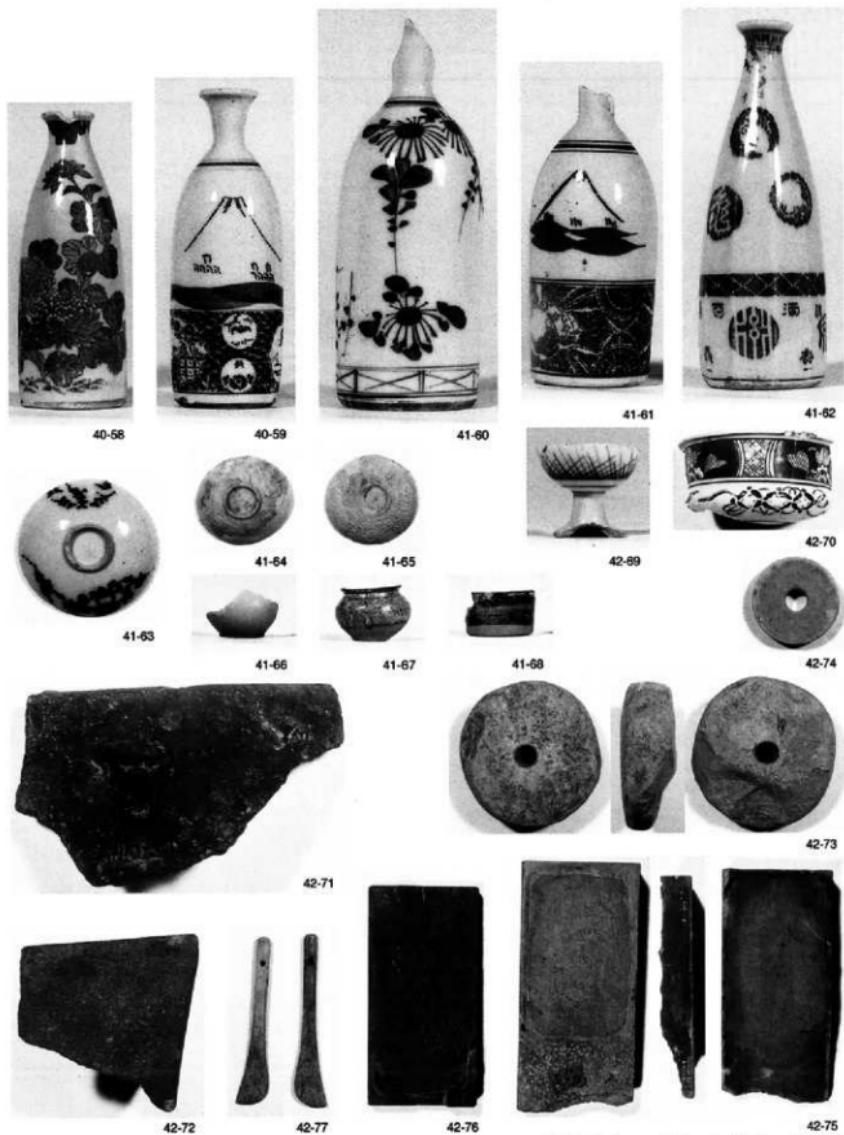
40-54



40-57

磁器(5)
第2次調査

図版32



磁器 (6) · 土器 · 石製品 · 骨格器
第2次調査



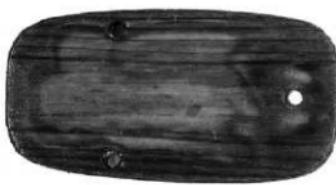
43-1



43-2



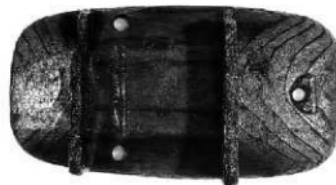
43-3



43-4



43-5



山形県埋蔵文化財センター調査報告書第82集

ふじしま
藤島D遺跡遺跡発掘調査報告書

2001年3月31日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161

山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 田宮印刷株式会社
